

カール・マルクス &

フリードリヒ・エンゲルス 著

ドイツチエ・イデオロギー

リヤザノフ 編

三木清 譯

譯者例言

一、ここに譯出されて岩波文庫に入れられるマルクス・エンゲルスの遺稿『ドイツチェ・イデオロギー』のテキストは、リヤザノフ氏編輯の『マルクス・エンゲルス・アルヒーフ』第一卷二三〇―三〇六頁に於て、初めて公にされ、同氏自身の校訂にかかる。それは、このテキストの前に附せられ（同書二〇五―二二七頁）、ここにもその翻譯を掲げておいたリヤザノフ氏の『緒言』に示されてゐる如く、『ドイツチェ・イデオロギー』の第一部をなし、主としてフォイエルバッハに關係せる部分を含む。それだからこの『アルヒーフ』では『マルクス及びエンゲルス、フォイエルバッハ論』といふ見出しになつてをり、そしてそこにはなほマルクスの『フォイエルバッハに關するテーゼ』（同書二二二―二三〇頁）が加へられてゐる。それに従つて、本譯書に於てもこのテーゼを一緒に譯出しておいた。

一、リヤザノフ氏のテキストは著者たちが抹殺せる文字をも掲げてゐる。そしてこの著作の既に存在する二種の邦譯、即ち『我等』に連載された櫛田民藏、森戸辰男兩氏のもの及び近頃單行本として現はれた由利保一氏のは、共にこれらの抹殺箇所をも譯出してゐる。これらの抹殺された文字は、多くの場合、マルクス及びエンゲルスによつて他の一層適切と思はれる文字によつて置き換へられてゐるか、若くは完結された文章をなさず、従つて今我々にとつて意味不明なものであるかであつて、一般の讀者には必要がないので、この譯書では省いておいた。さうでな

くて、置き換へられもせず、繰り返へされてもをらず、且つその意味を理解し得る文章をなしてゐる若干の箇所は、特にこれを翻譯して載せた。六號活字で組まれハV印の中に這入つてゐるものがそれである。なほリヤザノフ氏によつて脚註として附せられたテキスト批評に關する註も、普通の讀者には不要であるので、我々の譯書では全部略されてゐる。このやうな省略は岩波文庫版にとつて適當であると考へられたばかりでなく、またかうすることによつて、この著作の繙讀が一層便利になり、一層多くの普及性をもつに至るといふことが何よりも譯者の願ひであつたのである。翻譯については前記二種のものに負ふところが多い。記して感謝の意を表する。

一、『フォイエルバッハに關するテーゼ』についても、リヤザノフ氏はそのエンゲルスによつて公表されたテキストとの相違を一々記してゐる。私はこの脚註をも省略したが、讀者は既にこの文庫から出てゐる佐野文夫氏譯のエンゲルス『フォイエルバッハ論』について、もし必要があるときには、それを調べ得るであらう。

一、この著作の成立、その歴史並びにその内容上の意義に關しては、リヤザノフ氏の『緒言』がこれを十分に語つてゐる。我々はここではそれ以上蛇足を添へる必要を見ない。譯者はこの唯物史觀に關する最も貴重な文書が再三再四繰り返して讀まれ且つ思惟されることを希望するばかりである。

一九三〇年五月四日

三 木 清

目 次

一、編輯者緒言……………	七	#5
二、フォイエルバッハに關するテーゼ……………	一一一	#29
三、マルクス草案『ドイッチェ・イデオロギー』への序文……………	三六	#33
四、フォイエルバッハ。唯物論的見方と觀念論的見方との對立		
序 論……………	四〇	#37
A、イデオロギー一般、特にドイツ的イデオロギー……………	四二	#39
B、唯物論的見方に於ける經濟、社會、個人及びその歴史……………	八八	#85
C、國家及び法律の財産に對する關係……………	一二八	#125
D、分業及び財産の諸形態……………	一二五	#132

編輯者緒言

一

ここに我々によつて最初に公にされた原稿は、『ドイツ・エデオロギー』、即ち、マルクス及びエンゲルスがその中でフオイエルバッハ、ブルーノー・バウアー及びスチルナーなるその代表者たちに於けるヘーゲル以後の哲學並びに『その種々なる豫言者たちに於ける』ドイツ社會主義に批判を下したところの著作、の一部分をなしてゐる。

マルクス及びエンゲルスが彼等のこの大作を書きおろして以來、殆ど八十年の歲月が流れ去つた、しかもこの著作はなほ嘗つて完全な形で公にされてゐないのである。我々はここに若干の言葉を書いてこの『不運なる』原稿の歴史を回想しよう。

この原稿のことが初めて公に陳述されてゐるのは、一八四七年四月八日の『ドイツ・ブラッセル新聞』紙上の、マルクスの公開聲明書（四月六日の日附になつてゐる）のうちに於てである。その中でマルクスは、『トリエル新聞』紙上に現はれた一通信に對して反駁しつつ、就中次のことを告知してゐる、即ち、自分はカール・グリューンの書物『フランス及びベルギーに於ける社會運動』についての『一年このかた出來上つてゐる詳細な評論』を『ウエストフェーリッツシャー・ダムブブート』に送るであらう、『この評論たるや、フリードリヒ・エンゲルスと自分とによつ

て共同で著はされた『ドイツ・エ・イデオロギー』（フォイエエルバッハ、ブルーノー・バウアー及びスチルナーなるその代表者たちに於ける最近ドイツ哲學並びにその種々なる豫言者たちに於けるドイツ社會主義の批判）に關する著述の一附録をなすものである。^{*}』

^{*} マルクスのこの聲明はノイエ・ツァイト第十四卷第二號、三九六—九七頁に於て、フランチ・メーリングの論說『マルクスと眞正社會主義再論』の中に再録されてゐる。

それから十年間以上も經てから、この著作のことが再び述べられるに至つてゐる、そして、それはまたさうあるほかあり得なかつたやうに、今度もまた一の——自家告示、即ち、一八五九年、『經濟學批判』の序言のうちに於てである。エンゲルスが『ルードウィヒ・フォイエエルバッハ』の序文——ここに我々は三度目の自家告示に出會ふ——の中で言つてゐるやうに、『カール・マルクスは「そこで」、如何に我々二人が一八四五年ブラッセルに於て、「ドイツ哲學の觀念的見解に對する我々の見解の」——唯物史觀の——「對立を共同で完成することに、實際に我々の以前の哲學的良心を清算することに」着手したかを物語つてゐる。「この意圖はヘーゲル以後の哲學の批判の形で遂行された。二卷の分厚な八折本よりなるこの原稿は、諸事情の變化でその印刷が不可能になつたといふ通知を我々が受取つたときには、もうずつと前にウエストファリアに於けるその出版所へ届いてゐたのであつた。我々は我々の主要目的——自己了解を遂げてゐたので、そのために快くその原稿を鼠が嚙つて批判するのに委せた。」それ以來四十年以上の歲月が流れ去つた、そして我々のいづれもにこの題目に立ち戻る機會が與へられることなしに、マル

クスは死んでしまつた。ヘーゲルに對する我々の關係について、我々は所々で我々の見解を發表して來たが、さりとて何處でも包括的な聯關に於てこれをなしたことはなかつた。まことに多くの關係に於てヘーゲル哲學と我々の見解との間の中間項を形作つてゐるフォイエルバッハへは、我々は嘗て再び立ち戻らなかつたのである。』

エンゲルスのこの敘述に於ける若干の不精確な點については後段に至つて指示されるであらう。原稿のことについては、エンゲルスは單に、彼がフォイエルバッハに關する彼の著作を印刷に送り出すに先立つて、『一八四五—四六年の舊稿をもう一度探し出して目を通した』といふことだけを我々に傳へてゐる。『フォイエルバッハに關する章は完成されてゐない。出來上つてゐる部分は唯物史觀の敘述からなつてゐるが、それは經濟史についての我々の當時の知識が如何になほ不完全であつたかを證明するものに過ぎない。フォイエルバッハの學說そのものの批判はそこには欠けてゐる、それだからそれは當面の目的にとつては役に立たなかつた。』

十五年後に至つて初めてメーリングはその『マルクス・エンゲルス遺稿』の中でこの原稿についての若干の補足的な資料を提供した。

『ドイッチェ・イデオロギー』に關する著作は、それが出來上つてゐる限り、マルクス及びエンゲルスが遺した諸手稿の間に見出される。これの公表は彼等の全集の刊行まで延ばされなければならぬ。その第一卷はブルーノー・バウアー、スチルナー及びフォイエルバッハの諸見解の批判的研究を含んでゐた。『ドイッチェ・イデオロギー』の第二部はドイツ社會主義の種々なる豫

言者たちに充てられたのである。』（メーリング、遺稿、第二卷、三四六―四七頁。）

疑ひもなくメーリングは嘗て『ドイッチェ・イデオロギー』を見たことがなかつた筈である。

彼はその註釋の中で、マルクス及びエンゲルスの諸見解の發展を跡づけるという課題を自己に課しはしたが、しかも彼はベーベル、むしろ正確にいへば、ベルンシュタインのもとで、マルクス及びエンゲルスの原稿を、よし公表する權利とはゆかないまでも、少くとも利用する權利を、贏ち得ることが出来なかつた。尤も、彼がさうした原稿をひとつ受取つたといふ指示が存在してゐる。これは『ライプチヒ宗教會議』のことをいふのであつて、それについては彼は同じ『遺稿』（九五―一〇二頁）の中で報告してゐる。我々はこの原稿の『祕密』が彼にはどこまでも知られずにゐたといふことを見るであらう。

『遺稿』の第二卷が出てから間もなく、ベルンシュタインは彼の『社會主義諸文書』の中で——一九〇三年一月以降——スチルナーに關する大部なマルクス・エンゲルスの原稿の公表を始めた。彼がこの著作の前に附した解説の中で、ベルンシュタインは、この著作は、マルクス及びエンゲルスがその中でヘーゲル學派の最左翼に屬する彼等の以前の戰友たちを『清算せる』ところの一のなほヨリ大部な著作の一部分をなすものであるといふことを指摘してゐる。〔この原稿〕は『かやうなものとして單に一の大なる歴史的興味をもつばかりでなく、また内容的に見ても不朽（#「朽」は「汚」が木偏になつた字体である）の價值ある多くの箇所を供してゐる。』ベルンシュタインはなほ附け加へていふ、『この原稿はその眞先にローマ數字のⅢといふ字を戴いて

ゐるが、このことだけでも、それが或る綜合著作の一部分のつもりであつたことがわかる。その最初の諸文章に於てそれは、メーリングが先きに挙げた書物の九九頁以下に於て論評してゐるところの論文『ライプチツヒ宗教會議』に連絡してゐる……』

これによつて知られるやうに、ベルンシュタインは、彼がスチルナーに關するマルクス及びエングルスの著作の公表に着手したとき、『全體』——その一部分を彼は彼の『社會主義諸文書』の中で一九〇三年及び一九〇四年に印刷させたが完結するには至らなかつた——についてはかなり不明瞭な觀念しかもつてゐなかつたのである。

* その後十年して、彼は更に、『ドイッチェ・イデオロギー』のスチルナーの反駁に充てられた部分の一節（『私の自己満足』）をタイプライター複寫版の雜報通信、『勞働者雜報』クルト・アイスナー編輯、ミュンヘン、一九一三年三月九月の第八號に公表した。

『遺稿』の第二版（一九一三年）への跋文の中でメーリングは、一九〇二年から一九一二年までの間に公表された新しい諸事實をもととして、種々なる補足をしてゐるが、しかし彼はこの公表されたマルクス・エンゲルスの原稿のことにただ單に言及することをさへ必要であると思倣してゐないのである。

一九一八年に至つて初めて、そのマルクス傳の中で、メーリングは再び『ドイッチェ・イデオロギー』のことに關説してゐる。（メーリング著、カール・マルクス、一一五——一二七頁）。ヘーゲル以後の哲學の批判に充てられたる彼等の共同の著作についてのマルクス及びエンゲルスの敍

述を再録してそれに附け加へてメーリングは云つてゐる、『ところでまた全く言葉通りの意味で鼠どもがこの原稿を手にかけた、しかしそれから免れて残つた諸斷片を見れば、著者たちがこの不運についてあまりひどく悲觀しなかつた理由がわかる。』この言葉たるや、それが『聖マックス』を讀んでそれにもとづいて言はれてゐるものとする限り、少くとも奇妙に見える。そしてそれは、若し我々にして彼のそのさきの諸論述を讀むならば、なほ一層わけのわからないものになつて来る。

ただひとつのことだけは明白である、即ち、メーリングは、彼がマルクス及びエンゲルスの傳記家として並びに彼等の遺稿の編輯者としてこの原稿についての知識なしにはやつてゆくことが出来ないのを知つてゐなければならなかつた筈であるのに、一九〇二年以後に於てもやはりマルクス及びエンゲルスのこの著作を親しく見ることが出来なかつたか、それともこれを欲しなかつたのである。彼は敘述の仕方の陳腐とか、度はづれの爭論の濫用とか、銜學的な措辭や空言贅語とかを指摘してゐるが、そのいづれのものもこの場合辯解の理由として役立つことが出来ぬ。

『聖マックス』に於て、古代哲學の歴史に立入つてゐる餘論の如き、世界主義、中世の教權制及び教權制一般に關する、政治的自由主義及びカントに關する、フランス革命に關する、市民階級及びプロレタリア階級に關する、共產主義に關する、人格及び階級、等々に關する、箇所の如き、オアシスを指摘すれば、それでもつてメーリングの意見に同意し得ぬことを宣明するには十分である。メーリングはこの場合、實際、行き詰り——マルクス及びエンゲルスの全遺稿をその手に

入れることの不可能——を轉じて輕々しくも一の『理論』となし、かくして本來マルクス及びエンゲルスの凡てのこれらの著作はなんら格別の重要性をもつものでないといふ結論に達してゐるのである。このやうに、彼の最後の著作に於てもまたメーリングの凡ての歴史的著作の有する原理的な缺陷が現はれてゐる、即ち、彼は批評家であり、政治記者でありはしたが、研究家ではなかつたのである。

シュヴィツァー傳の著者たるグスタフ・マイヤーは、彼がエンゲルスの傳記に取りかかつたとき、メーリングとは違つた仕方では彼の仕事に着手した。彼は第一着手として、必要な資料を、先づ印刷された資料を、次にまた手記のままの資料を蒐集し且つ批評することをもつて始めた。そしてこの點に於て彼はメーリングよりも恵まれてゐた、即ち、彼はベルンシュタインから原稿の一部分を手に入れることに成功したのである。マイヤーの書物に於て『ドイツ的イデオロギーの清算』に充てられたる章を通過するだけで、メーリングが、黨を通じて——若し黨にして苟くも彼にマルクス及びエンゲルスの遺稿を編纂することを委嘱してゐたのであれば——一切のそのために必要な資料を彼の自由に委せるやうに要求する權利を放棄したのは、あまりにも輕々しかつたといふ結論に達するに十分である。

* グスタフ・マイヤー著『青年時代のフリードリヒ・エンゲルス、一八二〇年から一八五一年まで。』、第

一卷、二三四—二六二頁。

マイヤーが傳へてゐる諸斷片の中に於て既に、我々は如何に觀念論的立場と唯物論的立場との

間の對立がヘーゲルの體系の内部に於て形成され且つ發展したかについてのこの上もなく重要な諸指示を見出す。そしてまさにそこに於て我々は唯物史觀の我々に知られてゐる限りでは最初の定式を見出すのである。

惜しいことにグスタフ・マイヤーは多分『ドイッチェ・イデオロギー』の保存されて残つてゐる全部を手もとにもたなかつたものと思はれる。エンゲルス傳の起草の當時、彼はなほ凡ての原稿の聯關を見通してゐなかつた。彼はその當時なほ、『ライプチツヒ宗教會議』——これは、それについてひとはただ臆測をめぐらすのほかないなんらかの不思議な仕方で、ベルンシュタインのもとにある諸原稿から既に一九〇一年に引き離されて、ドイツ社會民主黨のアルヒーフの中へ這入つてゐた、——も同じく『ドイッチェ・イデオロギー』の一構成部分をなすものであるといふことについてさへも、はつきりしてゐなかつたやうに見える。^{*}その後彼によつてその全文が刊行された『ライプチツヒ宗教會議』への彼の『緒言』の中で初めて、マイヤーはこの原稿を『ドイッチェ・イデオロギー』のひとつの『章』として取扱つてゐる。^{**}けれどもこの機會に彼は全著作の構造を再構成することを實行しなかつたのである。

* 前掲書、二四三—二四四頁、四〇三—四〇四頁。

** 社會科學及び社會政策アルヒーフ、第四七卷、第三號（一九二二年一〇月）、七七三—七八二頁。

さて私は多大の努力をもつてこの我々を關心せしめる原稿のばらばらになつた部分の多分凡てを蒐集することに成功した。私は『多分』と云ふ、といふのは私がもつてゐるのは要するに、ベ

ルンシュタインが私に與へてくれたものだけであるに過ぎないからである。我々はエンゲルス自身によつて排列されたなんらの目録をももつてゐない、我々は、人々がエンゲルスの死後その遺された諸手稿を取扱つたやり方の信ずべからざる輕率さにかんがみて、その嚴密な數へ上げを遂行するといふ方策が執られたといふ保證をもつてゐないのである。

私はベルンシュタインから受取つた原稿の最初の判讀の後に私が次の諸部分を手もとにもつてゐることを確めた。即ち、

一、ローマ數學Ⅰと記號のついた『眞正社會主義の哲學』に關する原稿。

二、ローマ數學Ⅲと番號を附けられそして『聖マックス』に充てられた甚だ大部な原稿。この中からベルンシュタインは、彼が『社會主義諸文書』の中に——大いに省略して——印刷したところの諸章を取つたのである。半分以上のものはなほ印刷されずにある。これは『ドイッチェ・イデオロギー』の最も大きな部分であつて、實際その量からみてスチルナーの著作そのものにも劣らぬものである。

三、ローマ數學Ⅳをもつて記しづけられそして眞正社會主義の歴史敘述に充てられた原稿。この部分は既に一八四七年に『ウエストフエーリッシャー・ダンブルート』に印刷され、且つベルンシュタインによつて『ノイエ・ツァイト』（第十八年）に再び公表された。これは社會主義の歴史家としてのカール・グリューンに容赦なき批判を下してゐる。

四、ローマ數學Ⅴと番號を附けられそして『ホルシュタイン出のゲオルク・クールマン博士ま

たは眞正社會主義の豫言』といふ表題の原稿。

これらの原稿のほかに私はなほベルンシュタインから『ルードウイヒ・フォイエルバッハ』といふ表題の大部な原稿を受取つた。それを見深く通覽した結果、ベルンシュタインがそれに通し頁を打つた——一から一六までの——のは間違ひであつて、彼が二つの原稿をいつしよくたにしたのであることが私に明かになつた。その一つの方は實際にフォイエルバッハを取扱つてゐるが、しかしいま一つの方は、『福音書の批判の諸研究』といふ表題がついてゐて、これは全くなんら原作でなく、却つてエンゲルスによつて——恐らく間違ひのないところなほ一八四一年に——なされたる、三つの福音書批判の著作——その第一のものはブルーノー・バウアーの『共觀福音書記者の福音史の批判』（第一卷、一八四一年）である——からの諸拔萃を含んでゐる。

このやうにして第一の群のうちにはローマ數字Ⅱと記號のつけられてゐる筈の原稿が缺けてゐた。ベルンシュタインは、そのやうな原稿が存在してゐたし且つそれはブルーノー・バウアーについて取扱つてゐたといふこと、しかるに彼はそれをメーリングに手渡したが、メーリングはそれを返さなかつたといふこと、を私に確言した。私はメーリングの諸手稿のうちにそのやうな原稿が存在してゐないことを確めた後——この確認を私はエドゥアルド・フックスから得た——私は『ライプツヒヒ宗教會議』の原稿に細心の研究を加へた。その結果、それがその最後の頁にエンゲルスの筆跡でローマ數字Ⅱと記號をつけられてをり且つなほ『ブルーノー・バウアー』といふひとつの特別の表題をもつてゐることが明かになつた。

恐らく、メーリングはそれをベルンシュタインから借り受けた後、マルクスの哲學上の學位論文の原稿と一緒にそれをアルヒーフへ返還したものであらう。

かくて我々の原稿は、若し『ドイッチェ・イデオロギー』にしてフォイエルバッハ、ブルーノー・バウアー及びスチルナーに關する部分と眞正社會主義の種々なる豫言者たちに對して向けられた部分との二つの部分に分割されるならば、次のやうに配分されるであらう。即ち、『ドイッチェ・イデオロギー』の第一卷は、フォイエルバッハに關する原稿、ブルーノー・バウアーに關する原稿（原稿番號Ⅱ）及び原稿番號Ⅲから組成され、第二卷は、原稿番號Ⅰ（眞正社會主義の哲學）、原稿番號Ⅳ（眞正社會主義の歴史敘述）、原稿番號Ⅴ（クールマンまたは眞正社會主義の豫言）から組成される。第二部にはまたクリーゲに反對した宣言（眞正社會主義の戰術及び經濟學）並びにグリーン及びベックに反對した論說（眞正社會主義の詩歌）が加へられる筈のものであつたらう。この最後の二つの著作は一八四六年と一八四七年とに『ウエストフエーリツシャー・ダンプブート』と『ドイツ・ブラツセル新聞』とに印刷された。そのほかに我々はなほ、同じく眞正社會主義について取扱つてゐるエンゲルスのひとつの原稿をもつてゐる。

* このやうな分割を普通にメーリング、ベルンシュタイン及びマイヤーは採用してゐる。マルクス及びエンゲルスが、一八四六年に、ワイデマイヤーの手を通じて、彼等の批判を印刷に附する試みをなしたとき、彼等が第一卷の中から單にブルーノー・バウアー及びスチルナーに關する批判だけを送つたといふことは、殆ど間違ひのないところである。

我々のアルヒーフの本巻に於ては、我々は『ドイツチェ・イデオロギー』の第一の、フオイエルバッハに充てられた部分を公表する。

二

我々はここに我々によつて印刷に附せられた原稿の意義を詳細に示さうとは思はない。エンゲルスが既に全く正當に指摘したやうに、その出来上つてゐる部分は唯物史觀の最も早期の敘述をなしてゐるとはいへ、それは完結されてゐないのである。併しながらエンゲルスが、彼の通覽した原稿のうちにはフオイエルバッハの學說の批判は見出されなかつたと云つてゐるのは間違つてゐる。讀者は、この批判が、惜しいかな遺漏もあり、推敲されてもをらずまた全く完結されてゐないけれども、とにかく提供されてゐるのを見るであらう。なほ遺憾なことには原稿の若干頁が紛失してしまつてゐる。更に讀者はさきになつて、エンゲルスが一八八八年に、即ち、四十五年後に、この原稿は如何に『我々のその當時の歴史的・經濟的知識が不完全であつた』かを示してゐると云つてゐるのは、全く彼の謙遜であつたことを見るであらう。

尤も我々は——エンゲルスのこのやうな聲明に關聯して——マルクス主義の歴史に於て一つ首要な意義をもつひとつの問題、即ち、如何なる程度まで唯物史觀はマルクスの、及び（或る程度までは）エンゲルスの獨創的創造の所産であるか、といふ問題に立ちとどまつて論ずることが必

要であると考へる。

ここに我々によつて印刷に附せられた原稿は初めてかくの如き研究に對して一の嚴密に確立せる出發點を與へる。我々は今や、『哲學の貧困』及び『共產黨宣言』の中で述べられたが如き唯物史觀がマルクス及びエンゲルスによつて定式化されたのは、遅くとも一八四五年の秋より後のことではない、といふことを知るのである。

マルクス及びエンゲルスが我々のここに上梓した原稿の中で引合に出してゐるフオイエルバッハの論説が掲載されたヴィガンツ四季誌は、一八四五年の春か若くは初夏に發行された。

既にこのことからして、マルクス及びエンゲルスに先行した種々なる思想家たちが唯物史觀の創始者としての彼等に對して及ぼしたかも知れない影響を跡づけることをもつて目標とするどのやうな研究も、上に擧げた年月以後に現はれたところの哲學、歴史、文化史及び經濟史の領域に於ける一切の著作をば、その研究の範圍から除外せねばならぬ、といふことは明瞭である。

* 『唯一者とその所有に對する關係に於てキリスト教の本質について』スチルナーに對するフオイエルバッハのこの答辯は彼の著作集の第七卷に載録されてゐる。

ゲオルク・フォン・ペロウは、マルクス主義がその成立にあたつて經濟史の領域に於けるドイツの文獻と如何なる關係をもつたであらうかといふ點を確定するために、一の甚だ興味ある試みを企てた。^{**}彼は——方法論的には全然正しい手續である——如何なる書物がマルクス及びエンゲルスの『讀書圈』内に達し得たかを確定しようと骨折つてゐる。そして彼は次のやうな結論に到

つてゐる、曰く、『唯物史觀』——このものを彼は歴史に於ける經濟的要素の優越についての理論と混同してゐる——は既に當時の雰圍氣のうちに存したのであり、マルクス及びエンゲルスの獨創性は、既に他の研究者たちもまた到達してゐたところの諸成果を特に明晰且つ判明に定式化したところにあつたのである。

* * ゲオルク・フオン・ベロウ著『解放戰爭から現在に至るまでのドイツの歴史敘述』、ライプチヒ一九一六年刊、一二四—一八〇頁。第二版は『中世史並びに近世史提要』の一篇として出てゐる。ミュンヘン及びベルリン、オルデンブルク書店、一九二四年發行、一六一—一九四頁。

ベロウはなほまたひとつの他の問題を——これも方法的には全然正しい——提起してゐる、曰く、經濟史に對する關心がマルクス及びエンゲルスの知らずにゐた筈のないドイツの文獻のうちに實際既に存在してゐたといふ事實が確められ得ることを認めるとしても、この場合なほ一層重要なのは、これらの文獻が如何なる結果にまで既に達してゐたか、言ひ換へれば、マルクス及びエンゲルスは、彼等が『市民的社會』の經濟的發展に關する彼等の圖式を作り上げるにあたつて、何をこれらの文獻から學び得たか、を確定するといふことである。

それはとにかく、ベロウは確かに、彼の氣に召さぬマルクス主義なるものが特定の歴史的時期と結びついてゐるといふこと、マルクス主義にとつて本質的な歴史觀が或る任意の歴史的瞬間に出現し得たものでないといふこと、を理解してゐる。彼がロマンティクの重要性を強調してゐることによつて、彼はそれによつて既に、フランス大革命なしには、世界の諸狀態の革命的變革の

この試みなしには、この世界の新しい理解は考へ得ぬことであらうといふことを承認してゐるのである。既にこの理由からだけでも彼は、なほ相變らず『剽窃』呼ばはりの舊い立場を代表し、マルクス主義の生成を問題とする代りに、何處からいつたいマルクス及びエンゲルスは彼等の見方を『盗んで』來たかといふことを問題にしてゐるゾムバルトの如き歴史家や『社會學者』よりも限りなく高い見識をもつてゐる。

ペロウは彼の研究を單にドイツの文獻のみに制限した、しかるにこの彼の精通せる領域に於てさへ、彼は遺憾ながら一列の甚だ重要な諸著作を逸した。それにも劣らず重要なのは、ドイツの文獻に相應するフランス及びイギリスの文獻を討究することである。マルクスは既に『神聖家族』の中で、彼等の唯一の知識の源泉——シュタインの書物『今日のフランスの共產主義と社會主義』——がイギリスの諸體系については沈黙してゐるといふただそれだけの理由から、イギリスの諸體系（ここでは社會主義的諸體系のことをいつてゐるのである）についてはまるで何も知らない『批判家』たちを嘲笑してゐる。

既にパリに於てマルクスは、フランスの歴史の勉強と同時に、イギリスの歴史及び經濟學の勉強にかかつてゐる。『獨佛年誌』及び『フォルヴェルツ』に現はれたエンゲルスの論説は彼にこの方面に於てひとつの新しい衝撃を與へてゐる。ルーゲに反對せる論説——同じ『フォルヴェルツ』に於ける——の中で既に、マルクスはイギリスの政治史及び社會史の中の諸事實を引き出して論じてゐる。

一八四三年及び一八四四年の間のマルクスの『讀書圈』については、この時期に出來た彼の諸論説のみならず、彼のノートブックがまたここかしこで我々に指示を與へる。

特に興味のあるのは、マルクスがパリへの旅立の準備をし且つヘーゲルの法律哲學の批判に従事してゐた一八四三年の夏にかかはる諸指示である。我々はフランスの歴史に關する書物——そのうちにはシュミット、ワックスムート、シャトウブリアン、ラクルテルがある——、イギリスの歴史に關する書物（就中リエンハルト、ラッペンベルク、ラッセル）、ドイツの歴史に關する書物（ランケ）、政治學説の歴史に關する書物、メエゼルの『愛國的空想』、マキャヴェリ、ルッソ、モンテスキューからの抜き書きを見出す。パリに於てマルクスは、フランスの歴史についての勉強を繼續した、そしてそののみか一時は、國民議會の歴史を書かうとさへもくろんだのであつた、しかも同時にまた彼は合衆國及びイギリスの歴史についても多くを讀み、社會主義者たちや經濟學者のリカルドオ及びマツカロックを勉強した。

我々はルーゲを通して、如何にみつしりとマルクスがパリに於て勉強したか、を知つてゐる。

エンゲルスは、彼が一八四四年の九月にマルクスと一緒にブルーノー・バウアーに對する反駁論文への序言を起草した時分には、マルクスがその論文を一冊の纏つた書物に變へてしまはうといふこと、そして彼等二人がこの序言の中で強調したところのかの『現實的ヒューマニズム』がその書物そのものの中ではひどく影の薄いものにされようといふこと、は考へてゐなかつた。そしてマルクスが、彼の勞作の過程に於て、如何なる程度までフォイエルバッハを超越するに至つた

かは、『神聖家族』の中の次の箇所がこれを示してゐる、『或ひは、批判的批判は、自然に對する人間の理論的並びに實踐的態度、即ち自然科學と産業とを歴史的運動から除外しながら、歴史的現實の認識に於て單、初にだけでも達したものと信じてゐるのか。或ひはそれは、例へば或る時代の産業、即ち生の直接的な生産の仕方そのものを認識することなしに、この時代を實際に既に認識したものと考へてゐるのか。』（『神聖家族』二三八頁。）

一八四五年の四月にエンゲルスが、パリから追放されたマルクスの移り住んでゐたブラッセルにやつて來たとき、彼は直ちに、彼の友達が斷然『現實的ヒューマニズム』と絶縁してゐたといふ事實を確かめた。後に、一八八八年に、エンゲルスによつてマルクスの古いノートブック*の中に再び發見されたフォイエルバッハに關するテーゼは、この時期のものである。

* エンゲルスが『綴り』といつてゐるのは不正確である。

このノートブック——私はそれをラファエル家に紛れ込んでゐたマルクスの諸手稿の間に發見することに成功した——の中にはなほ、マルクスが讀むつもりでゐた若くは手に入れるつもりでゐた書物の若干の内容目録が見出される。これはその大多數が經濟學、社會主義及び歴史に關する書物である。期待される筈のことでもあつたが、マルクスは、彼がブラッセルの圖書館に於て彼を關心せしめる諸問題に關して見出すことの出來た凡てのものを知り且つ讀破しようと努力した。しかも彼の注意の中心點には經濟學、經濟史及び政治理論が立つてゐる。我々はマルクスが既にその當時經濟理論並びに政治理論の歴史を書くことをもくろんでゐたのを知つてゐる、——

これはエンゲルスもさうであつて、エンゲルスは丁度『イギリスに於ける勞働階級の狀態』に關する彼の書物を印刷に渡して、イギリスに於ける社會運動の歴史を計畫してゐた。一八四五年の夏、二人はイギリスへ赴き、そこに彼等は——主としてマンチェスターに——六週間逗留した。

この時期のもので保存されて残る若干の綴りを見ると、マルクスがマンチェスターに於てソムブソン、コベット、シーニョア、クーパー、エドモンゾ、トウク、リカルドオ、マツカロック、ウエード、エーデンを讀んだといふことがわかる。

かくて我々の引き出し得る結論は次の如くである、即ち、マルクスは、そして彼と一諸にエンゲルスは、彼等が一八四四年の終に、産業の知職なしに歴史的現實を理解し得べきならその可能性も全く存しないといふ結論に到達して以後、彼等にその當時知られてゐた全部の文獻を涉獵したのである。マルクス及びエンゲルスが彼等の唯物史觀をば誰か或る一人の、ただ彼等だけが知つてゐるにとどまつた歴史家乃至經濟學者から剽窃したなどと信ずるのは、歴史的感覚の全然缺如してゐるでなければ出來ないことである。

最近に於てこの種の試みをなした者にゾムバルトがある。彼は經濟史及び社會主義の歴史に關して數卷の書物を書き上げてゐるのだが、しかも今日に至るまでなほ觀念の歴史的被制約性についてまるで理解するところがないのである。それだからこそ彼は、なんらの危惧もなしに一の與へられた觀念體系をばその歴史的根柢から切り離して、これを一の他の時代へ移し込むことが出来るのである。そして事實、若しもマルクス及びエンゲルスの學說にして、フランス大革命も、

イギリス及び大陸に於ける産業革命も、ブルジョアジーとのプロレタリアートの闘争も、ヘーゲルも、フォイエルバッハも、リカルドオも、オーエンも、フリーエも知らぬひとりの人間の頭脳の中にしかく容易に飛び出して來ることの出来るやうな觀念の一體系を現はしてゐるとするならば、その場合にはもちろん、マルクス及びエンゲルスがしかく巧妙に剽窃したところのかの祕密の著者を發見するといふことは結局に於て可能でなければならぬ、と結論するのは難しいことではないのである。

幸運の巡り合せて到頭ゾムバルトは、永い間の探求の果てに、『唯物史觀を發見する必然性は決して十九世紀に存在してゐたわけではなかつた』ことを既に一七七一年に於て示した著述家を見出すことが出來た。否、それにとどまらない。ゾムバルトが遂に見出した書物の内容は、彼の意見に従へば、『種々なる文化領域への唯物史觀の嘗て存在する最も完全な適用』を示してゐるのである。この發見はゾムバルトが彼の論文『社會學の發端』*の中でなしたところである。マルクス及びエンゲルスが、恐らく、それを永久に埋没させた忘却の闇から、ゾムバルトによつて引き出された事物といふのは、グラスゴウ大學法律學教授ジョン・ミルラア著、『社會に於ける等級の差別に關する考察』ロンドン一七七一年刊、である。

* マックス・ウェーバーに捧げられたる二卷の記念論文集『社會學の主要問題』の中で發表された。

ゾムバルトの引用せる唯一つの引用文でさへもが、ミルラアが單にモンテスキューの學派を卒業した十八世紀後半の無數の『文化史家』の一人であるに過ぎないことを示してゐる。このやう

な事柄に精通してゐるのを誰も否むことの出来ないところのクローノーは、ミルラアをばリングエよりもずつと低く評價してゐる。彼は書いてゐる、『ミルラアは社會階級なる概念を一般になほ知つてゐない。彼は單に等級及び身分の差別について知つてゐるにとどまり、且つこれらの差別を、たとひ彼は彼の書物の若干の箇所^{*}に於て富の等級的地位に及ぼす影響について語つてゐるにせよ、舊い圖式に従つて、ヨリ強い社會成員のヨリ弱い社會成員に對する物理的優越に歸してゐるのである。階級構成の經濟的基礎を彼は見てゐない。』

* クローノー著『マルクスの歴史、社會並びに國家理論』第一卷一一九頁。

マルクスは彼が、ミルラアからの二三の引用文を書き込んでゐた綴りを湮滅しておくのを忘れたほど不用意であつた。彼は、疑ひもなく、この書物を通讀したのであるが、しかしそれは全然他の聯關に於てであり、且つなほ彼が『ドイツ的イデオロギー』の批判を書いてから多くの年を経た後のことであつた。一八五二年八月、ロンドンにて、と日附の書かれた特別の綴りの中に我々は、婦人の歴史（ユング、セギュール、マイネルス、トーマス、アレキサンダー）及び一般文化史（アイヒホルン、ワックスムート、ドウルマン）を取扱つた一ダースの書物の間に、ミルラアを見出すのである。そして事實、ミルラアの書物の三分の一は種々なる時代に於ける婦人の地位について論じてゐる（第一章）。後段に至つてミルラアは家長の裁判權と強力、種族の成員に對する酋長または長老の強力、主權者の強力及び奴隸並びに奴僕^{*}の地位を取扱つてゐる。大體に於て彼はこれまたはかれの制度を説明せずして單に記述し、そしてそれらの制度のうちに『人

類の自然權と自由との侵害』を認めてゐるのである。十八世紀に發足する『文化史』なるものは人間の歴史が單に君主の征略と英雄的行爲にのみ存するものでないことを立證するところの澤山な事實を蒐集した。單に大量の事實——その中には、この文化の諸要素の一つとして、經濟的諸關係、生産及び商業の歴史からの諸事實も含まれてゐた——を提供したに過ぎぬ一般『文化史』のほかに、産業及び商業についての特殊な歴史が斯界に現はれ始めた。けれども經濟史はどこまでもそれだけのものであり、そしてその他の『文化』諸現象もまた同様にどこまでもそれだけのものであつた。それはとにかく、經濟的諸關係のこれらの最初の歴史家たちは既に、マルクス及びエンゲルスによつて利用されたところの大量の資料を蒐集したのである。そして一八八八年にエンゲルスが、一八四五年から四六年に屬する彼及びマルクスの著作は、彼等の當時の歴史的・經濟的知識が如何に不完全であつたかを示してゐる、と認めたとき、この缺陷といふものは時代の缺陷であつたのである。それだからペロウが、かの時代の歴史的・經濟的知識の發達の水準を確定することが大切である、と云つてゐるのは全く正當の言である。

それ故に、マルクス研究の任務の、一つはまた、イギリス、ドイツ、フランス及びイタリアに於ける一八四五年以前の『文化史』及び經濟史に關する文獻の討究である。マルクス主義の根源をドイツの歴史的・經濟的文獻のうちに跡づけようとするペロウの試みは、本質的な缺陷をもつてゐる。そこで彼はマルクスが屢々引用してゐるヘーレン及びギュリツヒを忘れた。ギュリツヒからの抜き書を含むところの偶然に保存された綴りは、如何に入念にマルクスがギュリツヒを勉

強したかを示してゐる。ペロウはただヒュルマンのことを指摘してゐるが、この人のドイツ諸都市の歴史及びギリシアの商業の歴史に關する諸首要著作は、マルクスが實際よく通じてゐたところであつた。マルクスはまたそれに劣らぬ熱心さをもつて工藝學及び機械建造についての著名なドイツの歴史家ポッペの諸著作からも抜き書をした。一八四五年の秋に至るまでにマルクスは既にまたチイエリー、ギゾウ、ミニユエの如き王政復古時代の歴史家たちは言はずもがな、フランスの産業の歴史に關する諸首要著作にも同様によく通じてゐた。マルクスのノートブック及びエングルスの手物の中に於て我々は、イギリスの歴史的・經濟的文獻中のあらゆる重要な著作、即ちマクファソン、アンダーソン、エーデン、ウエイドについての諸指示を見出す。注意を惹くのはこの原稿のうちに既に、後年『資本論』の第一卷の中で繰り返されてゐるところの諸關説及び諸指示が見出されるといふことである。そしてただ『ドイツチェ・イデオロギー』から出發することによつてのみひとは、何をマルクス及びエングルスが彼等の先行者たちに負うてゐるか、誰が彼等に最も澤山な資料を彼等の歴史的・經濟的圖式の構成のために提供したか、を最大可能の精確さをもつて確定し得るであらう。

我々がここに印刷に附する原稿は、マルクス主義の哲學的發展のあらゆる科學的研究にとつて重要ないまひとつの事實を確定する可能性を與へる。我々が反デュリング論から知つてゐる結論は、既にフォイエルバッハに關する原稿の中で定式化されてゐる。曰く、事物及び知識の一般的聯關についての特別な科學としての、一切の人間の知識の諸總計の總計としての、哲學は餘計

なものになる。以前の凡ての哲學のうち殘存するものはただ思唯の諸法則についての科學、即ち形式論理學と辯證法のみである。

この結論にマルクス及びエンゲルスがフオイエルバッハに對する批判を通じて到達したといふことは疑ひない。そしてこの批判が主としてマルクスによつて遂行されたといふことも、同じく疑ひなきことである。

既に『神聖家族』に於てマルクスはフオイエルバッハの弟子としてよりもむしろヨリ多く彼の發展者として立ち現はれてゐる。このことはフオイエルバッハについてのマルクスとエンゲルスとの言説を總括して比較分析することによつて最もよく證明される。

マルクスは、彼が『神聖家族』を書き終つたとき、既にフオイエルバッハ主義者であることを——哲學に於ても——やめてゐた、と云はれることが出来る。それ故に彼にとつてはフオイエルバッハとの絶縁を爲し遂げることはいとも容易であつた、この絶縁をエンゲルスは既に一八四五年の春に、成就された事實として見出した。『神聖家族』の後に出了た『イギリスに於ける勞働階級の狀態』がずっと多分に『現實的ヒューマニズム』の地盤の上に立つてゐるのもこれがためである。マルクスは、盟友としてのフオイエルバッハになほ望みを囑してゐたエンゲルスを、自分と一緒に引き摺つていつた。

フオイエルバッハに關するマルクスの有名なテーゼは、『ドイッチェ・イデオロギー』の最初の、フオイエルバッハの批判に結びつく部分への最良の手引をなしてゐる。エンゲルスはこの

テーゼを全く精確に再現せずしてそれに若干の変更を加へてゐるので、私は冒頭にこのテーゼのテキストを直接に原文から即ちマルクスのノートブックから掲載する。その際エンゲルスによつて公表されたテキストとの相違は全部再現しておく*。

『ドイツチェ・イデオロギー』の原稿に親しく接したおかげで、私がローラ・ラファルグから貰つて持つてゐるひとつのマルクスの原稿の祕密を解くことが出来た。それはその當時私には知られてゐなかつたマルクスの一著作の第一巻への序文の草案をなしてゐる。今にして初めて、そこに述べられてゐる『出版物』*^{*}が未刊の『ドイツチェ・イデオロギー』のことにほかならぬといふことが私に明かになつた。フォイエルバッハに關するテーゼの後に、私はまたこの斷片に終つた草案をも凡ての抹殺箇所をくるめて載録する。^{*}^{*}^{*}

D・リヤザノフ。

* 譯者註、この翻譯については譯者例言を見てほしい。

* 譯者註、我々の譯書の三七頁一行目を見よ。

* 譯者註、我々の譯出の仕方については譯者例言を見てほしい。

フオイエルバッハに關するテーゼ

フオイエルバッハに

一

從來の凡ての唯物論（フオイエルバッハも含めて）の主要な缺陷は、對象、現實、感性が、ただ客體または直觀の形式のもとに捉へられて、感性的・人間的活動、實踐として捉へられず、主體的に捉へられてゐないといふことである。そこで活動の方面は、抽象的に、唯物論とは反對に觀念論——それはもちろん現實的、感性的活動をさういふものとして知らないものである——から展開された。フオイエルバッハは感性的な——思想的客體から現實的に區別されてゐる客體を欲する、けれども彼は人間的活動そのものを對象的活動として捉へてゐない。それだから彼は、キリスト教の本質の中で、ただ理論的な態度のみを眞正に人間的な態度と見てをり、これに反して實踐は、ただその穢いユダヤ人的な現象形態に於てのみ捉へられ、固定されてゐる。それだから彼は『革命的な』、實踐的 批判的な活動の意義を把握してゐないのである。

二

對象的眞理が人間の思惟に到來するか否かといふ問題は、なんら理論の問題でなく、却つて一の實踐的な問題である。實踐に於て人間は眞理を、即ち、自己の思惟の現實性と力、その此岸性

を、證明せねばならぬ。思惟——實踐から游離されてゐる思惟——が現實的であるかそれとも非現實的であるかについての論争は、全くのスコラ哲學的な問題である。

三

環境と教育との變化に關する唯物論的學説は、環境が人間によつて變化され、また教育者自身が教育されねばならぬ、といふことを忘れてゐる。従つてこの學説は、社會を二つの部分——そのうち一つは他を超越する——に分たねばならないのである。

環境と人間の活動との變化の合致或ひは自己變化は、ただ革命的實踐としてのみ捉へられ且つ合理的に理解されることが出来る。

四

フオイエルバッハは宗教的自己疎外、即ち一の宗教的なものと一の現世的なものとの世界の二重化、の事實から出發する。彼の仕事は宗教的世界をその現世的基礎に解消することに存してゐる。併しながら、現世的基礎が自分自身から浮き上つて、一の獨立の王國として雲界に定着するといふことは、ただこの現世的基礎の自己潰裂と自己矛盾とからしてのみ説明さるべきである。それ故にこの現世的基礎そのものが、それ自身に、その矛盾に於て理解されねばならぬし且つ實踐的に革命されねばならぬ。それ故に、例へば、地上の家族が神聖家族の祕密として發見さ

れた後は、今や前者そのものが理論的に且つ實踐的に絶滅されねばならぬ。

五

フオイエルバッハは、抽象的、思维的をもつて満足せず、直觀を欲する。しかし彼は感性を實踐的、
な、人間的・感性的活動として捉へてゐない。

六

フオイエルバッハは宗教的本質を人間の本質に解消する。併しながら人間の本質はなんら個々の個人に内在するところの抽象體ではない。その現實に於ては人間の本質は社會的諸關係の總體である。

この現實的な本質の批判に立入らぬフオイエルバッハは、それだから餘儀なくも、

一、歴史的過程から抽象して宗教的情操をそれだけとして固定し、且つ一の抽象的・孤立的・人間的個體を前提してゐる。

二、本質はそれだからただ『種』として、内的な、暗黙な、多數の個人を自然的に結合する普遍性として、捉へられ得るにとどまつてゐる。

七

フオイエルバッハは従つて、『宗教的情操』そのものがひとつの社會的生產物であるといふこと、そして彼が分析せる抽象的個人が一定の社會形態に屬するといふこと、を見てゐない。

八

一切の社會的生活は本質上實踐的である。理論を神祕主義に致すところの一切の神祕は、その合理的な解決を、人間の實踐のうちに且つこの實踐の把握のうちに見出す。

九

直觀的唯物論、即ち感性を實踐的活動として把握しない唯物論が到達する最高のものは、個々の個人及び市民的社會の直觀である。

一〇

舊き唯物論の立場は市民的社會であり、新しきその立場は人類社會または社會的人類である。

一一

哲學者たちは世界をただ種々に解釋して來ただけだ、世界を變化することが問題であらうに。

マルクス草案

『ドイツェ・イデオロギー』への序文

序 文

人間は從來つねに、自分自身に關して、即ち、自分が何であるか若くは何であるべきかについて、間違つた觀念を抱いて來た。神とか規範人とか等々についての彼等の觀念に従つて、彼等は彼等の諸關係を律して來た。彼等の頭腦から生れ出たものは大きくなつて彼等の手に負えなくなつた。彼等の被造物の前に、創造者たる彼等は、身を屈して來た。我々は彼等を、彼等がその軀のもとで萎縮せるところの幻想、觀念、獨斷、空想的迷妄から解放しよう。我々は思想のこのやうな支配に對して叛逆しよう。我々は彼等に、これらの空想をば人間の本質に相應せる思想と取り換へることを教へよう、とひとりの者は云ひ、それらの空想に對して批判的態度をとることを教へよう、と他の者は云ひ、それらの空想をば腦裡から追ひ拂ふことを教へよう、と第三の者は云ふ、さうすれば——現存する現實は崩解するであらう。

このやうな罪のない、子供らしい空想が最近の青年ヘーゲル派の哲學の核心をなしてゐるのである。この哲學はドイツに於て、單に一般公衆から驚愕と畏敬の念をもつて迎へられてゐるばかりでなく、また哲學的、英雄たち自身によつて、世界を顛覆する危険性をもち犯罪的な無遠慮をおかすものだといふ仰山な意識をもつてふれ出されてゐるのである。本出版物の第一卷の目的とす

るところは、自分を狼と見做しまたそのやうに見做されてゐるこれらの羊どもの正體を暴露し、如何に彼等がドイツ市民たちの諸觀念に對してただ哲學的に吼えつゝいてゐるに過ぎないかといふこと、如何にこれらの哲學的解釋家たちの大言壯語がただ現實のドイツの諸狀態の慘めさを反映してゐるに過ぎないかといふことを示すにある。それは、夢想的で愚鈍なドイツ民族の性に合つてゐるところの現實の影を相手とする哲學的鬭爭の弱點を暴露し、その信用を奪ひ取るといふ目的をもつてゐる。

昔或る感心な男が、人間が水に溺れるのは、ただ彼等が重力の思想に憑かれてゐる故である、と想像した。もしも彼等にして、例へばこの重力の表象は迷信的な表象であるとか、宗教的な表象であるとかと宣言することによつて、そのものを腦裡から追ひ拂つてしまふならば、彼等はあらゆる水の危險を超越してゐるであらう。一生涯彼は、その有害な結果についていづれの統計もが彼に新たな無數の證明を供したところのこの重力の幻想と鬭爭した。この感心な男といふのが新しいドイツの革命的哲學者たちの典型であつた。

ドイツの觀念論はひとつの特殊な差異によつてあらゆる他の民族のイデオロギーから區別される。後者もまた、世界を觀念によつて支配されるものとして、觀念及び概念を規定的原理として、一定の思想を物質的世界の哲學者たちにとつて近づき得る神祕として、考察してゐる。

ヘーゲルは實證的な觀念論を完成した。彼にとつては全物質的世界が一の思想世界に、そして

全歴史が一の思想の歴史に轉化したばかりではない。彼は思想的事物を登録することをもつて満足しない、彼はまたその生産活動をも敘述しようと努めた。

ドイツの哲學的批判家たちは、共同の敵、即ちヘーゲルの體系をもつてゐる。この體系こそ彼等がそれと闘争するところの世界である。彼等の理論的前提をなしてゐると同時に彼等がそれを絶滅しようと努めてゐるところの——ヘーゲルの體系√一人残らず、觀念、表象、概念がこれまで現實の間、世界を支配した規定して來たといふことを、現實の世界が觀念的世界の一の生産物であるといふことを、主張してゐる。そのことはこの瞬間に至るまで行はれてゐる、しかしそのことはさうあつてはならない筈だ。彼等は、如何に彼等が、彼等の意見に従へば自分自身の自由な思想の權力のもとに呻吟しつつある人間世界を、救済しようとするかの仕方について、互ひに相違してゐる。彼等は、何を彼等が自由な思想であるとして宣言するかといふ點に於て互ひに相違してゐる。彼等は、この思想の支配に對する信仰に於ては相一致してゐる。彼等は、彼等の孤立せる思维活動をもつて十分なものと見做してゐるにせよ、それとも一般的意識を獲得しようとしてゐるにせよ、とにかく彼等の批判的な思维活動が現存するものの没落をもたらすに相違ないといふ信仰に於ては相一致してゐるのである。

ドイツの哲學者たちは、彼等のヘーゲルの思想世界をどう考へていいかに迷ふたはてに、彼等

の見解によれば、即ち、ヘーゲルの幻想に従へば、從來、現實の世界を生産し、規定し、支配したところの思想、觀念、表象の支配に對して抗議する。彼等は抗議を申し立ててそしてくたばつてしまふ〔……〕

ヘーゲルの體系に従へば、觀念、思想、概念が人間の現實の生活を、彼等の物質的世界を、彼等の實存的な諸關係を生産し、規定し、支配した。彼の叛逆的な弟子たちはこの點を彼から受け取つてゐる〔……〕

フオイエルバッハ

唯物論的見方と觀念論的見方との對立

ドイツのイデオログたちの告げるところによれば、ドイツは最近數年間に於て一の比類なき變革を経験した。シュトラウスに始つたヘーゲルの體系の分解過程は、あらゆる『過去の諸權力』がその渦中に引き込まれてゐるところの一の世界的動亂にまで發展した。この一般的な渾沌のうちに、強大なる諸王國が形成されたかと思へば、忽ちにしてまた沒落し、諸英雄が立所に現はれ出たかと思へば、ヨリ大膽にしてヨリ強力な競争者たちによつて再び闇黒の中へ投げ返へされた。それは一の革命であつた、それに比してはフランス革命も兒戲に等しい、それは一の世界的鬭爭であつた、その前にはダイアドコスたちの諸鬭爭も見窄らしく見える。前代未聞の目まぐるしきをもつて、諸原理が互ひに推し除け合ひ、思想の英雄たちが互ひにひしめき合つた。かくて一八四二年から一八四五年に至る僅かな歲月の間に、ドイツに於てはいつもなら三百年の間に於けるよりも一層多くのものが清算された。

凡てこれらのことは純粹思想の中で起つた筈のものとされてゐる。

げにも事は一の興味ある出來事、即ち絶對精神の腐敗過程といふことにかかはつてゐるのである。この偉大なる解放戰爭の殘滓として結婚式招待通知人や葬儀通知配達人の缺けてゐる理由は

なかつた。この團體の種々なる構成要素は最後の生命の火花の消滅の後に解體して、新しい結合を結び、新しい實體を形成した。從來絕對精神の搾取によつて生活して來た種々なる哲學的產業家たちは、今やこれらの新しい結合に没頭した。いづれの者も彼のものに歸した部分の賣捌を出来るだけ大きな商賣で經營した。これは競争なしにすむわけにゆかなかつた。競争は最初のうちはかなり市民的に且つ堅實に行はれた、後に至つて、ドイツの市場が供給過剰になり、しかもあらゆる骨折にも拘らず世界市場に於てちつとも賣行が良くないとなるや、商賣はいつものドイツ流儀に従つて、工場式生産及び假裝生産、品質の劣惡化、原料のごまかし、空取引、空手形使用、及びいつものドイツ流儀のあらゆる現實的基礎を缺ける信用制度によつて、不堅實にならしめられた。競争は今や我々に世界的な變動として、最も強大なる諸結果と諸成果との產出者として敘述され且つ構成されてゐるところの一鬭争となりはてた。

そのの唱道が尊敬すべきドイツ市民の胸のうちにさへ好意的な國民的感情を喚び起してゐるこれらの哲學上の大言壯語を、青年ヘーゲル派のこの全運動といふ至つて小さな現實の見窄らしさと地方的限局性を、直觀的に認識するためには、それを一度ドイツの外部に横たはれるひとつの立場から眺めることが必要である。

△それだから我々はここにこの運動の個々の代表者たちに對する特殊的批判に先立つて△ドイツの哲學及び全イデオロギーに關する▽若干の一般的論述を行はう。△これらの論述は續いてなされる個別的諸批判の理解のために且つその基礎付けのために必要な程度に於て我々の批判の立場を示すに十分であ

らう。我々はこれらの論述をあたかもフ、オ、イ、エル、バツ、ハ、に向ける、蓋し彼は少くとも一の進歩をなした唯一の人であり且つその思想に我々が眞面目に立ち入り得る唯一の人であるからである。これらの論述は彼等の凡てに共通なイデオロギー的諸前提を詳細に闡明するであらう。V

A イデオロギー一般、特にドイツ的イデオロギー

ドイツ的批判は、その最近の努力に至るまで、哲學の地盤を離れ去らなかつた。自己の一般的・哲學的諸前提を吟味するどころか、ドイツ的批判の全體の問題さへもが特定の哲學的體系、即ちヘーゲルの體系の地盤の上に生じたものである。單にその解答のうちにばかりでなく、既に問題そのもののうちに一の神祕化が存した。ヘーゲルへのこのやうな依屬こそ、何故に、これらの最近の批判家たちのいづれもが、ヘーゲルを超越してゐる、とどんなに主張してゐても、彼等の誰もがヘーゲルの體系の一の包括的な批判は單にこれを試みることさへもしなかつたか、といふことの理由である。ヘーゲルに對する、また彼等相互に對する彼等の論争なるものは、彼等の各々の者がヘーゲルの體系のひとつの方面を取り出して、これを全體の體系に對して、並びに他の人々たちによつて取り出された別な諸々の方面に對して、對立させるといふことに局限されてゐる。最初のうちひとは實體や自己意識の如き、純粹な、本物のヘーゲルの諸範疇を取り出した、後になつてひとはこれらの諸範疇を、種族、唯一者、人間、等々の如き、ヨリ現世的な名稱によつて

俗化した。

シュトラウスからスチルナーに至るドイツの全哲學的批判は、宗教的諸表象の批判に局限されてゐる。へこの批判たるや、一切の禍から世界を救ふ絶對的な救世主であらうとする要求をもつて現れた。宗教は絶えずこれらの凡ての哲學者たちの氣に召さぬ諸關係の究極的な原因として、敵の首魁として目され且つ取扱はれた。√ひとは現實の宗教及び本來の神學から出發した。宗教的意識とは何か、宗教的表象とは何か、はその後の經過に於て色々に規定された。進歩の存した點といへば、見たところ支配的な形而上學的、政治的、法律的、道德的及びその他の諸表象をもまた宗教的若くは神學的諸表象の範圍のもとに包攝し、同様に政治的、法律的、道德的意識をば宗教的若くは神學的意識であるとなし、且つ政治的、法律的、道德的人間を、究極に於ては『人間なるもの』をば宗教的であるとなしたことであつた。宗教の支配といふことは前提されてゐたのである。支配的な關係はいづれも次第に宗教の一關係であるとされ、そして禮拜に、法律禮拜に、國家禮拜に轉化された。到る處ただ教儀が、そして教儀に對する信仰が問題であつた。世界は絶えず廣まりゆく範圍に於て聖列に加へられ、遂に尊敬すべき聖マックスに至つて世界をひとくるめに神聖であると宣し、かくて永久に結末をつけることが出來た。

舊ヘーゲル派の人々は凡てのものを、それがヘーゲルの或るひとつの論理的範疇に還元されるや否や、理解した。青年ヘーゲル派の人々は凡てのものを、それを宗教的諸表象とすりかへるか若くはそれを神學的であると宣言することによつて、批判した。青年ヘーゲル派の人々も、現存

する世界に於ける宗教の、概念の、普遍的なものの支配に對する信仰に於ては、舊ヘーゲル派の人々と意見を同じくしてゐる。ただ前者は、後者が正統であるとして祝するところのこの支配を篡奪であるとし攻撃するといふだけの相違である。

これらの青年ヘーゲル派の人々にあつて表象、思想、概念、一般に彼等によつて獨立のものにされた意識の諸生産物が人間の本來の桎梏であると見られること、あたかも舊ヘーゲル派の人々にあつてそれらのものが人間社會の眞の紐帶であるとされるのと軌を一にしてゐるからして、論ずるまでもなく、青年ヘーゲル派の人々はまた單に意識のこれらの諸幻想に對して鬭争することだけが必要なのである。彼等の想像に従へば、人間の諸關係、その全體の行動營爲、その桎梏と制限は、人間の意識の生産物であるからして、青年ヘーゲル派の人々は、首尾一貫した仕方で、人間の現在の意識を人間的な批判的な或ひは利己的な意識と取り替へ、それによつて人間の制限を排除すべきである、といふ道徳的要請を人間に課してゐるのである。意識を變化せよ、といふこの要求は、畢竟、現存するものを違つて解釋せよといふ、換言すれば、それを或る違つた解釋によつて承認せよ、といふ要求になる。青年ヘーゲル派のイデオログたちは、彼等のいはゆる『世界を震動せしめる』言辭にも拘らず、最大の保守主義者である。彼等のうち最も新進の人々が、彼等はただ『言辭』に對してのみ鬭争する、といふことを主張してゐるのは、彼等の活動にとつて正しい表現を見出したものといふべきである。ただ彼等は、彼等がこれらの空語そのものに空語以外の何物をも對立せしめてゐるのでないといふこと、また彼等にして單にこの世界の空

語に對して鬭爭するのみであるときには、彼等は現實に存立するところの世界に對して決して鬭爭してゐるのではないといふこと、を忘れてゐるのである。このやうな哲學的批判の達成し得た唯一の結果は、キリスト教についての二三の、しかもその上に一面的な、宗教史的な解明であつた、そのこれ以外の全主張は、このやうな取るに足らぬ解明をもつて世界的な發見を提供したものであるとする、その要求に附け加へられた裝飾物であるに過ぎない。

これらの哲學者の誰も、ドイツの哲學とドイツの現實との聯關について、彼等の批判と彼等自身の物質的環境との聯關について問ふといふことに想到してゐないのである。

一、イデオロギー一般、特にドイツ哲學

A

△我々は唯一つの科學、即ち歴史の科學を知るのみである。歴史は二つの方面から見られて自然の歴史と人間の歴史とに區分されることが出来る。けれどこの二つの方面は分離すべきでない、人間が生存する限り、自然の歴史と人間の歴史とは相互に制約し合ふ。自然の歴史、いはゆる自然科學は、ここでは我々の問題とはならない、けれども人間の歴史には我々は立入らねばならぬであらう、なぜなら殆ど凡てのイデオロギーは、歸するところ、この歴史のゆがめられた解釋であるか、或ひはこの歴史からの

全然の抽象であるか、であるからである。イデオロギーそのものは單にこの歴史の諸側面の一つに過ぎない。V

我々の出發點たる諸前提は、なんら恣意的なものでなく、なんらドグマではない、それは現實的な諸前提であつて、このものからはひとはただ想像の上で抽象し得るばかりである。それは、現實的な個人、彼等の行動、及び所與のものとして見出されたる並びに彼等自身の行動によつて作り出されたる彼等の物質的な生活諸條件である。それ故に、これらの諸前提は純粹に經驗的な仕方で確かめ得るものである。

一切の人間歴史の最初的前提は、言ふまでもなく、生きた人間の個人の生存である。ハこれらの個人の、よつてもつて動物から區別される所以の最初の歴史的行動は、彼等が思惟するといふことなく、却つて彼等が彼等の生活資料を生産し、始めるといふことである。V それ故に確かめらるべき最初の事態は、これらの個人の肉體的組織と、それによつて與へられたところの彼等以外の自然に對する彼等の關係である。我々はここではもちろん、人間自身の物理的性狀にも、また地質學的、風土學的、氣候的及びその他の諸關係の如き、人間によつて所與のものとして見出されたる自然的諸條件にも、立入ることが出来ない。ハけれどもこれらの諸關係は、單に人間の根源的な、自然生的な組織を、殊に人種の差別を制約するのみでなく、また彼等のその後の今日に至るまでの全體的發展乃至無發展をも制約する。V 一切の歴史敘述はこれらの自然的諸基礎及び歴史の過程に於ける人間の行動によるそれらの諸基礎の變化から出發せねはならぬ。

ひとは人間を意識によつて、宗教によつて、その他思ひの儘のものによつて、動物から區別することが出来る。人間自身は、彼等が彼等の生活資料を生産し、始めるや否や、自己を動物から區別し始めるのである、この行動たるや、彼等の肉體的組織によつて制約されてゐる。人間は彼等の生活資料を生産することによつて、間接に彼等の物質的生活そのものを生産する。

人間が彼等の生活資料を生産する仕方は、先づ第一に、所與のそして再生産さるべき生活資料そのものの性質に依存してゐる。

生産のこの仕方は、單に、それが個人の物理的存在の再生産であるといふ方面に向つてのみ考察さるべきでない。それは、むしろ既に、これらの個人の活動の一定の仕方であり、彼等の生活を表現する一定の仕方であり、彼等の一定の生活の仕方なのである。個人が彼等の生活を表現する仕方はすなはち彼等の存在する仕方である。それ故に、彼等が何であるかは、彼等の生産と、詳しく言へば、彼等が何を生産するか、並びにまた彼等が如何に生産するかといふことと、合致する。それ故に個人が何であるかは、彼等の生産の物質的諸條件に依存してゐる。

この生産は人口の増加とともに初めて現はれる。人口の増加はそれ自身また個人相互の間に於ける交通を前提してゐる。この交通の形態はまた生産によつて制約されてゐるのである。

そこで事實はかうである、即ち、一定の仕方で生産的に活動してゐる一定の個人は、これらの一定の社會的及び政治的諸關係を取り結ぶ。經驗的觀察は、各々の個々の場合に於て、社會的及び政治的組織と生産との聯關を、經驗的にそして一切の神祕化と思辨とをまじへることなしに、示さねばならない。社會的組織及び國家はつねに一定の個人の生活過程から生れる、けれどもここに謂ふ個人は、彼等自身の若くは他人の表象に現はれるやうな個人でなく、現實にあるがままの個人、換言すれば、行動し、物質的に生産してゐるところの、従つて一定の物質的な且つ彼等の恣意から獨立な諸制限、諸前提及び諸條件のもとで活動してゐるところの個人である。

△これらの個人が作るところの表象は、自然に對する彼等の關係についての表象か、或ひは彼等相互の關係についての表象か、それとも彼等自身の性質についての表象である。これらの凡ての場合にこれらの表象が、彼等の現實的な諸關係及び活動の、彼等の生産の、彼等の交通の、彼等の社會的及び政治的《組織》——《行動》の——現實的なまたは幻想的な——意識的な表現である、といふことは明白である。これと反對の見方は、現實的な、物質的に制約された個人の精神のほかになほ一の別個獨立な精神が前提されるときにのみ可能である。これらの個人の現實的な諸關係の意識的な表現が幻想的であるとしても、即ち、彼等が彼等の表象の中で彼等の現實を逆立ちせしめてゐるにしても、それはまた、彼等の局限された物質的な活動の仕方並びにそれから生ずるところの彼等の局限された社會的諸關係の結果なのである。▽

觀念、表象、意識の生産は、先づ第一に、人間の物質的活動及び物質的交通のうちに、現實的生活の言葉のうちに直接に織り込まれてゐる。人間の表象作用、思惟作用、精神的交通は、ここではなほ、彼等の物質的行動の直接な流出として現はれる。ひとつの民族の政治、法律、道德、宗教、形而上學、等々の言葉のうちに見られるところの精神的生産についても、同一のことが云はれ得る。人間は彼等の表象、觀念、等々の生産者である、しかしここにいふ人間は、彼等の生産力の一定の發展によつて、且つその最高の形態に至るまでこの生産力に相應する交通の一定の發展によつて、制約されてゐるところの、現實的な、行動しつゝある人間なのである。意識とは意識のある存在以外の何物でも斷じてあり得ない、そして人間の存在とは彼等の現實的な生活過程である。全體のイデオロギーのうちに於て、人間及び彼等の諸關係が、丁度カメラの暗箱の中に於てのやうに、逆立ちして現はれることがあるにしても、この現象は、網膜の上に於ける事物の倒立が人間の直接に物理的な生活過程から生ずるのと丁度同じやうに、人間の歴史的な生活過程から生ずるのである。

天上から地上へ降りて來るドイツ哲學とは全然反對に、ここでは地上から天上へ昇られる。換言すれば、人間が語り、想像し、表象するところのものから出發されて、或ひはまた語られたる、思惟されたる、想像されたる、表象されたる人間から出發されて、それから肉體をもつた人間に到達するのでなく、現實に活動してゐる人間から出發されて、彼等の現實的な生活過程からして、この生活過程のイデオロギー的反射と反響の發展もまた敘述されるのである。人間の頭腦

に於ける假幻的構成物もまた、彼等の物質的な、經驗的に確かめ得る、そして物質的諸前提に結びつけられてゐる生活過程の必然的な補足物である。このやうにして、道德、宗教、形而上學及びその他のイデオロギー、並びにそれらに相應する諸々の意識形態は、もはや獨立性の外觀を保持しない。それらのものはなんら歴史をもたない、それらのものはなんら發展をもたない、却つて、彼等の物質的生産と彼等の物質的交通とを發展せしめつつある人間が、このやうな彼等の現實とともにまた彼等の思惟と彼等の思惟の生産物とを一緒に變化するのである。意識が生活規定するのでなく、却つて生活が意識を規定する。第一の見方に於ては、ひとは生ける個人と見られた意識から出發する、第二の、現實の生活に適應せる見方に於ては、ひとは現實的な生ける個人そのものから出發し、そして意識を單に彼等の意識として見るのである。

この見方は無前提ではない。それは現實的な前提から出發する、それはこのものから如何なる瞬間と雖も離れ去らない。この見方の前提は、なんらか空想的に孤立せしめられ固定せしめられた人間ではなく、却つて一定の條件のもとに行はれる、彼等の現實的な、經驗的に直觀され得るところの發展過程のうちに於ける人間である。この活動的な生活過程にして敘述されるや否や、歴史は、彼等自身なほ抽象的な經驗主義者たちに於けるやうに、死んだ諸事實の蒐集であることをやめ、或ひはまた、觀念論者たちに於けるやうに、空想的な主體の空想的な行動であることをやめる。

かくて、思辨のやむところ、現實の生活にあつて、そこに現實的な、實證的な科學、即ち、人

間の實踐的な活動の、實踐的な發展過程の敘述が始まる。意識についての空語はやみ、現實的な知識がこれに代らねばならぬ。獨立なものとしての哲學は、現實の敘述がなされるとともに、その存在の媒質を失ふ。それに代つて現はれ得るのは、たかだか、人間の歴史的發展の觀察から抽象して得られるところの最も一般的な諸結論の總括ぐらゐなものである。これらの抽象は、それだけとしては、現實の歴史から切り離されては、全然なんらの價值ももたない。それらのものはただ、歴史的資料の整理を容易にし、その個々の層の序列を暗示することに役立つことが出来る。併しながらそれらのものは決して、哲學のやうに、歴史の諸時代がそれに従つて切り盛りされ得るやうな處方箋若くは圖式を與へるものではないのである。困難は、反對に、ひとが資料——それが或る過去の時代のものであるにせよ若くは現代のものであるにせよ——の觀察と整理に、現實的な敘述に従事するとき、そこに初めて起つて来る。これらの困難の除去は、ここに決して擧げられ得ないところの、却つて各々の時代の個人の現實の生活過程及び行動の研究の結果を俟つて初めて判明するところの諸前提によつて制約されてゐるのである。ここでは我々は、我々がかのイデオロギーに對抗して用ゐるこれらの抽象のうちの二三を取り出し、そしてそれを歴史上の諸事例について解明してみよう。

現實に於て、且つ實踐的唯物論者即ち共産主義者にとつて問題なのは、現存の世界を革命する

ことであり、既成の事物に實踐的にはたつきかけそしてそれを變化することである。フオイエルバッハにあつて時としてこの種の見解が見出されるにしても、それは決して個々別々の思付以上に出でず、且つ彼の一般的な見方に對してあまりにも僅かしか影響をもつてゐない、従つてそれはここでは發展力を含んだ萌芽としてのほかなんら問題になり得ないであらう。感性的世界についてのフオイエルバッハの見解は、一方ではその單なる直觀に限局され、他方では單なる感覺に限局されて、『現實的な、歴史的な人間』の代りに『人間なるもの』を立ててゐる。『人間なるもの』は現實に於ては『ドイツ人』である。第一の場合、即ち感性的世界の直觀に於ては、彼は退引ならず、彼の意識や彼の感情に矛盾する事物に、彼によつて前提されてゐるところの、感性的世界のあらゆる部分の、特に人間と自然との、調和を妨げる事物に、突き當るのである。

(注意。フオイエルバッハが明白卑近なるもの、感性的假象を、感性的事實のヨリ精密な研究によつて確かめられたところの感性的現實に從屬させてゐるのが誤謬であるのではなく、誤謬はむしろ、彼が究極に於て、いはゆる『眼』をもつて、即ち、哲學者の『眼鏡』を通してそれを見ることなしには、感性といふものを始末することが出来ない點にある。)

そこで彼は、このやうな矛盾する事物を除くために、二重の直觀に、單に『明白卑近なるもの』を直觀するひとつの世俗的な直觀と事物の『眞の本質』を直觀するひとつのヨリ高い哲學的な直觀との間に、避難せざるを得ない。彼は、彼を取り卷く感性的世界が直接に永遠の昔から與へられた、つねに自己同一な事物でなく、却つて産業と社會狀態との生産物であるといふことを理解

しない、といふのは、彼は、感性的世界が（いづれの）歴史的（時代）に於ても、ひきつづく全世代の活動の結果であり、生産物であつて、そしてその諸世代のいづれもがそれに先行する世代を土臺にしてをり、その産業とその交通とを更に發達させ、その社會的秩序を變化せられた諸欲望に應じて變更したのである、といふことを理解しないのである。最も單純な『感性的確知』の對象でさへ、ただ社會的發展、産業と商業的交通によつてのみ、彼に與へられてゐるのである。櫻樹は、殆ど凡ての果樹がさうであるやうに、周知の通りやうやう數世紀前に、商業によつて我々の地帯に移植されたのであり、従つてそれは一定の時代に於ける一定の社會のこのやうな行動によつて、初めてフォイエルバッハの『感性的確知』に與へられたのである。とにかく――後段に至つてなほ一層はつきりと示されるやうに――現實に在るがままの且つ生起してゐるがままの事物についてのこのやうな見方に於ては、如何なる深遠な哲學的問題も、全く簡單に、或るひとつの經驗的事實に解消される。例へば、自然に對する人間の關係に關する重要な問題、但しは、ブルーノの言ふ如くば（一一〇頁）（『自然と歴史とに於ける對立』、兩者が二つの互ひに分離された『事物』であるかの如き、人間がつねに歴史的な自然と自然的歴史とを面前に控へてをらぬかの如き口吻のこの對立）に關する問題は、それから『實體』や『世界意識』について的一切の『測り難く高遠な著作』が生れてゐるほどのものであるが、この問題は、次のことを、即ち、大評判の『人間と自然との統一』なるものは産業に於て既に以前から成立してをり、しかも各々の時代に於て産業の發達の大小に應じて異つた程度で成立してゐたといふこと、同じやう

に、人間の生産力がそれに適應せる基礎の上に發達するに至るまでは、人間と自然との『鬭争』もまたそのやうであつたといふこと、を洞察するときには、おのづから消滅する。産業と商業、即ち生活必需品の生産と交換は、一方、分配や種々なる社會階級の構成を制約すると共に、他方、その經營の仕方になつては逆に後のものによつて制約される、——そこで、フォイエルバッハが、例へば、百年前には紡車と手織機しか見られなかつたマンチェスターに於て現在ではただ工場と機械だけを見、或ひは、アウグストウスの時代であればローマの資本家たちの葡萄園と別荘以外の何物も見出せなかつたローマの平原に於てただ牧場と沼地だけを發見するといふことがそもそも生ずるのである。フォイエルバッハは特に自然科學の直觀について語る、彼は物理學者や化學者の眼にのみ顯はになる祕密について述べてゐる。併しながら産業と商業なくして何處に自然科學があるであらうか。この『純粹な』自然科學でさへ、實に、その目的並びにその材料を商業と産業によつて、即ち人間の感性的な活動によつて初めて得るのである。

この活動、この絶えざる感性的な勞働と創造、この生産こそ、實に、今存在する如き全感性的世界の基礎であつて、若し假りにそれがただ一年間たりとも中絶されたとするならば、フォイエルバッハは、自然界のうちに驚くべく大きな變化を見出すばかりでなく、また全人間世界、彼自身の直觀能力、否、彼自身の存在をさへ、忽ちのうちに失ふであらう。尤もこの場合外的自然の優越性は依然として存在し、且つまたもとより、このことは凡て、原生的な、種子なしの生殖によつて作られた人間にはなんら適用されない、けれどもこのやうな區別は、人間を自然から區別

されたものとして見る限りに於てのみ意味をもつてゐるに過ぎぬ。なほまた、フオイエルバッハがその中に生きてゐるところの、人間の歴史に先行するこの自然は、今日では、新たに生成したオーストラリアの個々の珊瑚島に於てでもなければ、もはや何處にも存在せず、従つてまたフオイエルバッハにとつても存在しないやうな自然のことではないのである。

尤もフオイエルバッハは、如何にして人間もまた『感性的對象』であるか、を洞察してゐる點に於て、『純粹な唯物論者たち』に比して遙かにまさつてゐる。けれど彼が人間を單に『感性的對象』として把へ、『感性的活動』として把へてゐないといふ點は別にしても、彼はこの場合にも自己を理論の範圍内にとどめ、ために人間を、彼等の與へられた社會的聯關に於て、彼等が現在に在るところのものに彼等をなしたところの彼等の現在の生活諸條件のもとに於て、把握してゐないが故に、彼は現實に存在し活動しつつある人間に決して到達することなく、却つてどこまでも『人間なるもの』といふ抽象體の所に立ちとどまり、わづかに『現實的な、個人的な、肉體をもつた人間』を感情に於て認めるところまでしか行つてゐない。即ち、彼の知れる『人間の人間に對する』『人間的關係』は、性愛と友情のみにとどまり、しかも彼はそれを觀念化して見てゐる。彼は現在の生活諸關係に對してなんらの批判も加へてゐない。それ故に彼は決して、感性的世界を、それを構成せる個人の總體的な、生ける、感性的な活動として把握するに到らない、そしてそれだから、例へば、健康な人間の代々に腺病の、過勞せる、肺癆になつた、飢餓に瀕せる無數の人々を見ると、彼は『ヨリ高い直觀』や『種に於ける觀念的平等』に逃避せざるを得な

い、従つて彼は、共產主義的唯物論者が産業並びに社會組織の變革の必然性と同時にその條件を見るところに於てまさに觀念論に逆轉せざるを得ないのである。

フオイエルバッハが唯物論者である限りのところでは、歴史は彼にあつて存在しない、そして彼が歴史を顧慮してゐる限りのところでは、彼はなんら唯物論者でない。彼にあつては唯物論と歴史とが互ひに全く分離してゐる、これは、尤も上に述べたことから既に明かである。

ハさてそれにも拘らず我々が歴史についてここで立入つて論ずる所以のものは、ドイツ人は歴史及び歴史的といふ言葉に於て、あらゆる可能なものを表象して、ただ現實的なものだけは表象しない習ひであるが故である、それについてはとりわけ『説教張りの雄辯家の』聖ブルーノーが立派な手本を示してゐる。V

我々は、無前提的であるドイツ人の間にあつて、一切の人間的存在の、それ故にまた一切の歴史の第一の前提を、即ち、『歴史を作り』得るためには人間は生きてゆくことが出来ねばならぬといふ前提を、確認することをもつて始めなければならない。しかるに生きてゆくには何はさておき、食ふことと飲むこと、住ふこと、着ること、その他なほ若干のものが需要である。従つて最初の歴史的行為は、これらの欲望を満足するための手段の生産、即ち物質的生活そのものの生産である、しかもこれは人間の命だけをつなぐために、今日もなほ、數千年前と同様に、日々刻々遂行されねばならぬひとつの歴史的行為であり、日々刻々充足されねばならぬ一切の歴史のひとつの根本條件である。感性が、聖ブルーノーにあつてのやうに、一本の杖に、即ち最小限の

ものに、縮小されてゐるときでさへ、それはなほこの杖の生産の活動を前提する。かくてあらゆる歴史の理解にあつて第一のものは、この根本事實を、その全き意味に於て且つその全き擴がりに於て觀察し、そしてそれを正當に評價承認することである。このことをばドイツ人は、周知の如く、決してなさなかつた、それだから彼等は嘗て歴史にとつての地上的土臺をもたず、そしてその結果嘗て歴史家といふものをもたなかつた。フランス人及びイギリス人は、たとひ彼等ははこの事實といはゆる歴史との聯關を單に極めて一面的に把握したに過ぎなかつたにせよ——殊に彼等が政治的イデオロギーに囚はれてゐた間はさうであつた——しかも彼等はともかくも、市民的社會の、商業及び産業の歴史を最初に書いたことによつて、歴史敘述にひとつの唯物論的土臺を與へる最初の試みをなしたのである。第二のものは、満足された最初の欲望——それ自體が、欲望満足の行動並びに既に獲得されたところの欲望満足のための道具が、新たな欲望に導くといふことである、——そして新たな欲望のこのやうな生産は、最初の歴史的行爲である。かく見て來るとき、ここにドイツ人の偉大なる歴史的智慧なるものがどのような正體のものであるかが直ちに明かになる。彼等の偉大なる歴史的智慧は、彼等にとつて實証的な資料が欠けてをりそして神學的なナンセンスも政治的な乃至文學的なナンセンスも並べ立てられないところでは、なんらの歴史も出來せしめないで、却つて『歴史以前の時代』なるものを出來せしめる、けれども如何にしてひとはこの『歴史以前』といふナンセンスから本來の歴史に這入つて來るか、點については、我々に説明するところがないのである、——それにも拘らず他方では彼等の歴史的思辨

は全く特別にこの『歴史以前』に熱中してゐる、といふのは、彼等の歴史的思辨は、そこでは『生素な事實』によつてかきまはされる心配はないと信じてゐるからであり、そして同時にそれは、ここではその思辨的衝動を全く恣にして假説を千でも二千でも作つたり覆へしたりすることが出来るからである。——ここにそもその初めから歴史的發展のうちに入り込んでゐるところの第三の關係は、彼等自身の生活を日々新たに作る人間が、他の人間を作り始める即ち繁殖し始めるといふ關係である、——夫と妻、親と子の間の關係、即ち家族がそれである。この家族なるものは、當初は唯一の社會的關係であるが、後になつて、欲望の増加が新しい社會的諸關係を作り出しそして人口の増加が新しい欲望を生産するに至るや、一の從屬的な關係となり（ドイツに於ては例外である）、そしてそのときには、ドイツに於てなされるのをつねとするやうに、『家族の概念』に従つてではなく、存在する經驗的な所與事實に従つて、取扱はれ、展開されねばならぬ。尤も社會的活動のこれら三つの方面は、三つの異なる段階として把握さるべきでなく、却つてまさにただ、歴史の端初以來且つ最初の間以來同時に存在し來りそして今日もなほ歴史のうちに自己を主張しつつあるところの三つの方面として、或ひはドイツ人にわかるやうに書けば、三つの『契機』として、把握さるべきである。——ところで生の生産、勞働に於ける自己自身の生の生産並びに生殖に於ける他の人間の生の生産は、既に直ちに二重の關係として——一方では自然的な關係として、他方では社會的な關係として——現はれる、ここに社會的といふのは、如何なる條件のもとに、如何なる仕方にて、そして如何なる目的のためにであるにせよ、多數の個人

の協働が社會的として理解される場合の意味に於てである。ここからして、一定の生産の仕方若しくは産業的段階はつねに一定の協働の仕方若しくは一定の社會的段階に結びついてをり、且つこの協働の仕方はそれ自身ひとつの『生産力』であるといふこと、人間の支配し得る諸生産力の量は社會的狀態を制約し、従つて『人類の歴史』はつねに産業及び交換の歴史との聯關に於て研究され、論述されねばならぬといふこと、が云はれ得る。併しながらかやうな歴史を書くことがドイツに於ては如何に不可能であるかといふこともまた明瞭である、蓋しドイツ人にはそれに必要なる理解力や資料が缺けてゐるばかりでなく、また『感性的確知』が缺けてをり、且つひとはラインの彼岸では、そこではなんらの歴史もはや進行してゐないが故に、これらの事物についてなんらの經驗もなし得ないからである。かやうにして明かであるやうに、既にもともとから人間相互の間には、欲望と生産の仕方とによつて制約され且つ人間そのものと起源の時を同じうする一の唯物論的聯關が存在してゐる——この聯關たるや、人間をなほこの上に結合するところのなんらかの政治的若しくは宗教的ナンセンスが存在することなくとも、つねに新しい諸形態を、従つて一の『歴史』を提供する。——上に既に根源的な、歴史的な諸關係の四つの契機、四つの方面を考察して來た後に、今や初めて、我々は人間がまた『意識』をもつてゐるといふことを見出す。併しながらまたこれもともと、『純粹な』意識としてではない。『精神』はもともと物質に『付かれ』てゐるといふ呪はれたる運命をそれ自身にもつてゐる、この場合物質は、運動する空氣の層の、音の、簡單に言へば言語の形式に於て現はれてゐる。言語は意識とその起源の時を同じう

する、——言語は實踐的な、他の人間にとつても存在し、従つてまた私自身にとつても存在するところの現實的な意識である。そして言語は、意識と同じく、初め他の人間との交通の欲望とそれの必要から發生せるものである。^私の環境に對する私の關係が私の意識である。v一の關係の存在する場合、それは私にとつて存在する、動物は何物に對しても關係せず、一般に關係しない。動物にとつてはそれの他のものに對する關係は關係として存在しない。それ故に意識は、もともと既にひとつの社會的な生産物であり、そして一般に人間が存在する限りは、どこまでも社會的な生産物であるのである。意識は言ふまでもなく最初には最も手近かな感性的な環境についての單に感性的な意識であり、意識的になりつつある個人の外にある他の人間及び事物との局限された聯關の意識である。それは同時に自然の意識であつて、自然は人間に對して初め一の全然外的な、全能な、侵し難き力として對立し、それに對して人間は純粹に動物的に關係し、それによつて彼等は恰も禽獸のやうに威壓される、かくしてそれは自然についての一の純粹に動物的な意識（自然宗教）である——蓋しまさに、自然はなほ殆ど歴史的に變化されてゐないからである、しかも他方に於てそれは、周圍の個人と結合することの必然性の意識であり、彼がとにかくひとつの社會の中に生活してゐるのだといふことについての意識の端初である。この端初は、この段階の社會的生活そのものと同様に、動物的である、それは單なる群居意識である、人間はこの場合、彼の意識が彼にとつて本能に代つてゐるといふ或ひは彼の本能が意識的なものであるといふことによつてのみ、羊から區別されるに過ぎない。ここに於て直ちにわかるやうに、——この自

然宗教或ひは自然に對するこの一定の關係は社會形態によつて制約されてゐると共にまた逆にこれを制約してゐるのである。ここでも、どこでもと同様に、自然と人間との同一性はなほはつきりと現はれてゐるのであつて、人間の自然に對する局限された關係が彼等相互の間の局限された關係を制約し、そして彼等相互の間の局限された關係が彼等の自然に對する局限された關係を制約してゐる。この羊意識或ひは種族意識は、その一層の發展と發達をば、生産性の増大、欲望の増加、及びこれら兩者の根底に横たはるところの人口の増加によつて獲得する。それと共に分業が發展する、この分業なるものは、根源的には生殖行爲に於ける分業以外の何物でもなく、次には自然的性能（例へば體力）、欲望、偶然、等々のためにおのづから即ち『自然生的に』形作られる分業であつた。∧意識は現實の歴史的發展の内部に於て分業を通じて發展する。∨分業は、物質的勞働と精神的勞働との分業が出現する瞬間からして初めて、現實的に分業となる。この瞬間からして意識は、自己が現存する實踐の意識以外の何物かであるかの如く、何物か現實的なものを表象することなしに、現實的に何物かを表象してゐるかの如く、現實的に想像し得る——この瞬間からして意識は、自己を世界から解放し、そして『純粹な理論』、神學、哲學、道德學等々の構成へと移り行くことが可能となる。併しながらこのやうな理論、神學、哲學、道德學等々が現存する諸關係と矛盾に陥る場合にあつてさへ、このことはただ、現存する社會的諸關係が現存する生産力と矛盾に陥つてゐるといふことによつてのみ、起り得るのである、——尤もこのことはまた、或る特定の國民的範圍の諸關係の中に於ては、そのやうな矛盾がこの國民的範圍の中に

生ずるのでなくて、むしろこの國民の意識と他の諸國民の實踐との間に、換言すれば（現在ドイツに於てのやうに）一國民の國民的意識と一般的意識との間に、生ずるといふことによつても起ることがある。——そのときこの國民にとつては、この矛盾が見たところ單に國民的意識の内部に於ける矛盾として現はれるが故に、鬭争もまたこれらの「國民的汚物」に對してのみに限られるかの如く見えるのである、蓋しまさにこの國民が即自對自的汚物であるからである。▽

尤も意識がひとりで何を始めようとそれは全くどうでもいいことである。我々はこの全汚物の中からただ次のやうな結論を、即ち、生産力、社會狀態及び意識、これら三つの契機が互ひに矛盾に陷ることが出來また陷らざるを得ないのは、分業の成立と共に、精神的活動と物質的活動とが、享樂と勞働、生産と消費が、相異なる個人に歸屬するといふ可能性、いな、現實性が與へられてゐるからであり、そしてそれらのものが矛盾に陷らないといふ可能性はただ分業が再び廢止されるといふことのうちにのみ存するからである、といふ結論を引き出せば足りるのである。然かのみならず『幽靈』、『紐帶』、『ヨリ高い本質』、『概念』、『危惧』なるものが單に、孤立せしめられたる個人の觀念論的な精神的表現であり、明かに表象であり、しかも生活の生産の仕方並びにそれと聯關する交通形態がその内部で動いてゐるところの極めて經驗的な諸桎梏と諸制限とについての表象であるに過ぎないといふことは論ずるを俟たないところである。△現存する經濟的諸制限のこの觀念論的な表現は啻に純粹に理論的にばかりでなく、また實踐的意識のうちにも存在する、即ち自己を解放しつつあるそして現存する生産の仕方と矛盾に陷つたところの意識は、單に宗

教や哲學ばかりでなく、また國家を形成する。V

これらの一切の矛盾は分業に於て與へられてをり、そして分業自身はまた家族内に於ける自然的な分業と個々の互ひに對立する諸家族への社會の分裂の上に基礎をもつものであるが、この分業の成立と共に、同時にまた分配が、しかも勞働及びその生産物の不平等な量的並びに質的分配が與へられてをり、從つて財産が與へられてゐる、この財産なるものは、そこでは妻や子供たちが夫の奴隸であるところの家族に於て、既にその核子を、その最初の形態をもつてゐるのである。家族内に於けるもとよりなほ甚だ粗野にして潜在的な奴隸制は最初の財産であつて、しかもそれはこの場合既に、財産をもつて他人の勞働力に對する處分權であるとするところの近代の經濟學者たちの定義に完全に合致してゐる。尤も分業といふも私有財産といふもそれらは同一のことを表現するものである、——即ち、同じことが、前者に於ては活動に關係して言ひ表はされてをり、後者に於ては活動の生産物に關係して言ひ表はされてゐるのである。——更に分業の成立と共に、同時に、個々の個人または個々の家族の利害と、互ひに交通する凡ての個人の共同の利害との間に於ける矛盾が與へられてゐる、しかもこの共同の利害は、『普遍的なもの』として、單に表象のうちに存在するが如きものではなく、却つて勞働がその間に分割されてゐるところの諸々の個人の相互的依存として先づ現實のうちに存在するのである。

まさに特殊の利害と共同の利害とのこの矛盾に基いて、共同の利害は、現實の個々の及び總體の利害から分離されて、國家として、一の獨立なる態容をとる、そしてそれは同時に幻想的な共

同性として現はれるのであるが、しかしそれはつねに、各々の家族集團及び種族集團のうちに存する紐帶の、即ち、血肉、言語、ヨリ大規模な分業、及びその他の利害の、——そして特に、後に至つて展開されるであらうやうに、分業によつて既に制約されたる諸階級——それはあらゆるこの種の人間の衆團のうちに於て分化するものであり、且つその中の一つが他の凡てを支配する——の利害の、現實的な土臺の上に立つてゐるのである。ここからして論結されることは、國家の内部に於ける一切の鬭争、即ち、民主政治、貴族政治及び君主政治の間の鬭争、選舉權等々のための、一般的にいへば普遍的なもの——共同的なものの幻想的な形態——のための鬭争は、種々なる階級相互の現實的な諸鬭争がそのうちに於て行はれるところの幻想的な諸形態以外の何物でもないといふこと（この點について、ドイツの理論家たちは、我々が彼等に獨佛年誌及び神聖家族の中でそれに對する手引を十分に與へておいたにも拘らず、少しもわかつてゐない）、そして更に、凡て支配に向つて努力しつある階級は、プロレタリアートの場合に於ての如く、その階級の支配が全體の舊き社會形態並びに支配一般の廢棄を制約する場合と雖も、自己の利害をまた一般的に利害として表現する——いづれの階級も最初の瞬間に於てはかくすべく餘儀なくされるのである——ために、先づ政治的權力を奪取しなければならぬといふことである。個人はただ彼等の特殊なものを、彼等にとつて彼等の共同の利害と合致しないものを求めるが故にまさに、このものは彼等にとつて『外的な』且つ彼等から『獨立な』利害として、一のそれ自身また特殊な且つ特有な『一般』・利害として主張されるのである、さもなくば彼等自身が、民主政治

に於ての如く、このやうな分裂に於て出會はねばならない。ところで他方ではまた、共同の利害若くは幻想的な共同の利害に絶えず現實的に對立してゐるこれらの特殊利害の間の實踐的な闘争は、國家としての幻想的な『一般』・利害による實踐的な干渉と制御とを必要ならしめるのである。

そして最後に分業は直ちに次のことについての最初の實例を我々に提供する、即ち、人間が自然的な社會のうちに存在してゐる限り、従つて特殊の利害と共同の利害との間の分裂が存在してゐる限り、従つて活動が自由意志的でなく、むしろ自然生的に分割されてゐる限り、人間自身の行爲は彼にとつて一の外的な對立的な力となる、彼がそれを支配するのでなく、却つてそれが彼を抑壓するやうな力となるのである。即ちかうである、勞働が分配され始めるや否や、各人は、彼に強制せられそれから彼の抜け出ることの出來ぬ一定の、専門的な活動の範圍をもつ、彼は狩獵者であるか漁撈者であるか、それとも牧者であるかそれとも批判的批判家であるかであり、そして彼が生活のための手段を失ふことを欲しない以上、どこまでもそれでゐなければならぬ、——これに反して共產主義的社會にあつては、そこでは各人が専門的な活動の範圍といふものをもたず、却つてあらゆる任意の部門に於て修養することが出來、社會が全般の生産を規制するのであるからして、まさにそのために私は、嘗て狩獵者や漁撈者、または牧者または批判家となることなしに、私の氣の向くままに、今日はこれをし、明日はあれをし、朝には狩し、午後には漁り、夕には家畜を飼ひ、また食事を批判することが可能にされる。社會的活動のこのやう

な固定化、我々自身の生産物の、我々の手におへなくなり我々の期待をあてなしにし我々の計算を臺無しにするところの我々におぶせかかる物的強力へのこのやうな固結化こそは、從來の歴史的發展に於ける主要契機の一つである。ハそしてそれは、財産——このものは當初は人間自身によつて實施された一制度であるが、程なく社會に對してひとつの固有な、その創始者たちによつて決して意圖されてゐなかつた轉向を與へる——に於て、何人にとつても、彼にしてかの『自己意識』若くは『唯一者』に頭を突き込んでしまつてゐない限り、明瞭に看取され得ることである。▽

共產主義は我々にとつて、作り出さるべきひとつの状態、現實がそれに則るべきひとつの理想ではない。我々は今の状態を止揚する現實的なる運動を共產主義と呼ぶ。この運動の諸條件は今現存する前提から生れる。

社會的な力、即ち分業に於て制約されたる種々なる個人の協働によつて生ずるところの倍加された生産力は、この協働そのものが自由意志的でなく、却つて自然生的であるために、これらの個人にとつては、彼等自身の、結合された力としてでなく、却つて一の外的な、彼等の外に立つ強力として現はれる、この強力について彼等は、何處から來て何處へ行くかを知らず、従つて彼等はそれをもはや支配することが出来ない、反對にそれは今や一の固有なる、人間の意志と實行とから獨立なる、いな、この意志と實行とをあたかも支配するところの一系列の様相と發展段階とを歴進してゆくのである。

このやうな、哲學者たちにわかる言葉を使へば、『自己疎外』は、言ふまでもなくただ二つの

實踐的、前提のもとに於てのみ排棄されることが出来る。それが一の『堪へ難き』力、即ちそれに對してひとが革命するやうな力となるためには、それが人間大衆を全くの『無産』者として生み出し且つ同時にそれを現存する富と教養の世界に對する矛盾に於て生み出すことが必要である、しかるに富と教養なる二つのものは生産力の偉大なる増大——その高度の發展を前提する——、そして他方に於て、このやうな生産力の發展（それと共に同時に、既に、人間の地方的な定在のうちに存する經驗的存在の代りにその世界史的な定在のうちに存する經驗的存在が與へられてゐる）は、次の如き理由からしてもまた一の絶對に必要な實踐的前提である、といふのは、このやうな生産力の發展なくしてはただ缺乏が一般化されるばかりであり、それ故に窮乏に伴つてまた必需品を得るための鬭争が再び開始され、かくて一切の古き汚物が再び作り出されねばならぬであらうからであり、更になほ、諸生産力のこのやうな世界的な發展があればこそ人間の世界的な交通があるのであり、従つて一方では『無産』大衆なる現象をあらゆる民族のうちに時を同じうして生み出し（一般的競争）、そのいづれの民族をも變革の影響を免れぬものとなし、そして終に地方的な個人の代りに世界史的な、即ち經驗的に普遍的な個人を置き換へたからである。このことなくしては、第一に、共產主義は單に地方的なものとして存在し得るに過ぎないであらうし、第二に、交通の諸々の力そのものは世界的な、従つて堪へ難き力として發展することが出来ず、いつまでも郷土的・迷信的な『事情』としてとどまつてゐるであらうし、そして第三に、交通のあらゆる擴張は地方的な共產主義を廢棄するであらう。共產主義は、經驗的には、

支配的な諸民族の行爲として一時に且つ同時にでなければ可能でないのであつて、それには生産力の世界的な發展及びこれと關聯する世界交通が前提せられるのである。なほまた、無産勞働者大衆は——大量的に資本若くは或る僅かの欲望満足から切り離された勞働力は——従つてまたもはや一時的なものではないところのこの勞働の喪失は、保證された生活の源泉としての勞働の競争にもとづくこの純粹に不安定な状態は、世界市場を前提してゐる。それ故にプロレタリアートはただ世界的にのみ存在し得ること、あたかも共產主義が、その行動が、ただ『世界史的』存在としてのみ一般に存在し得るのと同じである。それは個人の世界的な存在、即ち個人の直接に歴史と結びついてゐるところの存在である。

さもなければ如何にして、例へば財産制は一般に歴史をもち、種々なる形態を採り得たであらうか、また土地私有の如き、如何にして、存在する諸前提の相異なるに應じて、今日實際に見るやうに、フランスでは土地細分から少數者の掌中への集中に向つて、イギリスでは少數者の掌中に於ける集中から土地細分に向つて推し進み得たであらうか。或ひは、如何にして、もともと種々なる個人や國々の生産物の交換にほかならないところの商業が、需要供給の關係を通じて、全世界を支配するといふことが起るであらうか。——この需要供給の關係たるや、イギリスの一經濟學者の言へる如く、あたかも古代の運命の神と同じやうに地上に浮動し、見えざる手をもつて幸福と不幸とを人間に向つて振り當て、國を建てまた國を滅し、民族を興起せしめまた衰亡せしめる——これに反して、その土臺たる私有財産の廢止されるや、生産が共產主義的に規制され、そ

れに伴つて、人間が彼等自身の生産物に對して立つところの外的關係が撲滅されるや、需要供給の關係のもつ力は無に歸し、かくて人間は交換や生産や彼等の相互に關係し合ふ仕方やを再び彼等の支配のもとに收めるのである。

從來の凡ての歴史的段階に存在せる諸生産力によつて制約されてゐると共に逆にそれらを制約してゐるところの交通形態は市民的社會である、このものは、それに先行するものから生れ出る以上、單一家族制や大家族制、いはゆる種族制を自己の前提としてまた基礎としてもつてをり、その詳細な諸規定はそれに先行するもののうちに含まれてゐる。既にここに於て、この市民的社會が一切の歴史の眞の中心であり舞臺であるといふこと、そして専ら主權者及び國家の仰々しい行動のみを見て、現實的な諸關係を閑却してゐる從來の史觀が如何に不合理なものであるかといふこと、は明かである。

これまでのところ我々は主として、單に人間的活動の一面を、即ち人間による自然への働きかけのみを觀察して來た。いまひとつの方面、即ち人間による人間への働きかけ——
國家の起源及び國家と市民的社會との關係。

歴史といふのは個々の諸世代の繼起にほかならぬものであつて、それら諸世代のいづれもは、

自己に先行したる凡ての世代から自己に譲渡されたところの諸材料、諸資本、諸生産力を利用する、従つて一方では、傳承された活動を全然變化された諸事情のもとに繼續し、そして他方では、舊來の諸事情を全く變化された活動をもつて改變するわけである、ところがこの事實が思辨的に曲歪されるに至り、かくて後代の歴史が前代の歴史の目的となされる、即ち、例へばアメリカの發見の基礎にフランス革命の勃發を助成するといふ目的がおかれるのである、このやうな仕方によつてそのとき歴史はそれの別個獨立な諸目的をもたされることとなり、『他の諸人格（といふのは、そこには『自己意識、批判、唯一者』等々がある）と並ぶ一人格』となることとなる、しかるに、前代の歴史の『使命』、『目的』、『胚種』、『理念』なる言葉で呼ばれるところのものは、後代の歴史からの抽象以外の何物でもなく、前代の歴史の後代の歴史の上に及ぼす能動的影響からの抽象以外の何物でもないのである。——さてこのやうな發展の過程に於て、相互に働きかけ合ふ個々の諸團體がその範圍を擴大すればするほど、個々の諸國民の原始的な孤立性が發達せる生産の仕方、交通並びにそれらによつて自然生的に作り出された種々なる國民の間に於ける分業によつて、破壊されることが多ければ多いほど、愈々多く歴史は世界史となる、そのために、例へば、イギリスでひとつの機械が發明されるとき、この機械は印度や支那に於て無數の勞働者を路頭に迷はせ、これらの國の全存在形態を變革するのであつて、かくしてこの發見は一の世界史的事實となる、或ひは、砂糖と珈琲とは、ナポレオンの大陸政策によつて生じたこの二つの生産物の缺乏がドイツ人を驅つてナポレオンに對して反逆するに到らしめ、もつて

一八一三年の光輝ある獨立戰爭の現實の土臺となつたといふことによつて、十九世紀に於てその世界史的な意義を証明したのである。ここからして結論されるのは、歴史の世界史へのこのやうな轉化が『自己意識』、世界精神、またはその他の或る形而上學的な幽靈のひとつの單に抽象的な行爲といふが如きものでなく、却つてひとつの全然物質的な、經驗的に示され得る行爲であるといふことである、この行爲たるや、それに對しては、歩いたり立ったり、食つたり飲んだり、着たりするがままの個人の誰もがその證明を供してゐる。ハ聖マックス・スチルナー自身は世界史を背負ひ廻り、その昔我等の主エス・キリストの肉を喰ひ血を飲んだやうに、毎日世界史を食ひ且つ飲んでゐる。そして世界史は、彼を、『彼自身の生産物』であるところの唯一者を、日々再生産する、といふのは彼が食ひ、飲み且つ着なければならぬからである。『唯一者云々』の中に於ける諸引用文、並びにヘッス及び他の遠く離れた人々に對する聖マックスの辯駁は、如何に彼が精神的にもまた世界史によつて生産されてゐるかを證明してゐる。それ故に結論は、個人は『世界史』のうちに於ても、學生と自由な裁縫女とからなるいづれのスチルナー『協會』のうちに於てと同様、まさに同じ『所有者』であるといふことになる。▽尤も、從來の歴史に於ては次のことも等しく一個の經驗的事實であるのは確かである、即ち、個々の個人は、その活動が世界史的な活動にまで擴大するに伴つて、愈々益々、一の彼等にとつて外的な力のもとに（この力の重壓を彼等はそもそもまたいはゆる世界精神等々の詭計として表象した）隷屬させられて來た、この力たるや、絶えずより大量的になつてゆきそして最後には世界市場として現はれるのである。併しながらまた、ドイツの理論家たちに

とつていとも神祕的なこの力が、現存する社會狀態の顛覆によつて、共產主義的革命（これについては更に後段に述べる）及びそれと同一事なる私有財産の廢止といふことによつて、解消せられ、そしてさうした場合、各々の個々の個人の解放が、歴史が完全に世界史に轉化する程度に應じて、實現されるといふことも同様に經驗的に基礎付けられてゐることである。個人の現實的に精神的な富が全く彼の現實的な諸關係の富に依存するといふことは、上述のことによつて明瞭である。個々の個人はこれによつて初めて、種々なる國民的及び地方的制限から解放せられ、全世界の生産と（精神的生産ともまた）實踐的な關係におかれ、そして全地上界のこの全面的な生産（人間の諸創造）に對する享受力を獲得し得る狀態におかれるのである。個人の全面的な依存、その世界的な協働のこの自然生的な形態は、この共產主義的革命によつて轉化されて、人間の相互作用から生れたものでありながら從來全然外的な力として彼等に威壓を加へ且つ彼等を支配し來つたこれらの力の統制、その意識的な支配となる。ところでこの直觀がまた思辨的に、觀念論的に、即ち空想的に『種の自己生産』（『社會と主觀』）として把握され、そしてそれによつて相關聯し合ふ諸々の個人の繼起的系列が、自己自身を生産するといふ不思議を行ふところの唯一個人として表象されることがあり得るのである。ここに明かであるやうに、個人は確かに、物理的にも精神的にも、相互に、作り合ふが、しかし自分で自分を作るものでない、それは聖ブルーノのナンセンスに於ても不可能である、このナンセンスに従へば、 \wedge 『人格の概念のうちには、一般に、自己自身を制限されたものとして措定し（このことに於ては彼は立派に成功してゐる）、そして、

人格が（みづからによつてではなく、また一般にでもなく、またその概念によつてでもなく）、むしろその普遍的な本質によつて指定する——蓋しまさしくこの本質こそは人格の内面的な自己差別の、その活動の結果であるに過ぎないからである——この制限を、再び排棄するといふことが含まれてゐる。』
 八七—八八頁、（ブルーノ・君は一ダースまでは作ることが出来てゐない。）またそれは『唯一者』の、『作られた』人間の意味に於てもさうでない。V

最後に、我々はここに展開された史觀からなほ次の如き諸結果を得る。即ち、一、諸生産力の發展に於てひとつの段階が、そこでは、現存する諸關係のもとに於てただ禍害を惹き起すばかりでもはやなんら生産力でなく却つて破壊力であるやうな諸生産力及び交通手段（機械及び貨幣）が作り出されるやうな段階が、出現する——そしてそれと關聯して、社會の諸利益を享受することなくしてしかも社會の一切の重荷を負はねばならぬところの、社會から推し出されて、他の凡ての階級に對する最も決定的な對立に迫ひやられるところの、一階級が作り出される。この階級たるや、それをば全社會成員の大多數が構成し、それからして一の根本的な革命の必然性についての意識、即ち共產主義的意識が出て来る、この意識は、言ふまでもなく、この階級の地位を理解することによつて、他の諸階級の間にもまた形作られ得るものである。二、一定の諸生産力はその内部に於て充用され得るところの諸條件は、社會の一特定階級の支配の諸條件である、そしてこの特定階級の社會的な、その所有にもとづいて生ずる力は、その時々國家形態に於てそれ

の實、踐、的・觀念論的表現をもつてゐる、それだからあらゆる革命的闘争は、從來支配し來つた階級に對して向けられるのである。三、從來の凡ての革命に於ては、活動の様式にはつねに手を觸れられることなくそのままであつて、單にこの活動の或る違つた分配が、違つた人々への勞働の新たな割當が問題であつただけである、これに反して共產主義的革命は從來の活動の様式に對して向けられ、勞働を廢除し、あらゆる階級の支配を階級そのものと共に排棄する、蓋し共產主義的革命は、かの階級によつて、即ち社會に於てもはやなんらの階級とも見做されず、階級として承認されず、既に今の社會の内部に於て一切の階級、國籍、等々の解消の表現であるところの階級によつて遂行されるからである。そして、四、この共產主義的意識の大量的產出のためにもまた共產主義それ自體の貫徹のためにも、ただ實踐的運動に於てのみ、革命に於てのみ起り得るところの人間の大量的な變化が必要である。それ故に革命は、支配階級が他の如何なる仕方によつても打倒され得ないといふ理由から必要なばかりでなく、また打倒する側の階級がただ革命に於てのみ、一切の古き汚物を拂ひ退け、もつて社會の新たな建設に必要な能力を賦與されることが出来ることが必要なのである。

この史觀はそれ故に次の點に據つて立つてゐる。それは、即ち、現實の生産過程を、しかも直接的な生活の物質的生産から出發して、展開することであり、そしてこの生産の仕方と聯關してをり且つそれによつて作り出された交通形態を、從つてその種々なる段階に於ける市民的社會を全歴史の基礎として把握することであり、また市民的社會を國家としてのその行動に於て敘述

すると共に、意識の種々なる理論的所産及び形態の凡てを、即ち、宗教、哲學、道德學等々を市民的社會から説明しそして市民的社會の成立過程をそれらのものから跡づけることである。このやうにするときには當然にまた事物はその全體性に於て（そしてそれ故にこれらの種々なる方面相互の間の交互作用もまた）敘述され得るのである。この史觀は各々の時代に於て、觀念論的史觀のやうに、ひとつの範疇を求めるところを要することなく、却つて絶えず現實的な歴史の地盤の上に立ちとどまり、實踐を觀念から説明せずして、諸觀念形成を物質的實踐から説明する、従つてそれはまた次の如き結論にも到達する、即ち、意識のあらゆる形態及び所産は、精神的批判によつて、換言すればそれらのものの『自己意識』への解消若くは『妖怪』、『幽靈』、『狂妄』等々への轉化によつてではなくして、却つてただこれらの觀念論的愚論がそれから生れ出てゐる實存的な社會的諸關係の實踐的倒壞によつてのみ解消され得るものであり、批判ではなく、革命が、歴史の、また宗教、哲學及びその他の理論の推進力であるのである。この史觀の示すところは、歴史は自己を『精神の精神』としての『自己意識』に解消することをもつて終るのでなく、むしろ歴史に於ては、そのいづれの段階にあつても、一の物質的成果が、諸生産力の一總和が、自然に對する並びに個人相互の間の歴史的に形成されたる關係が、既に存在してをり、それらのものは、各々の世代にこれの先行者から傳へられるのであつて、即ち一の大量の諸生産力、諸資本及び諸事情がこれにほかならず、それらのものは一方ではもとより新しい世代によつて改變されるが、しかし他方ではまた新しい世代に對してそれ自身の生活諸條件を指定し、そして新

しい世代に一定の發展を、一の特種な性格を與へるといふことであり、従つて人間が環境を作ると同様に環境が人間を作るといふことである。いづれの個人、いづれの世代もが與へられた或るものとして見出す諸生産力、諸資本及び諸社會的交通形態のこれらの總和は、哲學者たちが『實體』としてまた『人間の本质』として表象して來たところのもの、彼等が神化しそしてそれと闘つて來たところのものの實存的な基礎であり、これらの哲學者たちが『自己意識』としてまた『唯一者』としてそれに對して反逆することによつては、聊かたりとも人間の發展の上に及ぼすその作用や影響に於て妨げられることのない實存的な基礎である。種々なる世代のこれらの所與の生活諸條件はまた、歴史に於て周期的に繰り返へされる革命的動搖が、一切の現存するものの土臺を顛覆するに足るだけ強力であるであらうか否かをも決定する、そして若しも總體的な變革のためのこれらの物質的な諸要素にして、即ち、一方では種々なる生産力、他方では單に從來の社會の個々の諸條件に對してばかりでなく、むしろ從來の『生活の生産』そのもの、この土臺をなす全活動に對して革命を行ふところの革命的大衆の形成にして、存在してゐないならば、かかる變革の觀念が既に百度も宣言されてゐようとゐまいと、實踐的な發展にとつては全くどこらでもいいことである——あたかも共產主義の歴史がこれを證明してゐる。

從來の凡ての史觀は、歴史のこの現實的な土臺を全然顧慮せずにおいたか、さもないれば、單にそれを歴史の過程とは全くなんらの關聯をもたぬ一の附隨物と見做して來た。それだから、歴史はいつも、歴史の外に横たはれる規準に従つて記述されざるを得ず、現實的な生活の生産が

非歴史的なものとして現はれ、これに反して歴史的なるものが普通の生活から離れた格別超世俗的なものとして現はれるのである。このやうにして、人間の自然に對する關係は歴史から除外され、それによつて自然と歴史との對立が作り出される。従つて、從來の史觀は、歴史のうちにただ主權者及び國家の政治的諸行動と宗教的な、一般に理論的な諸鬭争とを見ることが出来ただけであり、そして特に、いづれの歴史的時代についてもこの時代の幻想をこの時代と共にせざるを得なかつたのである。例へば、或る時代が、『宗教』や『政治』はこの現實的な諸動機であるものの單に形式であるに過ぎぬにも拘らず、純粹に『政治的な』若くは『宗教的な』諸動機によつて規定されてゐると想像してゐるときは、その時代の歴史家はこの意見を受け容れる。これらの特定の人間が自己の現實の實踐について懷く『想像』、『表象』が轉化されて、これらの人間の實踐を支配し規定するところの唯一的に規定的なそして能動的な力になる。インド人やエジプト人にあつて行はれてゐる分業の粗野な形態が、これらの民族の間に於て、その國家やその宗教のうちにカスト制度を作り出すとき、歴史家は、カスト制度こそはこの粗野な社會的形態を産み出した力である、と信ずる。フランス人やイギリス人は、少くとも、現實とまだしも最も近い關係にある政治的な幻想に執してゐるのに、ドイツ人は『純粹精神』の領域のうちにさまよひ、宗教的な幻想をもつて歴史の推進力となしてゐる。ヘーゲルの歴史哲學は、そこでは現實的な利害が、政治的な利害でさへもが問題とされずして却つて純粹な思想が問題とされてゐるこのやうな凡てのドイツ的歴史敘述の最後の、その『最も純粹な表現』にまで持ち來された歸結である。こ

の歴史敘述は次にまた聖ブルーノにとつても、その一思想が他の思想を食ひ盡し、かくて『自己意識』のうちに遂には沒落してゆくところの諸思想の一序列として現はれた、そしてなほ一層徹底的には、凡ての現實的な歴史について何事も知らぬ聖マックス・スチルナーにとつては、この歴史的過程は單なる『騎士』の、『盜賊』の、幽靈の歴史として現はれざるを得なかつたのであつて、そのやうな諸幻覺に對しては、彼は言ふまでもなくただ『不信心』によつてのみ自己を救ふことを辨へてゐる。この見解は實際に宗教的である、それは宗教的人間をば一切の歴史の出發點たる原人として想定し、そしてその想像の中に於て、生活資料及び生活そのものの現實の生産の代りに宗教的な空想生産を置くのである。この全史觀、並びにその解體及びこの解體から生ずる懷疑と危惧は、ドイツ人の單に國民的な關心事であつて、ドイツにとつての地方的な利害しかもつてゐない、例へば、どうしてひとはそもそも『神の國から人間の國に來るか』といふ、あの重要な、近頃頻りに議論された問題の如きがそれである、あたかも、この『神の國』は想像の中にでなくそれ以外の何處かに嘗て存在したことでもあるかの如き、そして學者先生たちは、今彼等がそこへの道を尋ねてゐる『人間の國』の中に、自分では氣がつかずに、絶えず生活して來たといふのでないかの如き口吻であり、またあたかも、この理論的雲霧形成の珍現象を説明するといふ科學的遊戲——蓋しそれはこれ以上のもではない——といふものは、まさに反對に、この理論的雲霧の成立が現實的な地上的な諸關係からして實證されるところに存するのではないかの如き口吻である。一般に、これらのドイツ人にあつてはつねに、與へられたものとして見出さ

れるナンセンスをなんらかの他の幻想に解消するといふこと、換言すれば、この全ナンセンスがとにかく、探り出されねばならぬ一の別個獨立な意味をもつてゐると前提するといふことが問題になつてゐる、しかるにまことはこれらの理論的空語をば現存する現實的な諸關係から説明することのみが問題なのである。これらの空語を現實的に實踐的に解消すること、これらの表象を人間の意識から排除することは、既に云つたやうに、變化された諸事情によつて成就されるのであつて、理論的演繹によつて成就されるのではない。人間の大衆即ちプロレタリアートにとつては、このやうな理論的表象は存在しない、従つてまた彼等にとつては解消せしめられる必要もない、そしてこの大衆が嘗て若干の理論的表象を、例へば宗教を、もつてゐたとしても、これらのものは今では既に疾に諸事情によつて解消されてゐるのである。

これらの問題並びにその解決がまがひもなくこの國民獨特なものであることはなほまた次の如き點にも現はれてゐる、即ち、これらの理論家たちは一生懸命で、『神人』とか『人間』とかいふ諸妄想物が歴史の個々の時代を主宰したかのやうに信じてをり、——聖ブルーノに至つては、それどころではない、ただ『批判及び批判家が歴史を作つた』かのやうに主張するところまで行つてゐる——そして、彼等が自分自身で歴史的諸構成に従事する場合には、以前の時代のことは一切最大急行で飛び越えてしまつて、『蒙古人時代』からすぐさま本來『内容に充ちた』歴史へ、即ち、ハレ年誌並びにドイツ年誌の歴史及びヘーゲル學派が解體して一般的喧嘩となる歴史へ、と移つてゆくのである。あらゆる他の國民、あらゆる現實的な事件は忘れられ、世界

風俗芝居はライプチヒの書籍市及び『批判』と『人間』と『唯一者』の相互の間の紛争に局限される。若し理論が恐らく時あつて現實に歴史的なテーマを、例へば、十八世紀を取扱ふことに従事するやうな場合には、それは單に諸表象の歴史を、これらの諸表象の基礎に横たはれる諸事實及び實踐的な諸發展から切り離して、與へるに過ぎず、しかもこの歴史とても、ただ、この時代をば眞の歴史的時代、即ち一八四〇年から一八四四年に至る間のドイツ哲學者戰爭の時代のひとつの不完全な前段階として、そのなほ局限されたる先驅者として敘述しようといふ意圖のもとに於て、與へられるに過ぎない。ひとりの非歴史的人物及び彼の空想の聲價を愈々赫々と輝かしめんがために、以前の時代の歴史を書くといふこの目的にとつては、一切の現實的に歴史的な事件、現實的に歴史的な政治上の事件でさへもが、歴史の中で關説されなくて、その代りに研究にもとづかず構想と文學的なゴシップの歴史とにもとづくところの物語が與へられる——丁度聖ブルーノがこのことを彼の今は忘れられてゐる十八世紀の歴史の中でやつてゐる——といふことは、いかにも適つたことである。かくして、あらゆる國民的偏見を無限に遠く超脱してゐると信じてゐるこれらの高踏的で尊大な思想商人たちは、實踐に於ては、ドイツの統一について夢みる月並の俗人たちよりもなほ遙かに國民的である。彼等是他の諸民族の行動をば歴史的だとは全然認めない彼等はドイツの中に、むしろドイツといふ小地域に、そしてドイツのために生きてゐる、彼等はラインの歌を讚美歌に變へ、そして、フランス國家の代りにフランス哲學を盗み、フランスの地方の代りにフランスの思想をゲルマン化することによつて、エルザスとロートリンゲ

ンを占領する。理論の世界支配に於てドイツの世界支配を宣言する聖ブルーノーや聖マックスに比べてはヴェネデイ君の方がコスモポリタンである。

これらの論述からしてまた、フォイエルバッハが（ヴェーガンツ四季誌一八四五年、第二卷）自分を『公共人』といふ資格のために共產主義者だと宣言し、自分をば人間『なるもの』といふ一賓辭に轉化するとき、從つて、現存する世界では特定の革命的な黨の所屬者を現はす共產主義者なる語を、再び一の單なる範疇に轉化し得ると信ずるとき、如何に甚しく彼が思ひ違ひをしてゐるか、といふことが明かにされる。人間相互の關係に關してのフォイエルバッハの全演繹は、ただひとへに、人間は相互に必要とし合ひ、且つつねに必要とし合つて來たといふことを證明するだけに終つてゐる。彼はこの事實についての意識を確立せんと欲する、從つて彼は、爾餘の理論家たちと同じやうに、單に、現存する事實についての正しい意識を作り出さうと欲してゐるに過ぎない、これに反して現實的な共產主義者にとつては、この現存するものを変革することが問題なのである。尤も我々はフォイエルバッハが、まさにこの事實の意識を作り出さうと努力することによつて、理論家が一般に、理論家や哲學者であることをやめることなしに、進み得るところの限度まで進んでゐるといふことを完全に承認する。しかるに注目すべきことには、聖ブルーノー及び聖マックスは、共產主義者についてのフォイエルバッハの表象をばすぐさま現實的な共產主義者に書き換へてゐる、そしてこれは、一部の理由としては既に、彼等が共產主義をもまた『精神の精神』として、哲學的範疇として、同格の敵手として、これと闘争し得んがためになさ

れてゐるのである——そして聖ブルーノの側からは、それはなほまた實際上の利害からしてもなされてゐるものなのである。フォイエルバッハがなほ依然として我々の敵たちと共通にやつてゐる現存するものの承認及び同時に誤認の例として、我々は『將來の哲學』の中の次の箇所のことを指摘しよう、そこに於て彼は、事物若くは人間の存在は同時にその本質であるといふことと、動物的若くは人間的個體の一定の生存諸關係、生活の仕方及び活動は、その個體の『本質』がその中に於て自分が満足させられるのを感じてゐるところのものであるといふこと、を説述してゐる。この場合明らかに、いづれの例外も不幸なる偶然として、變更され得ない變態として考へられてゐるのである。それ故に、幾百萬のプロレタリアが彼等の生活諸關係の中に於て決して満足させられるのを感じないとき、彼等の『存在』が彼等の………とき。

支配階級の思想はいづれの時代に於ても支配的な思想である、換言すれば、社會の支配的な物質的力であるところの階級が同時にその社會の支配的な精神的力である。物質的生産のための諸手段を支配する階級は、それによつて同時に精神的生産のための諸手段を支配し、かくして、それによつて同時におこなべて、精神的生産のための諸手段を缺ける人々の思想はこの階級に隷從せしめられることとなる。支配的な思想とは、畢竟、支配的な物質的諸關係の觀念的表現であり、思想として把握されたる支配的な物質的諸關係、即ちまさにその一階級をして支配階級たらしめる諸關係であり、それ故にこの階級の支配の思想にはかならないのである。支配階級を構成するところの個人は、就中また意識を有し、それだから思惟する、従つて彼等にして階級として

支配し、そして歴史上の一時代の全範圍を規定してゐる限り、彼等がこの支配と規定とをその時代の全體に亘つて行ひ、それ故に就中また思惟する者として、思想の生産者として支配し、彼等の時代の思想の生産及び分配を統制するといふこと、かくして彼等の思想がその時代の支配的な思想であるといふこと、は自明のことである。例へば、ここでは王權と貴族とブルジョアジーとが支配を争つてをり、従つてそこでは支配が分割されてゐるやうな時代及び國に於ては、權力分立の學說が支配的な思想として現はれ、それがやがて『永遠の法則』であると宣言されるのである。——我々が既に上に（〔本譯書六二頁〕）、從來の歴史の主要な力の一つとして見出したところの分業は、今やまた支配階級のうちに於て精神的勞働と物質的勞働との分業として現はれ、その結果この階級の内部に於てその一部分はこの階級の思想家（この階級の自己自身についての幻想を作り上げることをもつて彼等の主要な生業とするところの、この階級の能動的な且つ概念的なイデオログたち）として出現し、これに反して他の部分はこれらの思想や幻想に對してヨリ多く受動的な且つ受容的な態度をとる、蓋し後者は現實に於てこの階級の活動的な成員であつて、自己自身についての幻想や思想を自分で作るためにヨリ僅かな時間をしかもたないからである。この階級の内部に於てはそれのこのやうな分裂は、二つの部分の間の或る程度の對立と敵對關係とにさへまで發展することがあり得る、けれどもこのやうな對立や敵對關係は、この階級そのものが危くされるやうな實踐的衝突の場合にはいつでも、おのづからなくなり、そしてその場合にはそもそも、支配的な思想が支配階級の思想でなくそしてそれがこの階級の力とは別な力を

もつてゐるかの如き外觀も消え失せるのである。一定の時代に於ける革命的思想の存在は既に革命的階級の存在を前提する、この階級の存在の諸前提については既に上に（「本譯書七三頁」）必要なことは述べておいた。いまもしひとが、歴史的過程の把握に際して、支配階級の思想を支配階級から切り離すならば、それを獨立化するならば、或る時代に於てこのまたかか思想が支配したと説く立場にとどまつてこのやうな思想の生産の諸條件及び生産者たちのことを顧慮しないならば、従つて、思想の基礎に横たはつてゐるところの個人や世界事情をのがすならば、そのときにはひと、例へば、貴族の支配した時代には名譽、忠節等々の概念が支配し、ブルジョアジーの支配の時代には自由、平等等々の概念が支配した、と云ふことが出来る。ハ支配階級自身はおしなべて、彼等のこれらの概念が支配したといふ表象をもつてをり、そして彼等は、ただこれらの概念を永遠の眞理として敘述することによつてのみ、これらの概念を以前の時代の支配的な表象から區別する。Vハこれらの支配的な概念は、支配階級が自己の利害を社會の一切の成員の利害として敘述するやうに餘儀なくされることが多ければ多いほど、愈々普遍的な且つ包括的な形態をもつてあらう。V支配階級自身はおしなべてこのやうに想像する。凡ての歴史家に、特に十八世紀以來、通有なこの史觀は、必ずや、絶えず益々抽象的な思想が、即ち絶えず愈々普遍性の形態をとる思想が支配するやうになつて來る、といふ現象にぶつつかるであらう。言ひ換へるならば、自己の前に支配してゐた階級に代つて現はれるいづれの新しい階級も、自己の目的を貫徹するために既に、自己の利害を社會の一切の成員の共同の利害として敘述するやうに、即ち、觀念的に表現す

れば、自己の思想に普遍性の形式を與へ、それを唯一的に合理的な、普遍妥當的な思想として敍述するやうに、餘儀なくされてゐるのである。（普遍性は、一、身分に對する階級に、二、競争、世界交通等々に、三、支配階級の數的に甚大なることに、四、共同の利害の幻想に、照應してゐる。當初はこの幻想は眞實であつた、五、イデオログたちの錯覺に及び分業に照應してゐる。）革命的階級は、それがひとつの階級に對立するといふ理由から既に、階級としてでなく、却つて全社會の代表者として元來登場する、それは唯一つである支配階級に對して社會の全大衆として出現する。このことが可能であるのは、當初にはこの革命的階級の利害が、現實になほヨリ多く爾餘の凡ての非支配階級の共同の利害と關聯してをり、從來の諸關係の壓迫のもとになほいまだ一の特種階級の特殊の利害として發展し得なかつたからである。それだからこの階級の勝利は、爾餘の、支配的地位に上つて來ない諸階級の多數の個人にとつてもまた利益になる、けれどもそれはただ、この勝利が今やこれらの個人をば支配階級にまで向上することが出来るやうにする限りに於てである。フランスのブルジョアが貴族の支配を顛覆したとき、彼等はそれによつて多くのプロレタリアをして自己をプロレタリアートの地位以上に高めることを可能ならしめた、けれどもそれはただ、彼等がブルジョアとなつた限りに於てであつた。このやうにしていづれの新しい階級も、從來支配して來た階級の土臺よりもヨリ廣い土臺の上に於てのみその支配を成し遂げる、その代りにその後に至つては、今度支配する階級に對する非支配階級の對立もまたそれだけ愈々尖銳に且つ深刻に發展するのである。この二つの事柄によつて、この新しい支配階級に

對して行はれる鬭争は、これもまた、從來の凡ての、支配の獲得に努力せる階級がこれをなし得たよりも一層決定的な、一層根本的な、從來の社會狀態の否定のために努力する、といふことが制約されてゐる。

一定の階級の支配がただ或る思想の支配であるに過ぎぬかの如きこのやうな全外觀は、言ふまでもなく、階級の支配が社會的秩序の形式であることを一般にやめるや否や、従つて、特殊な利害を一般的な利害として、若くは『普遍的なもの』を支配的なものとして敘述することがもはや必要でなくなるや否や、おのづからなくなる。

支配思想にしてひとたび支配的な個人及びわけても生産の仕方との與へられたる段階から生れる諸關係から切り離され、そしてそれによつて歴史に於てはつねに思想が支配するといふ結論が成立した後は、これらの種々なる思想から『思想なるもの』、理念等々を、歴史の中に於て支配してゐるものとして抽象すること、そしてかくして凡てのこれらの個々の思想や概念をば、歴史に於て自己を發展せしめつつある概念なるものの、『自己規定』として把握することはいとも容易なことである。かくて次にはまた人間のあらゆる關係が、人間の概念から、表象された人間から、人間の本質から、人間なるものから導き出され得るといふことは當然である。このことは思辨哲學がなしたところである。ヘーゲルは自分で歴史哲學の終りに、私は『概念なるもの』の進展をのみ考察し『そして歴史の中に於て『眞の神義論』を敘述した(四四六頁)、と告白してゐる。』
ひとは今やまたもや『概念なるもの』の生産者たちにまで、理論家たち、イデオログたち及び

哲學者たちにまで溯ることが出来る、そしてそのとき、哲學者たち、思想家たちがかかるものとして、昔から歴史の中で支配して來たといふ結論に到達する、——この結論たるや、我々が見たやうに、また既にヘーゲルによつて言明されたところのものである。かくて歴史に於て精神の主權（スチルナーにあつては教權制）を立證する全手品は、次の三つの手練の範圍を出でない。

第一。ひとは、經驗的な諸根據にもとづき、經驗的な諸條件のもとに於て、そして物質的な個人として、支配する人々の思想をこれらの支配する人々から切り離し、もつて歴史に於ける思想若くは幻想の支配を承認せねばならぬ。

第二。ひとは、この思想の支配に一の秩序を齎らし、相繼起する諸支配思想の間に一の神祕的な聯關を立證しなければならぬ、そしてこれはひとがこれらの諸思想を『概念なるものの自己規定』として把握することによつて成し遂げられる（このことが可能であるのは、これらの諸思想がその經驗的な基礎を媒介にして現實的に相互に聯關してゐるからであり、且つこれらの諸思想が、單なる思想として把握されて、自己差別即ち思想家によつて拵へられた差別となるからである。）

第三。この『自己自身を規定する概念』の神祕的な外見を取り除くために、ひとはそれをば一個の人格——『自己意識』——に轉化するか、或ひは、全く唯物論的なるかに見えるために、それをば歴史に於ける『概念なるもの』を代表する一系列の人格に、即ち『思想家たち』、『哲學者たち』、『イデオログたち』に轉化する、これらの人々は今やまたもや歴史の製造者として、

『番人評議會』として、支配者として把握される。このやうにしてひとは唯物論的要素を全部歴史から取り除いた、そして今やひとは彼の思辨の駒を安んじて疾驅させることが出来る。

ドイツに於て（そしてその理由は？）特に支配せるこのやうな歴史の方法は、一般にイデオログたちの幻想、例へば、法律家、政論家（實際政治家をも含めて）の諸幻想との聯關からして、彼等の實際的な生活地位、彼等の職業及び分業から全く簡単に説明がつくところのこれらの連中の獨斷的な夢想と曲歪とからして、展開されなければならない。

日常生活に於てはどんな商人でも、或る人が自稱するところとその人が現實にあるところとを區別することを甚だよく辨へてゐるのに、我國の歴史敘述はなほこの平凡な認識にまで達してゐない。それは各々の時代が自己自身について語り且つ想像するところのものをその言葉通りに信じてゐるのである。

〔B、唯物論的見方に於ける經濟、社會、個人及びその歴史。〕

〔……〕第一のものからは、發達せる分業と擴大されたる商業の前提が生じ、第二のものからは、地方的性質が生ずる。第一のものにあつては個人は連繫されてゐなければならない、第二のものにあつては個人は與へられた生産要具と並んで自身生産要具として存在する。従つてここに、自然生的な生産用具と文明によつて作られた生産要具との間の區別が現はれて来る。耕地、（水等々）、は自然生的な生産要具と見られることが出来る。第一の場合、即ち、自然生的な生

産要具にあつては、個人は自然のもとに包攝され、第二の場合には労働の一生産物のもとに包攝される。従つて、第一の場合には財産（土地所有）もまた直接的な、自然生的な支配として現はれ、第二の場合には労働、特に蓄積された労働の、資本の支配として現はれる。第一の場合は、個人が、家族であれ、種族であれ、土地そのもの等々であれなんらかの紐帶によつて一共同體に結び合つてゐることを前提し、第二の場合は、彼等が互ひに獨立的であつてただ交換によつてのみ結合されてゐることを前提する。第一の場合に於ては、交換は主として人間と自然との間の交換であり、前者の労働が後者の生産物に對して交換されるところの交換であるが、第二の場合に於ては、交換は主として人間自身の間の交換である。第一の場合には平均的な人智で十分であり、肉體的活動と精神的活動とはなほ全然分離されてゐないが、第二の場合には既に精神的労働と肉體的労働との間の分業が實踐的に成し遂げられてゐなければならぬ。第一の場合には所有者の非所有者に對する支配は人的諸關係に、一種の公共組織に基礎をおくことが出来るが、第二の場合にはそれはひとつの第三のもの、即ち貨幣に於て一の物的な容態をとつてゐなければならぬ。第一の場合には小産業が存在するが、しかしそれは自然生的な生産要具の利用のもとに包攝されてをり、従つて、種々なる個人への労働の割當なしに存在するものである、第二の場合には産業はただ分業に於てまた分業によつてのみ存立してゐる。

これまでのところに於ては我々は生産要具からして出發した、そして既にここに、或る産業上

の段階にとつての私有財産の必然性が明かとなつた。採取産業に於ては私有財産は勞働となほ全く合致してゐる、小産業及び從來の凡ての農業に於ては財産は既存する諸生産要具の必然的結果である、大産業に於て初めて生産要具と私有財産との間の矛盾が大産業自身によつて作り出される、これが作り出されるためには大産業は既に非常に發展してゐなければならぬ。それ故に私有財産制の廢止もまた大産業と共に初めて可能となるのである。

—— ——— 物質的勞働と精神的勞働との最も大がかりな分業は都市と農村との分離である。都市と農村との間の對立は、野蠻から文明への、種族制から國家への、地方割據から國民への推移と共に始まり、そして文明の全歴史を通じて今日（穀物關稅法反對聯盟）に至るまで始終存續してゐる。—— 都市の成立と共に同時に、行政、警察、租稅等々の、約言すれば公共組織並びにそれと共に政治一般の必然性が與へられた。此處に於て初めて直接に分業と生産要具にもとつくところの、人口の二大階級への分割が現はれる。都市は既に人口の、生産要具の、資本の、享樂の、欲望の集中の事實であるに對して、農村はまさに正反對の事實を、即ち孤立と離隔とを展示してゐる。都市と農村との間の對立はただ私有財産制の内部に於てのみ存在することが出来る。それは、個人が分業のもとにそして彼に強要された一定の活動のもとに包攝されてゐることの最も顯著な表現であつて、この包攝たるや、或る者をば局限された都會動物に、他の者をば局限された田舎動物になし、そして兩者の利害の對立をば日々新たに作り出すものである。勞働は

ここでもまた主要事であり、個人にかぶさる力である、そしてこの力にして存在する限り、その限りは私有財産は存在せざるを得ないのである。都市と農村との對立の廢棄は、共同社會の第一諸條件の一つであつて、この條件たるや、誰でも一瞥してわかるやうに、それ自身また、單なる意志だけでは充し得ない數多の物質的前提に依存してゐる（これらの條件についてはなほ詳論されねばならぬ）。都市と農村との分離は、資本と土地所有との分離として、資本即ち單に勞働と交換とにその土臺をもつ一財産の土地所有から獨立したる存在と發展との端初として、把握されることが出来る。

△今や我々の例に移らう。V中世に於て、以前の歴史から出來上つたものとして傳へられたのではなくて、自由になつた農奴をもつて新たに形作られたところの諸都市にあつては、各人が携へて來た僅かばかりの、殆どただ是非なくてはならぬ手道具から成る資本を除けば、各人の特殊な勞働が彼の唯一の財産であつた。絶えず都市へ流れ込んで來る逃亡した農奴たちの競争、諸都市に對する農村の絶えざる戦争、そしてそれに伴ふ都市に於ける組織された兵力の必要、一定の勞働に對する共同所有權の紐帶、手工業者が同時に商人でもあつた時代であるので彼等の商品を販賣するための共同の建築物の必要、並びにそれに伴うて生ずる、これらの建築物からの無資格者の閉め出し、個々の手工業相互の間の利害の對立、勢力をかけて修業した勞働の保護の必要、及び全土の封建的組織、これらが各々の手工業の勞働者たちを同業組合に結合せしめるに至つた諸原因であつた。我々はここでは、その後の歴史的發展によつて惹き起された同業組合制の幾重

もの改變にこの上立入つて論ずることを要しない。農奴の都市への逃亡は中世全體に亘つて間斷なく行はれた。これらの農奴たちは、農村で彼等の領主たちから迫害されて、個々別々に諸都市へやつて來たが、そこには組織されたる公共團體が既に存在してゐて、それに對しては彼等は無力であり、そこでは彼等は彼等の勞働に對する需要と都市に於ける組織されたる彼等の競争者たちの利害とが彼等に指定した地位に服せざるを得なかつた。これらの個々別々に流れ込んで來る勞働者たちはいつまでたつても一勢力となることが出來なかつた、といふのは、彼等の勞働が修業される必要のある同業組合的な勞働であつた場合には、組合の親方たちが彼等を自分たちに隸屬させて、自分たちの利害に従つて彼等を組織したし、さうでなくて、彼等の勞働が修業される必要のないものであり、従つてなんら同業組合的な勞働でなくて日傭勞働であつた場合には、彼等は決して一組織をなすに至らずして、いつまでも未組織の賤民層であつたからである。諸都市に於ける日傭勞働の必要が賤民層を作つた。——これらの諸都市は、その個々の成員の財産の保護並びに生産手段及び防衛手段についての世話を倍加するといふ直接の必要によつて生み出されたところの紛ふ方なき『組合』であつた。これらの諸都市の賤民層は、互ひに見も知らぬ、個々別々に流れ込んで來た個人から成つてをり、しかもこれらの個人は、組織された、武裝せる、彼等を鵜の目鷹の目で監視する力に對してなんらの組織をもたずに對立してゐたために、あらゆる力を缺いてゐた。職人たちと徒弟たちとは、いづれの手工業に於ても、親方たちの利害に最もよく合致するやうな具合に組織されてゐた。彼等が彼等の親方たちに對して立つてゐた家長制的關

係は、親方たちに二重の力を與へた、即ち、一方では職人たちの全生活に及ぼす親方たちの直接の影響に於てであり、そして次には、この家長制的關係が同一の親方のもとで勞働してゐた職人たちにとつて、彼等をほかの親方たちについてゐた職人たちに對して結束し、もつて彼等をこれらの職人たちから切り離したところの一の現實的な紐帶であつたからである。なほ最後に職人たちは、自身親方になるといふ、彼等のもつてゐた利害關係によつて既に、現存する秩序に結びつけられてゐた。それだから、賤民層は、その無力さのためにいつもなんらの效をも奏しなかつたとはいへ、少くとも都市の全秩序に反對する暴動を起すに至つたのに反して、職人たちは單に個々の同業組合の内部での小さい、同業組合制そのものの存在を危くすることのないやうな反抗運動をなしたに過ぎなかつたのである。中世に於ける大きな蜂起はすべて農村から起つた、併しながらそれらも何様に農民たちの分散狀態並びにその結果としての無訓練のために、いつでも全然無効果に終つた。—— ———

これらの諸都市に於ける資本はひとつの自然生的な資本であつた、それは住宅、手道具、及び自然生的な、世襲的な取引關係とから成つてをり、そして交通の未發達と不十分な流通とのために、金に換へられ得ないものとして、親から子へと相傳されねばならなかつた。この資本は近代の資本のやうに、それがこの物に投じてあらうとまたはかの物に投じてあらうと、それにとつてはなんら問題でないやうな、貨幣で評價される資本ではなくて、所有者の一定の勞働と直接に結

びついてそれから全然分離され得ない、そしてその限りに於て身^い分^ふ的^{てき}な資本であつた。——

分業は、諸都市の中では個々の諸同業組合の間に於て、また諸同業組合そのものの中では個々の労働者たちの間に於て、決して徹底的には行はれてゐなかつた。各労働者は労働の一範圍全體に亘つて熟達してゐなければならず、彼の道具をもつて作らるべき凡てのものを作ることが出来なければならなかつた。狭い範圍に限られた交通と個々の都市間の僅少な連絡とは、人口の不足してゐたことと彼等の間に於ける需要に限りがあつたこととは、ヨリ進んだ分業の出現を許さなかつた、従つて、親方にならうと欲する者は誰でも彼の手工業全體に熟練してゐなければならなかつた。それだから中世の手工業者たちにあつてはなほ、自分の専門の労働とこの労働に於ける熟練とに對する關心が見受けられ、この關心は一種の偏狹な藝術趣味といふところにまで高まることもあり得た。併しながらそれだからまた、中世の手工業者はいづれも全然自分の労働に没頭してしまひ、この労働に對して居心地のいい隷屬關係をもち、そして、自分の労働に對して無關心である近代の労働者よりも遙かに多く、労働のもとに包攝されてゐた。——

分業のその次の擴大は、生産と交通との分離、商人といふ特殊な一階級の形成であつた、この分離たるや、歴史的に傳承された諸都市に於ては一緒に（就中ユダヤ人と一緒に）繼承され、また新たに建設された諸都市に於ても忽ちのうちに出現したのである。ここに於て近接した地域以

外に及ぶ商業連絡の可能性が與へられた、この可能性の實現如何は、現存する諸交通機關に、政治的諸關係によつて制約された田舎の治安狀態に（中世全體に亘つて、周知の如く、商人は武裝せる隊商をなして旅行した）並びに交通の及び得る地域のその時々文化の段階によつて制約された需要の未發達發達の程度に、かかつてゐた。——交通が特殊な、一階級に組織されるに至ると共に、商人によつて都市の周圍の近接地以外へ商業が擴大されるに至ると共に、直ちに生産と交通との間の相互作用が現はれる。諸都市は相互に連絡をとり、新しい道具はひとつの都市から他の都市へ持つて來られることになり、そして生産と交通との間の分業はやがて個々の諸都市の間に於ける生産の新しい分業を喚び起し、その各々の都市はやがて或る一つの産業部門を専ら開發することとなる。當初の地方割據の狀態は漸次に解體され始める。

一 地方に於て獲得された諸生産力、特に諸發明が、その後の發展にとつて失はれてしまふか否かは、ひとへに交通の範圍にかかつてゐる。直接の近接地以外に及ぶ交通がなほなんら存在してゐない間は、各々の發明は各々の地方に於て別々になされなければならず、そして蠻族の侵入の如き全くの偶然事、いな、普通の戦争でさへが、發達した生産力と需要とをもつた國土を破壊して、もう一度、初發からやり直さねばならぬやうに立ち至らしめるに十分なのである。歴史の當初に於ては凡ての發明はいづれも日々新たに、且つ各地方地方に於て獨立になされねばならなかつた。商業が比較的よく擴つてゐる場合に於てさへ、發達した諸生産力の全滅する危險が如何に

多いかは、フェニキヤ人及び中世の硝子畫術がこれを證明してゐる、フェニキヤ人の諸發明は、その大部分が、この國民が商業から驅逐されたこととアレキサンダーの侵略及びその結果たる衰亡によつて、永い間失はれてしまつた。同様に中世に於ては例へば硝子畫術がまたさうである。交通が世界交通となり、且つ大産業をその土臺にもち、あらゆる國民が競争戦に引き入れられた時に初めて、獲得された諸生産力の永續が確保されたのである。

種々なる都市の間に於ける分業が先づ齎した結果は、工場制手工業の成立、即ち同業組合制の手に負へないまでに發達した生産部門の成立であつた。工場制手工業の最初の興隆——イタリアに於ける、そして後にはフランドルに於ける——は外部の諸國民との交通をその歴史的前提にもつた。他の諸國——例へばイギリス及びフランス——に於ては工場制手工業は當初は國內市場に限られてゐた。工場制手工業は、上に擧げた諸前提のほかにいまひとつ、人口の——特に農村に於ける——集中の並びに一部分は同業組合法にも拘らず同業組合の中に於て、一部分は商人の間に於て、個人の手中に集まり始めたところの資本の集中の進展をその前提にもつてゐる。

よしなほ最も原始的な形に於てであるにせよ、元々から機械を前提してゐた勞働は、實に間もなく、それが最も發展力のあるものであることが示された。從來は農村に於て、自分らの必要な衣服を作るために、農民たちによつて片手間仕事に營まれた機械が、交通の擴大によつて刺戟され發達させられた最初の勞働であつた。織物業は最初の工場制手工業であり、そしてその後もうねに最も主要な工場制手工業であつた。人口の増加に伴うて被服材料に對する需要が増加したこ

と、促進された流通にもとづいて自然生的な資本の蓄積と可動化とが始つたこと、これによつて奢侈の欲望が喚び起され且つそれが交通の漸次の擴大によつて一般に促進されたこと、これらは織物業に對して量的並びに質的に勅載を與へ、この刺戟は織物業を從來の生産形態から引き離した。自家用のために機械を營む農民は依然として存続したし且つなほ存続してゐるが、彼等と並んで、諸都市には織物業者の新しい一階級が現はれて來た、彼等の織物は全國内市場を目當てにすると共にまた大部分は外國市場をも目當てにしたのである。——大抵の場合僅かの熟練をしか必要とせずしかも程なく數限りもなく多數の部門に細分されたところの勞働たる織物業は、その全性質のしからしめるところから、同業組合の桎梏に對して反抗した。従つて織物業はまた大抵の場合、村落や小さな市場町で同業組合的な組織なしに營まれたが、それらの地は漸次に都市となり、しかも程なくその國々に於ける最も隆盛な都市となつた。——同業組合制に束縛されない工場制手工業の成立と共に直ちにまた財産諸關係が變化した。自然生的な・身分的な資本を超えて進む第一歩は商人の出現によつて行はれた、彼等の資本は元々から可動的であり、當時の諸關係のもとに於てそのやうに言ふことが出来る限りに於て、近代の意味の資本であつたのである。進展の第二歩は工場制手工業に伴うて行はれた、工場制手工業もまた自然生的な資本の大量を可動化し、そして一般に自然生的な資本の量に對して可動的な資本の量を増大したのである。——同時に工場制手工業は、以前に同業組合都市が農民に避難所として役立つたやうに、農民に向つて門戸を閉し若くはひどい賃銀しか支拂はない同業組合に對する農民の避難所となつた。

工場制手工業の初期は同時に浮浪者群の時代であつた、この浮浪者群は、封建的従者の廢止、帝王に仕へて諸侯に對抗した寄せ集めの軍隊の解散、農業の改良及び大面積の耕地の牧場への轉化によつて發生せしめられたものである。この事實だけからしても、如何にこの浮浪者群が封建制の解體と嚴密に聯關してゐるかは明らかである。既に十三世紀に於てこの種の時期がちらほら現はれてゐる、一般的に且つ繼續的にこの浮浪者群が出現するのは、やつと十五世紀の終り及び十六世紀の初めに至つてからのことである。これらの浮浪者は、なかにもイギリスのヘンリー八世がその七萬二千人を絞殺させたといふほどに、數多くあつたのであるが、彼等が勞働するやうにするのには非常な困難が伴ひ、彼等は極度の窮乏に追ひ詰められて、しかも長い間の反抗の擧句やつと勞働するやうになつた。工場制手工業の急速なる興隆、特にイギリスに於けるそれは、彼等を漸次に吸収していつた。——

工場制手工業の成立と共に種々なる國民が一の競争關係に、即ち商業鬭爭に這入つた、この商業鬭爭は戰爭、保護關稅及び輸入禁止の形で戦ひ拔かれた、しかるに、以前にあつては諸國民は、彼等が連絡をもつてゐた限りに於ては、相互の間に平和な交換を行つてゐたのである。商業はこの時以來政治的意義をもつてゐる。

工場制手工業に伴うて、同時に、勞働者の雇主に對する關係の變化が起つた。同業組合に於ては職人と親方との間にはなほ家長制的な關係が存續してゐた、工場制手工業に於てはこれに代つ

て勞働者と資本家との間に貨幣關係が現はれて來た、この關係たるや、農村及び小都市に於ては依然として家長制的に色づけられてゐたが、しかしヨリ大きな、本來の工場制手工業都市に於ては既に夙くから殆ど凡ての家長制的色彩を失つてゐた。

工場制手工業及び一般に生産の運動は、アメリカの發見と東印度への航路の發見とに伴うて出現したところの交通の擴大によつて異常なる飛躍を遂げた。かの地から輸入された新しい生産物特に大量の金及び銀——これらは流通界に這入つて階級相互の地位を全部變化し、封建的土地所有及び勞働者に對して手酷い打撃を加へた——探檢隊、植民、及び何よりも、今や可能となりそして日々益々多く實現されて行つたところの、諸市場の世界市場への擴大、これらのものが歴史的發展のひとつの新しい様相を喚び起した、しかしそれについては一般にここではこれ以上入ることが許されてゐない。新たに發見された國々への植民によつて諸國民相互の商業鬭争は新たな營養を得、それに應じて範圍を擴大し且つ激烈さを加へた。

商業及び工場制手工業の擴大は可動的資本の蓄積を促進した、しかるに生産の擴張へのなんらの刺激をも經驗しなかつた同業組合に於ては、自然的な資本は停頓したままであつたか、さもなければ却つて減少しさをした。商業と工場制手工業とは大ブルジョアを作り、同業組合の中には小市民層がかたまつた、彼等は今はもはや、以前のやうに、都市に於て支配的位置に立つことなく、却つて大きな商人と工業制手工業者との支配の前に身を屈せねばならなかつた。それだから同業組合は、それが工場制手工業と接觸するや否や、その衰亡がやつて來た。

諸國民の交通に於ける彼等相互間の關係は、我々の論じ來つたところの時期の間に、二つの異つた姿態をとつた、當初には、金及び銀の流通する量の僅少なためにこれらの金屬の輸出禁止が必要であつた、そして膨脹する都市の人口に職業を與へねばならぬために必要とせられ、大抵の場合外國から移植されたところの産業は、諸特權なしではやつて行くことが出來なかつた、これらの特權たるや、言ふまでもなく、單に國內の競争に對してばかりでなく、むしろ主として外國の競争に對して保護するために賦與され得たものであつた。これらの當初の輸出入禁止に於て、地方的であつた同業組合の特權が全國民の上に擴大された。關稅は、封建的領主が自分の領内を通過する商人に對して掠奪しない代償として賦課した貢納金から發生したものであるが、この貢納金は、その後都市によつても同様に賦課せられ、そしてそれは近代國家の出現に際しては、國庫にとつて貨幣を得るための最も手近かな手段であつた。——ヨーロッパの諸市場に於けるアメリカの金銀の出現、産業の漸次の發展、商業の急速なる飛躍及びこれによつて喚び起された同業組合的ならざるブルジョアジーと貨幣との興隆は、これらの右に擧げた諸方策に違つた意味を與へた。貨幣なしにすまふことが日毎に愈々不可能になつた國家は、今や、財政上の諸見地からして金及び銀の輸出禁止を繼續した、ブルジョアにとつてはこの新たに市場に放出された大量の貨幣が暴利獲得の主要對象物であつたので、彼等はこれらの諸方策がとられることに完全に満足であつた、從來の諸特權は政府にとつて一の收入源泉となり、賣られて貨幣に代へられた。關稅立法のうちに輸出稅が現はれて來たが、このものは純粹に財政的な目的をもつてをり、産業にとつ

てはただその進路を阻害するだけであつたのである。――

第二の時期は十七世紀の中葉をもつて始り、殆ど十八世紀の終りに至るまで繼續した。商業と航運とは工場制手工業よりも急速に擴大され、工場制手工業は第二次的な役割を演じた、諸植民地は有力な消費者となり始めた、個々の諸國民は永い間の戦争を通じて、開かれつつある世界市場を分け取りした。この時期は航海條令及び植民地獨占をもつて始つてゐる。諸國民相互の間の競争は關稅率、輸出入禁止、條約によつて出来るだけ除去された、そして究極に於ては競争戦争（特に海戰）によつて戰はれ、勝負を決せられた。海上に於て最も強力な國民、イギリス人が、商業及び工場制手工業に於て優勢を保持した。既にここに一個國への集中が見られる。――工場制手工業は絶えず國內市場に於ては保護關稅によつて、植民地市場に於ては獨占によつて、そして外國市場に於ては出来るだけ十分に差別關稅によつて、保護された。その國自身のうちで產出された原料の加工は保護獎勵され（イギリスに於ける羊毛及び麻、フランスに於ける生糸）、國內で產出された原料の輸出は禁止され（イギリスに於ける棉花）。海上貿易と植民地的勢力に於て首位に立つてゐた國民は當然にまた工場制手工業の最大の量的並びに質的擴大を保證されてゐた。工場制手工業は一般に保護なくしてはやつてゆくことが出来なかつた、といふのは、それは、他の國々に於て生ずる極めて僅かな變化によつても、その市場を失ひ、衰滅させられ得る

からである、工場制手工業は或る國に若干程度の好都合な條件のもとに於ては容易に移植されたが、またまさにその故に、容易に破壊されたのである。工場制手工業は同時に、それが特に十八世紀に農村に於て營まれたやうな仕方を通じて、多數の個人の生活諸關係と極めて密接に結び合はされてゐるために、いづれの國も自由競争を許すことによつて工場制手工業の存在を賭することとを敢てなし得ない。それ故に工場制手工業は、それが輸出をするまでに至る間は、全然商業の擴大若くは制限によつて左右せられ、そして商業に對しては比較的に極めて僅少な反作用を及ぼすにとどまつてゐる。十八世紀に於ては、そのために工場制手工業は第二次的な意味しかもたず、またそのために商人は勢力をもつてゐたのである。他の何人にもまして國家の保護と獨占とを迫つた者は、商人、特に船主であつた。工場制手工業者も固よりまた保護を要求し且つそれを獲得したのではあるが、しかし政治的重要性に於てはいつでも商人にひけをとつてゐた。商業都市、特に海港都市は或る程度まで文明化され且つ大市民的となつたのに、工場都市に於ては依然として最大の小市民風が存続した。エーキン等々參照。十八世紀は商業の世紀であつた。ピントーはこのことをはつきりと云つてゐる。曰く、商業はこの世紀の寵兒の役をしてゐる。また曰く、少し以前からといふものは、商業、航海及び海軍のほかもはや何も問題になつてゐない。

資本の運動は、著しく急速化されたとはいへ、しかも依然としてなほつねに比較的に緩慢であ

つた。世界市場が個々の部分に細分されてその各々が別々の國民によつて搾取されてゐたといふこと、諸國民相互の間に於ける競争が排斥されてゐたといふこと、生産そのものがたゞたゞしかつたといふこと、及び貨幣制度がその最初の段階を出てやつと發展し始めたばかりであつたといふこと、これらの事情が流通を甚しく阻止した。その結果として小賣商人的な汚いけちな根性が出來、この根性は凡ての商人と商業經營の仕方の全體になほこびりついてゐた。尤も、工場制手工業者に比較しては、従つてなほさら手工業者に比較しては、彼等は確かに大市民であり、ブルジョアであつたが、次の時期の商人や産業家に比較しては、彼等はどこまでも小市民である。アダム・スミス參照。――

この時期はまた、金及び銀の輸出禁止の撤廢、金融業の、銀行の、國債の、紙幣の、株式及び公債の投機の、あらゆる物貨の相場取引成立によつて、貨幣制度一般の完成によつて特徴づけられてゐる。資本はまたもや自己になほ粘着せる自然生的性質の大部分を失つた。

十七世紀に於て不斷に進展せるところの、一國即ちイギリスへの、商業並びに工場制手工業の集中は、この國のために漸次に一の相對的な世界市場を作り出し、そしてそれによつてこの國の工場制手工業の生産物に對して從來の産業上の生産力によつてはもはや充され得ないやうな需要を作り出した。生産力の手に負へないほど大きくなつたこの需要は、大産業——産業上の目的のための諸自然力の應用、機械及び最も擴大されたる分業——を生み出したことによつて、中世以

降に於ける私有財産制の第三期を招來したところの推進力であつた。この新しい様相の爾餘の諸條件——國民の内部に於ける競争の自由、理論力學の發達（ニュートンによつて完成された力學は一般に十八世紀に於てフランス及びイギリスで最も人氣のある科學であつた）等々は、イギリスに於ては既に存在してゐた。（國內に於ける自由競争でさへもが何處でも革命によつて戦ひとられねばならなかつた——イギリスに於ては一六四〇年及び一六八八年、フランスに於ては一七八九年に。）競争は間もなく、自己の歴史的役割を保持しようと欲した凡ての國々をして、關稅方策の改新によつてその國の工場制手工業を保護し（舊關稅は大產業に對抗してはもはや用をなさなかつた）次いで間もなく保護關稅のもとに大產業を移植することを餘儀なくせしめた。大產業は、これらの保護手段にも拘らず競争を一般化し（大產業は實踐的な商業の自由であつて、保護關稅は大產業にあつては單に一の緩和劑であり、商業の自由の範圍内での一の防禦手段であるに過ぎない）、交通機關及び近代的世界市場を作り上げ、商業を征服し、一切の資本を産業資本に轉化せしめ、そしてそれによつて迅速なる流通（貨幣制度の完成）及び諸資本の集中を生み出した。それは一般的競争によつて凡ての個人をして彼等の精力を極度に緊張させるやうに餘儀なくした。それは出來得る限りイデオロギー、即ち、宗教、道德等々を撲滅した、そしてこれをなし得なかつた場合には、それはこれらのものを一目瞭然たる虚妄たらしめた。それは、それが各文明國及びその内の各個人をしてその欲望の満足に於て全世界に依存せしめ、もつて個々の國民の從來の自然生的な孤立狀態を打破した限りに於て、初めて世界史を生み出した。それは

自然科學を資本のもとに包攝し、分業から自然生的性質の最後の外觀を取り去つた。それは、勞働の内部でさうすることが可能である限りに於て、一般に自然生的性質を絶滅し、一切の自然生的關係を解消して貨幣關係となした。それは自然生的な都市の代りに、一夜のうちに出来上つた近代的な大産業都市を作つた。それは、それが侵入して行つた處では、手工業を、そして一般にあらゆる以前の段階の産業を、破砕した。それは農村に對する都市の勝利を完成した。その特徴は自働的な組織である。それは大量の生産力を産み出したのであるが、これらの生産力にとつて私有財産制は、あたかも、同業組合が工場制手工業にとつて、また小さな、農村的な經營が發達しつゝある手工業にとつて桎梏であつたと同様に、一の桎梏となつた。これらの生産力は私有財産制のもとに於ては單に一面的な發展をなし、その多數はといへばむしろ破壊力となり、また多量のこのやうな生産力は私有財産制のうちに於ては全然利用されるに到ることが出来ない。それは一般に、何處に於ても、社會の諸階級の間に同一の諸關係を作り出し、そしてそれによつて個々の國民の特殊性を絶滅した。そして最後に、各國のブルジョアジーがなほ別個獨立な國民的利害を持ち續けてゐる間に、大産業は、あらゆる國民にあつて同一の利害を有し且つそれにあつては國籍が既に廢滅されてゐるところの一階級を作り出した、この階級たるや、現實的に全舊世界から自由であり、そして同時にこれに對立せるものである。それは勞働者にとつて單に資本家に對する關係をのみでなくまた勞働そのものをも堪へ難きものにする。

大産業が一國の各地方に於て同一の高さに發達を遂げるものでないのは固よりである。けれど

このことはプロレタリアートの解放運動を阻止しはしない、なぜなら、大産業によつて生み出されたプロレタリアがこの運動の先頭に立つて全大衆を自己と一緒に引き連れて行くからであり、そして大産業から閉め出された労働者たちは、この大産業によつて、大産業そのものの労働者たちよりもなほ一層悪い生活状態に突き落とされるからである。これと同様な仕方では、大産業の發達してゐる國々は、多かれ少なかれ非産業的な國々に對して、後者が世界交通によつて一般的な競争戦の中へ引摺り込まれてゐる限り、影響を及ぼすのである。

これらの種々なる形態はそれぞれ労働の、従つて財産の、組織の形態である。いづれの時期に於ても、欲望によつてそれが必要とされてゐた限りに於て、存在する諸生産力の結合が行はれたのである。

生産力と交通形態との間のこのやうな矛盾は、我々の見たやうに、從來の歴史のうちに既に幾度も、しかもなほ歴史の土臺を危くすることなしに、現はれた矛盾であつて、それはその都度の革命となつて爆發せざるを得なかつた。その際この矛盾は同時に種々なる副次的な姿を採つた、即ち、諸衝突の總體としては種々なる階級間の諸衝突の形をとり、意識の矛盾としては思想闘争等々の形をとり、政治闘争等々の形をとつた。そこでひとは、一の局限された見地からしては、これらの副次的な姿のうちの一つを取り出してそれをこれらの革命の土臺であると見ることが出来る、しかもこのやうに見ることは、革命の出發點であつたところの個人が、自分たちで

も、彼等の教育程度と歴史的発展の段階とにそれぞれ應じて、自分たち自身の活動そのものについて諸々の幻想を描いてゐたために、愈々もつて容易である。——

かくて、歴史上のあらゆる衝突は、我々の見解に従へば、その根源を生産力と交通形態との間の矛盾のうちにもつてゐる。尤も、この矛盾が或る一國に於て諸衝突に導くためには、それがこの國自身のうちで極端にまで押し詰められてゐるといふことは必要でない。國際交通の擴大によつて喚び起されたところの、産業的にヨリ發達せる諸國との競争は、産業の發達がヨリ進んでゐない諸國のうちに於てもまた同様な矛盾を生み出すに十分である（例へば、ドイツに於ける潜在的なプロレタリアートはイギリスの産業の競争によつて顯現せしめられた）。

競争は個人を結びつけるにも拘らず、それは個人を、單にブルジョアばかりでなく、むしろなほヨリ多くプロレタリアを、相互に孤立せしめる。それだから、これらの個人が結合し得るまでには、この結合のために——それが單に地方的であるべきでない以上——必要な諸手段、即ち大産業都市及び廉價で迅速な交通が大産業によつて先づ作られてゐなければならぬといふことは別としても、長い時がかり、またそれだから、これらの孤立化された者そしてこの孤立化を日々再生産するやうな諸關係の中で生活してゐる個人に對立せるあらゆる、組織された力は永い闘争の後にやつと克服されるのである。これと反對のことを望むのは、あたかも、この特定の歴史的時代に競争は存在すべきでないと望んだり、若くは、個人は、彼等が孤立化された者として

はそれに對してなんらの統制をもたないところの諸關係を、腦裡から追ひ拂ふべきであると望んだりするのと同じことであらう。――

家屋の建造。蠻人にあつては、各々の家族が、丁度遊牧民の場合に各々の家族の別々の天幕をもつてゐるやうに、自分自身の穴もしくは小屋をもつてゐるのは言ふまでもないことである。このやうな分立せる家經濟は私有財産制のヨリ一層の發展によつてなほ益々必要にされるばかりである。農耕民族にあつては共同の家經濟は、共同の土地耕作と同様に不可能である。都市の建設は一の大きな進歩を意味した。けれども、從來の凡ての時代に於ては、私有財産制の廢止から切り離すべからざるところの分立せる經濟の排棄といふことは、そのための物質的諸條件が存在しなかつたといふ理由からして既に、不可能であつた。共同の家經濟の組織は、機械の、自然力の利用の、及びその他の多くの生産力の發展を前提する――例へば、水道、瓦斯點燈設備、蒸氣暖房設備等々の發達、都市と農村の排棄の如きがそれである。これらの諸條件なしには、共同の經濟なるものはそれ自身また一の新たな生産力であることなく、一切の物質的土臺を缺いて、一の單に理論的な基礎の上に立つにとどまり、即ち一の單なる幻想であり、そして高々僧院經濟にまで達するに過ぎないであらう。――何が可能であつたかは、都市への密集と個々の特定の目的のための共同の家屋（監獄、兵營等々）の建造とに於て示されてゐる。分立せる經濟の排棄が家族の排棄から切り離すべからざることは、おのづから明かなことである。

(各人はその全存在を國家によつて享けてゐる、といふ聖マックスに於て屢々出て來る命題は、根本に於て、ブルジョアはブルジョア種族の一事例である、といふ命題と同じものである、この命題たるや、ブルジョアの階級はこれを構成する個人の前に既に存在してゐたといふことを前提するのである)。中世に於ては、各都市に於ける市民たちは、死力を盡して自己を防衛するため、土地貴族に對抗して團結することを餘儀なくされてゐた。商業の擴大と交通の施設とは、個々の都市をして、同一の敵に對する鬭争に於て同一の利益を達成したる他の諸都市と相知るに至らしめた。個々の諸都市に於ける多くの地方的な市民層から漸く極めて徐々に市民階級が成立した。個々の市民たちの生活諸條件は、現存する諸關係に對する對立並びにそれから制約された勞働の仕方によつて、同時に、彼等の凡てにとつて共通であると共にそのいづれの個人からも獨立であつたところの諸條件となつた。市民たちは、彼等が封建的結合體から自己をもぎ離した限りに於ては、これらの諸條件を作り出したのであるが、彼等が所與の封建制に對する彼等の對立によつて制約されてゐた限りに於ては、これらの諸條件によつて作り出されたのである。個々の都市の間の結合の出現と共に、これらの共通の諸條件は階級の諸條件にまで發展した。同一の諸條件、同一の對立、同一の諸利害は、大體に於てまた何處にも同様な習俗を發生せしめねばならなかつた。ブルジョア自身は、最初は、その諸條件と共に漸次に發展し、分業に従つて更に種々なる分派に分裂し、そして遂には、一切の既存する財産が産業資本若くは商業資本に轉化

される程度に應じて、一切の既存する有産諸階級を自己のうちに吸収する、（これと同時に他方ではブルジョアジーは、既存する無産諸階級の大部分及び從來の有産諸階級の一部分をば一の新しい階級、即ち、プロレタリアートにまで發展せしめる）。個々の個人は、彼等が一の他の階級に對して共同の鬭争を戦はねばならない限りに於てのみ、一階級を形作る、その餘の點に於ては彼等は互ひに彼等自身競争に於て再び敵對的に對立する。他方に於て、階級はまた個人に對して獨立し、その結果個人は、彼等の生活諸條件を豫定されたものとして受取り、階級によつて彼等の生活地位とそしてそれと共に彼等の人格的發展を指定して貰ひ、階級のもとに包攝されることとなる。これは、分業のもとへの個々の個人の包攝と同一の現象であり、そしてただ私有財産及び勞働そのものの廢止によつてのみ除去されることが出来る。如何にして階級のもとへの個人のこの包攝が、同時に、種々雑多な表象等々のもとへの包攝にまで發展するか、は我々が既に幾度も暗示して來たととろである。

若しひとが歴史的に繼起する諸身分及び諸階級の共通の生存諸條件並びにそれと共に個人に押しつけられた一般的諸表象の中に於ける個人のこのやうな發展を哲學的に考察するならば、ひとは實際容易に、これらの個人に於て種または人間なるものが發展したのであるとか、或ひは、これらの個人は人間そのものを發展させたのであるとか、と想像することが出来る。この想像は、それでもつて歴史の横面が二三ひどく擲られるといふものだ。そのときにはひとは、これらの

種々なる身分及び階級を一般的表現の諸特殊化として、種の諸亞種として、人間なるものの諸發展相として把握することが出来る。

特定の階級のもとへの個人のかかる包攝は、支配階級に對してなんらの特殊な階級利益をももはや達成するを要しない一階級が形成されるに至るに先立つては、排棄されることが出来ぬ。

分業による諸々の人格的な力（關係）の物的な力への轉化は、それについての一般的表象を腦裡から追ひ拂ふことによつて再び排棄され得るのでなく、却つてただ、個人がこれらの物的な力を再び自己のもとに包攝し、分業を排棄することによつてのみ、排棄されることが出来る。このことは共同社會なしには不可能である。共同社會に於て初めて個人は、彼の素質をあらゆる方面に向つて發達させる手段を得る、それ故に共同社會に於て初めて人格的自由は可能になる。共同社會の從來の諸代用物、即ち、國家等々のものに於ては、人格的自由はただ、支配階級の諸關係の中で發達した個人にとつてのみ、そしてただ彼等がこの階級の個人であつた限りに於てのみ存在した。從來個人が結合して形作つてゐたところの見せかけの共同社會は、つねにそれらの個人に對して自己を獨立化した、そして同時にそれは、それが一の階級の他の階級に對しての結合であつたが故に、被支配階級にとつては單に一の全然幻想的な共同社會であつたばかりでなく、むしろまた一の新たな桎梏であつた。現實的な共同社會においては個人は、彼等の聯結に於てまたそれによつて、同時に彼等の自由を獲得する。——個人はいつでも自己から出發した、けれどもそれは言ふまでもなく、彼等の與へられたる歴史的諸條件及び諸關係の内部に於ける自己からで

あつて、イデオログたちの意味に於ける『純粹な個人』からではない。しかるに歴史的發展の過程に於て、そしてまさに分業の内部に於ては不可避的な社會的諸關係の獨立化によつて、各々の個人の生活の中に、それが人格的である限りに於ての生活と、それが勞働のなんらかの部門及びこれに屬する諸條件のもとに包攝されてゐる限りに於ての生活との間に於ける一の區別が現はれて来る。このことは、例へば、金利生活者、資本家、等々が人格的存在であることをやめるといふが如くに解さるべきではない、むしろ彼等の人格が全く特定の階級諸關係によつて制約され且つ規定されてゐるのである、そしてかの區別は最初一の他の階級に對する對立に於て現はれ、彼等自身にとつては、彼等が破産するときに至つて初めて現はれるのである。身分に於ては（種族に於てはなほさら）このことがなほ蔽ひ隠されてゐる、例へば、貴族はどこまでもつねに貴族であり、平民はどこまでもつねに平民である、それは、彼の爾餘の諸關係を度外視するならば、彼の個性から切り離し得ぬ性質である。階級的個人に對する人格的個人の差別、個人にとつての生活諸條件の偶然性は、かの階級、即ち、それ自身ブルジョアジーの一所産たる階級の出現と共に初めて現はれて来る。個人相互の間の競争及び鬭争が初めてこの偶然性を偶然性として産出し且つ發展せしめる。それだから、表象に於ては、個人はブルジョアジーの支配のもとに於ては、以前よりも一層自由である、蓋し彼等にとつて彼等の生活諸條件が偶然であるからである、しかし現實に於ては、彼等はもちろん一層不自由である。蓋し彼等はヨリ多く物的な強力のもとに包攝されてゐるからである。身分の差別はプロレタリアートに對するブルジョアジーの對立に

於て特に顯著になる。土地貴族に對立して都市市民の身分、職業團體等々が擡頭したとき、彼等の生存條件、即ち動産と手工業勞働とは——これらは既に彼等が封建的團體から分離する以前に潜在的に存在してゐた——封建的土地所有に對して主張された或る積極的なものとして現はれ、そこでまたそれは、最初にはそれ自身の仕方に於てやはり封建的形態をとつたのである。逃亡農奴が彼等の從來の農奴的地位を或る彼等の人格にとつて偶然的なものとして取扱つたことはたしかである。しかしかうしたことによつて彼等は、單に、ひとつの桎梏から自己を解放しようとするいづれの階級でもがなすところと同一のことをなしたに過ぎないのであり、そして次に彼等は階級としてでなく、却つて個々別々に自己を解放したのである。更に彼等は身分制の範圍から脱出したのでなく、却つて單に一の新たな身分を形作つたに過ぎないのであり、且つこの新たな地位に於てもまた彼等の從來の勞働の仕方を保持し、そしてそれをば、その從來の、既に達せられたその發展に相應せぬ桎梏から解放することによつて、一層發達させたのである。——これに反してプロレタリアにあつては、彼等自身の生活條件は勞働である、従つて今日の社會の全體の生存條件は彼等にとつては或る偶然的なものとなつてをり、これに對しては個々のプロレタリアはなんらの統制をもたず、またこれに對しては如何なる社會的組織も彼等のために統制を與へることが出来ないものである、かくて個々のプロレタリアの人格と彼に押しつけられたところの彼の生活條件即ち勞働との間の矛盾は、彼その人にとつて現はれて來る、蓋し特に、彼は既に若い時から犠牲にされるからであり、また彼の階級の内部に於て、彼を他の階級へ移らせるやうな

諸條件に達するといふ機會が彼に缺けてゐるからである。――

注意。次のことは忘れらるべきでない、即ち、既に農奴は生存せねばならなかつたし、また大經濟が不可能であつてその結果農奴への割當地の分配が行はれたために、極めて間もなく、封建領主に對する農奴の諸義務は現物貢納と賦役との平均額にまで輕減されたが、この額といふものは農奴にとつて動産の蓄積を可能ならしめ、そしてそれによつて彼が彼の領主の掌中から逃亡することを容易ならしめ、且つ都市市民として彼が榮達することに對する見込を彼に與へ、また農奴の間に段階を生ぜしめ、かくて逃亡するやうな農奴は既に半ば市民であるといふ状態となつた。この場合、或るひとつの手工業に熟達してゐる農奴的農民が動産を獲得する機會を最も多くもつてゐたといふことは、これまた同じく明白なことである。

かやうにして、逃亡農奴は單に、彼等の既に存在せる生存諸條件を自由に發展させ且つ承認させようと欲したにとどまり、従つて究極に於て單に自由なる勞働といふことにまで到達したに過ぎなかつたのに反して、プロレタリアは、人格として自己を主張するためには、彼等自身の從來の生存條件であると同時に從來の全社會の生存條件であるところのもの、即ち勞働を廢棄しなければならぬ。それだからまた彼等は、社會の諸個人が從來それに於てみづから一の總體的表現を與へたところの形態、即ち國家に對して眞正面から對立する地位に立つてをり、そして、自

己の人格を貫徹するためには、國家を顛覆しなければならない。

すべてこれまで展開して來たところから次のやうな結論が出て來る、即ち、一階級に屬する個人がその中に入り込み、且つ第三者に對する彼等の共同の利害によつて制約されてゐたところの共同關係は、つねに、これらの個人が單に平均個人としてののみ、彼等が彼等の階級の生存諸條件の中に於て生活してゐた限りに於てのみ、それに所屬してゐたところの共同社會であつた、この共同關係たるや、それらの個人が個人としてでなく、却つて階級成員としてそれに分與してゐたのである。これに反して、彼等の及び一切の社會成員の生存諸條件を彼等の統制のもとに引き入れるところの革命的プロレタリアの共同社會にあつては、それが丁度逆である、即ちこの共同社會には個人が個人として參加する。これこそまさに、個人の自由なる發展と運動との諸條件を彼等個人の統制に従はしめるところの個人の結合である（今日發展し來つた諸生産力の前提の内部に於けることはもちろんである）、これらの諸條件たるや、從來は偶然に委ねられてをり、そして個々の個人に對して、まさに個人としての彼等の分離によつて、また彼等の必然的な結合——それは分業に伴うて生じ、そして個人の分離によつて一の彼等にとつて外的な紐帶となるに至つた——によつて、自己を獨立化せしめてゐたのである。從來の結合は、單に一の決して任意的——例へば『民約論』に述べられてゐる如き——ならぬ、却つて、必然的な結合であつた（例へば北アメリカの國家の形成及び南アメリカの諸共和國を参照せよ）、これらの諸條件について、これらの諸條件の内部に於てしかるとき個人は偶然性を享受してゐたのである。或る一定の諸條件の

内部に於て妨げられることなく偶然性を享有し得るといふこの權利を、ひとは從來人格的自由と名づけた。——これらの生存諸條件はもちろんただその時々諸生産力と諸交通形態とにほかならないのである。——

共產主義が從來のあらゆる運動から區別される點は、それが從來のあらゆる生産關係及び交通關係の基礎を變革し、且つあらゆる自然生的な前提を初めて意識的に從來の人間の創造物として取扱ひ、それらのものの自然生的性質を剝奪し、結合せる個人の力に従屬せしめるところにある。それ故に共產主義の建設は本質的に經濟的である。即ち、個人のこのやうな結合のための諸條件の物質的な建設であつて、これは既存する諸條件をこのやうな結合の諸條件たらしめる。共產主義が創造するところの現存物こそまさに、個人から獨立せる現存物の一切を、この現存物がそれにも拘らず個人そのものの從來の交通の生産物にほかならないものである限りに於て、可能ならしめるための現實的な土臺である。それだから共產主義者たちは從來の生産及び交通によつて生み出された諸條件を非有機的なものとして實踐的に問題にする、しかもその際彼等は、彼等に材料を給付するといふことが從來の諸世代の計畫若くは使命であつたとは想像しないし、また、これらの諸條件がそれを、創造せる個人にとつて非有機的であつたとも信じないのである。

人格的個人と偶然的個人との間の區別は、概念上の區別ではなく、却つて一の歴史的事實であ

る。この區別は時代を異にするに従つて種々異なる意味をもつてゐる、例へば、身分は十八世紀に於ては個人にとつて或る偶然的なものであり、多かれ少かれ家族もまたさうであつた。この區別は、我々が各時代に代つてなさねばならぬ區別でなく、却つて各時代がその時代に存在せる種々なる要素の間に於て、みづからなし、そしてしかも概念に従つてではなく、却つて物質的な生活の衝突によつて餘儀なくされてなすところの區別である。後代にとつて、前代とは反對に、それだからまた後代に前代から傳承された諸要素の間に於て、偶然的として現れるところのものは、諸生産力の一定の發展に相應してゐたところの交通形態である。諸生産力の交通形態に對する關係は、交通形態の個人の行動または活動に對する關係である。（この自己活動の基本形態は言ふまでもなく物質的なそれであり、一切の他の精神的、政治的、宗教的、等々のそれはこの物質的な自己活動に依存してゐる。物質的生活の種々なる形狀は、言ふまでもなく、その時々^に於て、既に發展してゐる諸欲望に依存してゐる、そしてこれらの諸欲望の生産並びに充足は共にそれ自身、羊または犬にあつては決して存在しないところの一の歴史的過程である（人間に反對する、スチルナーの意地の悪い主要論證）、尤も羊や犬と雖も彼等の現在の姿に於てはたしかに、だが彼等の意に反して、一の歴史的過程の產物である。）個人がそのもとに於て、矛盾のなほ出現してゐない間は、相互に交通するところの諸條件は、彼等の個性に屬する諸條件であつて、彼等にとつてなんら外的なものではなく、そのもとに於て、特定の諸關係のうちに生存するこれらの特定の個人が、ただ彼等のみが、彼等の物質的生活並びにそれと聯關するところのものを生産し

得るところの諸條件である、従つてそれらは彼等の自己活動の諸條件であり、且つこの自己活動によつて生産されるのである。それだから、彼等がそのもとに於て生産する特定の條件は、矛盾がなほ出現してゐない間は、彼等の現實的な被制約性に、彼等の一面的な存在に相應する、そして彼等の存在の一面性は矛盾の出現によつて初めて自己を顯はにするのであり、従つてただ後代の人々にとつてのみ存在するのである。そのときにはこの條件は一の偶然的な桎梏として現はれ、そしてここに於て、それは一の桎梏である、といふ意識が前代にも轉嫁されるのである。

最初には自己活動の諸條件として現はれ、後にはその諸桎梏として現はれるこれらの種々なる諸條件は、全體の歴史的發展に於て、交通諸形態の相關聯する一系列を形作る、この關聯たるや、桎梏となつた以前の交通形態の代りに、ヨリ發展せる諸生産力並びにそれと共に個人の自己活動の進歩せる仕方に相應する一の新たな交通形態が置かれ、今度はそれがまた桎梏となり次いで一の更に他の交通形態によつて代られる、といふところに成立してゐる。これらの諸條件は、いづれの階段に於ても、同一時期に於ける諸生産力の發展に相應するからして、これらの諸條件の歴史は同時に、自己を發展させそしてそれぞれ新しい世代によつて傳承されたところの話生産力の歴史であり、従つてまた個人自身の諸力の發展の歴史である。

この發展は自然生的に行はれるが故に、即ち、自由に結合した個人の總體的計畫に従屬せしめられてゐないが故に、それは種々なる地方、種族、國民、勞働部門、等々に源を發し、これらの

もの各々は最初には他から獨立に發展し、後になつて初めて漸次に他と結びつくのである。更に、この發展はただ極めて徐々に行はれる、諸利害の種々なる階段は、決して完全には克服されず、却つて單に勝利せる利害に従屬せしめられるだけであつて、なほ數百年もの間その側に存続するのである。このことからして、次のやうな結果が見られる、即ち、一國民の内部に於てさへ個人は、彼等の財産諸關係を度外視しても、全く相違せる程度の發展をもつてゐる、また以前の利害は、それに固有な交通形態が既に後代の利害に應ずる交通形態によつて追ひ除けられてゐても、なほ永い間、個人に對して獨立化された見せかけの共同社會（國家、法律）のうちに於て一の傳統的な力を依然として所有し續ける、この力たるや、究極に於てはただ革命によつてのみ打破され得るのである。このことからしてまた、何故に、一のヨリ一般的な概括論を許すやうな個々の諸點に關しては、意識が時として同時代の經驗的諸關係よりも一步先に進んでゐるかの如く見えることが出來、その結果、ひとが後の時代の諸鬭爭に於て前代の理論家たちを諸權威として援用することが出来るか、といふことも説明されるのである。——これに反して、北アメリカの如く、既に發展した歴史的時代に於て最初から始めるところの國々にあつては、發展は甚だ急速に行はれる。このやうな國々は、そこへ移住せる個人、しかも彼等の諸欲望に相應しないところの舊い國々の諸交通形態によつてそこへ移住する動機を与へられた個人以外にはなんら他の自然生的な前提をもつてゐない。それだからそれらの國々は舊い國々の最も進歩した個人をもつて、従つてこれらの個人に相應する最も發展した交通形態をもつて、しかもこの交通形態がなほ

舊い國々に於て實現され得ない先きに、事を始めるわけである。これは、それが單なる軍事上若くは商業上の根據地でない限り、凡ての植民地がさうである。カルタゴ、ギリシア植民地及び十一、十二世紀に於けるイスラントがその實例を提供してゐる。これと同様な關係は征服の場合に於ても、もし征服された土地へ他の地盤の上で發展せる交通形態が出来上つたものとして持つて來られる場合には、生ずる。その母國に於てはこの交通形態はなほ以前の時代からの諸利害と諸關係につきまとはれてゐたのに反して、ここに於てはそれは、征服者たちに永續的な權力を保證するためだけにでも、完全に且つ障害なしに、實現され得、またされねばならない。（ノルマン人の征服後のイギリス及びナポリ、これらの地はこの征服に際して封建的組織の最も完成された形態を得たのである。）

この全史觀にかの征服なる事實は矛盾するかの如くに見える。從來ひとは暴力、即ち、戦争、掠奪、強盜殺人等々をもつて歴史の推進力となして來た。我々はここではただ主要な諸點にのみ限つて論じて差支へない、従つて我々はただかの顯著なる例、即ち、野蠻民族による奮い文明の破壊及びその後を承けて最初から開始された社會のひとつの新たな組織の形成を例にとることにしよう。（ローマと野蠻人、封建制とガリヤ人、東ローマ帝國とトルコ人。）征服を行ふ野蠻民族にあつては、戦争そのものがなほ、既に上に暗示しておいたやうに、一の正常的な交通形態であつて、このものは、彼等の間にしきたりの且つ彼等にとつて唯一的に可能な、原始なる生産の

仕方のもとに於て人口の増加のために新たな生産手段の必要が作り出されることの多ければ多いほど、益々熱心に利用されるのである。イタリアに於てはこれに反して、土地所有の集中（これは買ひ占めや負債責めによるほか、なほまた相續によつて惹き起されたのである、といふのは、淫風が盛んで結婚といふものが稀であつたために、舊門が漸次死に絶えて、その領地が少數者の手に歸したからである）と、所有土地の牧場への轉化（これは今日もなほ行はれてゐる普通の經濟的諸原因によるほか、掠奪穀物や貢納穀物の輸入及びその結果としてのイタリア産の穀物の消費者の缺乏によつて惹き起されたのである）とのために、自由民は殆ど影を沒し、奴隸そのものも繰り返し繰り返し死に絶えてつねに新たな奴隸によつて補充されねばならなかつた。奴隸制が依然として全生産の土臺であつたのである。自由民と奴隸との間に立つ平民は、嘗てルンペンプロレタリアート以上に出でるに至らなかつた。一般にローマは嘗て都市以上に出でず、諸地方と一の殆ど單に政治的な聯關に立つにとどまつた、この聯關がまた再び政治的諸事件によつて中斷され得たといふことは言ふまでもないのである。

歴史に於てはこれまで問題はただ單に奪取といふことにかかつてゐた、といふ觀念ほどありふれたものはまたとない。野蠻人がローマ帝國を奪取する、とひとは云ふ、そしてこの奪取なる事實をもつてひとは古代的世界から封建制への推移を説明する。併しながら、野蠻人による奪取にあつて問題なのは、奪取される國民が、近代の諸民族の場合に於てさうであるやうに、産業的諸

生産力を發展せしめてみたか、それとも、彼等の諸生産力が主として單に彼等の結合及び共同組織を基礎とするに過ぎないか、といふことである。奪取は更に奪取される對象によつて制約されてゐる。證券の形をとつて存在する金利生活者の財産は、奪取する者が奪取された國の生産並びに交通諸條件に服従するのでなければ、決して奪取され得ないのである。近代的な産業國の總産業資本についても同様である。そして最後に、奪取はいつでも極めて直ぐに行き詰まる。そしてもはや奪取すべき何物もなくなれば、ひとは生産し始めざるを得ない。このやうに、生産の必要が極めて直ぐに生じて來る結果、定住する征服者たちによつて採用された共同組織の形態は、既存する諸生産力の發展段階に相應せざるを得ず、また若し最初からさういふことでない場合には、諸生産力に應じて自己を變化せざるを得ないのである。このことからしてまた、かの民族移動の後の時代に於て到る處に見られたやうな事實、即ち、奴隸が主人であり、征服者が被征服者から言語、教養及び慣習を極めて直ぐに採用したといふ事實、は説明されるのである。——封建制は決してドイツから出來上つたものとして持ち込まれたのではなく、却つてそれは征服者の側に於て、あたかも征服の期間中に於ける軍隊制度の戦闘組織のうちにその起源をもつてゐるのである。この戦闘組織が征服後に於て被征服諸國のうちに既に存在してゐた諸生産力の影響を受けて初めて本來の封建制にまで發展したのである。この形態が如何に甚しく諸生産力によつて制約されてゐたかは、古代ローマの諸遺制から發する別な諸形態を實施しようと試みて挫折したといふ事實がこれを示してゐる（カール大帝、等々）。

大産業と競争との中に於ては、個人の全部の生存條件、被制約性、一面性は、二つの最も簡単な形態、即ち私有財産と勞働とに溶解してゐる。貨幣の成立と共に、あらゆる交通形態及び交通そのものが個人にとつて偶然的なものたらしめられる。それ故に既に貨幣のうちには、從來の一切の交通は單に一定の諸條件のもとに於ける個人の交通に過ぎないものであつて、個人としての個人の交通ではなかつた、といふことが含まれてゐる。これらの諸條件は二つのもの——蓄積された勞働即ち私有財産が若くは現實的な勞働か——に還元されてゐる。これらのものが、若くはそのうちの一つが存在しなくなれば、交通は停止する。近代の經濟學者たち自身、例へば、シスモンディ、シェルブユリエ、等々、は、個人の聯合を資本の聯合に對立させてゐる。他方に於て個人たち自身は完全に分業のもとに包攝されてをり、そしてそれによつて最も完全な相互依存關係の中に立たしめられてゐるのである。私有財産は、それが勞働の内部に於て勞働に對立してゐる限りに於ては、蓄積の必然性にもとづいて發展し、そして當初にはいまだなほヨリ多く共同組織の形態を有してゐるが、更に發展するに従つて絶えずヨリ多く私有財産の近代的形態に近づいてゆく。分業の成立によつて既にその當初からまた勞働諸條件、即ち道具や材料の分割が行はれ、これと共に蓄積された資本の種々なる所有者への細分が行はれ、これと共に資本と勞働との間の分裂が行はれ、そして財産そのものの種々なる形態が與へられる。分業が益々發達するに従ひ、そして蓄積が益々増大するに従ひ、このやうな分裂もまた益々鋭く發達する。勞働そのものはた

だこのやうな分裂の前提のもとに於て存立することが出来る。

(個々の國民の個人の人的エネルギー——ドイツ人とアメリカ人——エネルギーは既に人種の混淆による——それだからドイツ人は馬鹿者だ——フランス、イギリス、等々に於ては、異民族が既に發展してゐた土地に、アメリカに於ては全然新開の土地に移植された、ドイツに於ては自然的な住民がそのままとどまつてゐた。)

かくてここに二つの事實が示される。第一に、生産力が個人から全く獨立な且つ切り離されたものとして、個人と並んで存する一の獨自なる世界として現はれる、このことたるや、あたかもその力が生産力であるところの個人が分裂し且つ相互に對立して存在してゐるところにその根源をもつてゐる、しかるに他方に於て、これらの力はただこれらの個人の交通と聯關とのうちに於てのみ現實的な力であるのである。それだから一方の側には諸生産力の一總體が立ち、これらの生産力はいはば一の物的姿態をとつてをり、個人自身にとつてはもはや個人の力ではなく、却つて私有財産の力であり、従つてただ個人が私有財産所有者である限りに於て個人の力であるに過ぎないのである。過去のいづれの時代に於ても生産力が個人としての個人の交通に對してこのやうな無縁な姿態をとつたことはない、蓋し彼等の交通そのものがなほ局限されたものであつたからである。他方の側には、これらの生産力に對して個人の大多數が對立する、彼等からはこれら

の力が切り離されてをり、従つて彼等は一切の現實的な生活内容を奪はれて抽象的な個人となつてゐる、彼等は併しながらそのことによつて初めて個人として相互に結合し得る状態におかれてゐるのである。彼等がそれを通じてなほ諸生産力並びに彼等自身の生存とつながつてゐる唯一の聯關たる勞働は、彼等にあつては自己活動の一切の外觀を失つてしまつて、ただ彼等の生活を不快ならしめることによつて、彼等の生活を單に維持してゐるに過ぎない。過去の諸時代に於ては、自己活動と物質的生活の生産とはそれらが異なる人間に歸屬してゐたことによつて分離されてゐたのであり、そして物質的生活の生産は、個人自身の局限性のためになほ一種の從屬的な自己活動の意味をもつてゐたのであるに反して、今日に於ては兩者の分離は、一般に物質的生活が目的として現はれ、この物質的生活の生産即ち勞働（これが自己活動の今では唯一的に可能な、しかし、我々の見る如く、否定的な形態である）が手段として現はるといふ姿をとつてゐる。

されば今や個人は、單に彼等の自己活動に達するためにばかりでなく、むしろ一般に彼等の生存を確立するために既に、現存する諸生産力の總體を領有しなければならぬ状態にまで立ち到つてゐる。この領有は先づ領有すべき對象——一の總體にまで發展し且つ一の世界的交通の内部に於てのみ存在するところの諸生産力——によつて制約されてゐる。それ故にこの領有は、この方面からして既に、諸生産力及び交通に相應するところの一の世界的性格をもつてなければならぬ。これらの諸力の領有はそれ自身物質的生產要具に相應する個人の諸能力の發展以外の何物でもない。この理由だけからしても、諸生産要具の總體の領有は、個人そのものに於ける諸能力

の總體の發展である。この領有は、更に、領有する個人によつて制約されてゐる。一切の自己活動から完全に除外されてゐる現代のプロレタリアのみが、諸生産力の總體の領有とそれに伴つて顯はれる諸能力の總體の發展といふことに存するところの、彼等の完全な、もはや局限されぬ自己活動を實現することが出来る。過去のあらゆる革命的な領有は局限されてゐた。その自己活動が制限されたる生産要具及び制限されたる交通によつて局限されてゐた個人は、この制限されたる生産要具を領有したのであつて、従つて一の新たな制限性を齎したに過ぎなかつた。彼等の生産要具は彼等の財産となつた。併しながら彼等自身はどこまでも分業のもとに、並びに彼等自身の生産要具のもとに包攝されてゐた。從來の一切の領有にあつては、個人の大衆は唯一の生産要具のもとにどこまでも包攝されてゐた。プロレタリアの領有にあつては、諸生産要具の大量は各々の個人のもとに、そして財産は一切の個人のもとに包攝されなければならない。近代の世界的交通は、それが一切の個人のもとに包攝されることによつてでなければ、個人のもとに包攝されることは出来ないのである。――

領有は、更に、それが如何に行はねばならないかといふ方法によつて制約されてゐる。それはただ、プロレタリアートそのものの性格にもとづいてやはりまた世界的なものであるのほかに團結によつて、且つ革命によつてのみ遂行され得るのである。この革命に於ては、一方では從來の生産並びに交通の仕方及び社會的組織の力が顛覆され、そして他方ではプロレタリアートの世界的性格並びに領有の遂行に必要なエネルギーが發展し、更にプロレタリアートはその從來

の社會的地位のためになほ彼から去らずにゐた凡てのものを脱ぎ棄てるのである。

この段階に至つて初めて自己活動と物質的生活とが合致する、このことは個人の全體的個人への發展並びにあらゆる自然生的性質の脱却に相應する。そしてそのときそれに相應して勞働は自己活動へ轉化し、從來の制約されたる交通は個人としての個人の交通へ轉化する。結合されたる個人による總體的な生産力の領有と共に私有財産は無くなる。從來の歴史に於てはつねになんらかの特殊な條件が偶然的なものとして現はれたのに反して、今や個人の分離そのものこそ、いづれかの一個人の特殊な私的營利そのものこそ、偶然的となつてゐる。

もはや分業のもとに包攝されてゐない個人を、哲學者たちは『人間』の名のもとに理想として表象し、そして我々によつて展開されたる全過程をば『人間』の發展過程として把握して來た、その結果、各々の歴史的段階に於ける從來の諸々の個人に對して『人間』がすりかへられ、そしてこのものが歴史の推進力として敘述されたのである。かやうにして全過程は『人間』の自己疎外の過程として把握されたのであるが、このことたるや、本質的には、後の段階に於ける平均個人がつねに前の段階に推し及ぼされ、そして後代の意識が前代の個人にまで推し及ぼされたことによ來するのである。もともと現實の諸條件を度外視してゐるところのこの顛倒によつて、全歴史を意識の發展過程に轉化することが可能であつたのである。――

市民的社會なるものは諸生産力の一定の發展段階の内部に於ける個人の物質的交通の全體を包

括してゐる。それは或るひとつの段階の商業的及び産業的生活の全體を包括してをり、そしてその限りに於ては國家及び國民を超越せるものである、とはいへそれは、他方に於てはまた、外に向つては國民として自己を主張し、内に向つては國家として自己を組織せざるを得ないものである。『市民的社會』といふ語は、財産諸關係が既に古代的及び中世的共同組織から辛苦して脱け出したところの十八世紀に於て現はれて來た。本來の市民的社會はブルジョアジーを俟つて初めて發展する。けれども、あらゆる時代にあつて國家及びその他の觀念的・上部構造の土臺を形作るところの、直接に生産及び交通にもとづいて發展する社會的組織は、ずっと同一の名稱をもつて呼ばれて來たのである。――

【C】 國家及び法律の財産に對する關係

財産の最初の形態は、古代的世界に於てもまた中世に於ても、種族財産であつて、それはローマ人にあつては主として戰爭によつて、ゲルマン人にあつては牧畜によつて制約されてゐた。古代の諸民族にあつては、一都市のうちに數多の種族が一緒に居住してゐたために、種族財産は國家財産として現はれ、そしてそれに對する個々の人間の權利は單なる占有、しかも種族財産が一般にさうであるやうに、單に土地所有にのみ限られたる占有として現はれてゐる。本來の私有財産は、古代の諸民族にあつても近代の諸民族にあつてのやうに、動産所有と共に始まる。――（奴隸と共同組織）（市民權にもとづく所有權）。中世から抜け出して前進しつつある諸民族に

あつては、種族財産は種々なる段階——封建的土他所有、職業團體的動産所有、工場制手工業資本——を通じて近代的な、大産業と世界的競争とによつて制約されたる資本にまで、即ち、共同組織の一切の外觀を脱ぎ棄て且つ財産の發展に對する國家の一切の影響を排除したところの純粹な私有財産にまで發展する。この近代的な私有財産に近代的な國家が相應してゐる、この國家たるや、租税を通じて漸次に純粹な私有財産所有者たちに買ひ取られ、國債制度によつて完全に彼等の掌中に落ち、その存在は取引所に於ける國庫證券の騰落に關係して、全然、私有財産所有者たち即ちブルジョアが國家に與へる商業上の信用に依存することになつたのである。ブルジョアジーは既に、それが一の階級であつてもはや一の身分ではないが故に、自己をもうや地方的でなく國民的に組織し、そしてその平均的利害に一の一般的な形態を與へるやうに餘儀なくされた。私有財産が共同組織から解放されたことによつて、國家は、市民的社會と並んだ且つその外にある一の特種な存在となつた。併しながら國家は、ブルジョアジーが外並びに内に向つて、自己の財産と自己の諸利害との相互的保證のために、必然的に自己に與へるところの組織の形態以外の何物でもないのである。國家の獨立性は、今日のところただ、そこでは身分が完全に階級にまで發展してをらず、そこでは先進諸國にあつては排除されてしまつた身分がなほ一の役割を演じてをり、そして或る混合狀態が存在し、従つてそこに於ては人口の如何なる部分もその餘の部分に對して支配的地位に立つに至り得ないところの諸國に於てのみなほ存在してゐる。これは特にドイツに於てさうである。近代的國家の最も完成せる例は北アメリカである。近代のフラン

ス、イギリス及び北アメリカの著述家たちは凡て、國家はただ私有財産のためにのみ存在する、といふ風に述べてゐるが、かくもこのことはまた個人の意識の中へも入り込んで行つたのである。

國家は、それに於て一の支配階級に屬する個人が彼等の共同の利害を主張する形態であり、且つそれに於て一の時代の全市民的社會が自己を總括する形態であるが故に、その結果、あらゆる共同的な制度は國家によつて媒介せられ、一の政治的形態を得るといふことになる。そこからして、あたかも法律が意志に、そしてしかもその實存的な土臺から切り離されたる意志に、即ち自由なる意志に基礎をもつかの如き幻想は生れて来る。しかるときには同じ仕方で權利もまた法律に還元される。

私法は、私有財産と同時に、自然生的な共同組織の解體から發展する。ローマ人にあつては私有財産及び私法の發展は進んだ産（#底本は「商」だが誤植であろう）業上及び商業上の諸結果を伴はずに終つた、蓋し彼等の生産の仕方にて凡て變化がなかつたからである。封建的共同組織が産業及び商業によつて解體された近代の諸民族にあつては、私有財産及び私法の成立と共に、ヨリ一層の發展の可能性をもつた一の新たな様相が始つた。中世に於て廣範圍の海上商業を營んだ最初の都市たるアマalfイは、直ちにまた海商法をも發達させた。先づイタリヤに於て、後には他の諸國に於て、産業と商業とが私有財産を更に一層發展させるや否や、直ちに發達せるローマ私法が再び採用され、且つ權威にまで高められた。その後ブルジョアジーが大いに力を得て來た

結果、王侯がブルジョアジーの手を通じて封建貴族を顛覆せんがためにブルジョアジーの諸利害を認容するに至つたとき、凡ての國に於て、フランスでは十六世紀に於てのことであつたが、法の本來の發展が始つた、そしてこの發展は、イギリスを除いては、凡ての國に於て、ローマ法典の土臺として行はれた。イギリスに於てもまた私法をヨリ進んで發達させるためには（特に動産所有の場合に）ローマ法の諸根本命題が取り入れられねばならなかつたのである。——（忘れてならないのは、法が宗教と同様自己自身の歴史をもたないといふことである。）

私法に於ては、現存する財産諸關係は普遍的意志の諸結果として表明される。使用及び濫用の權利そのものは、一方では、私有財産が共同組織から全然獨立になつたといふ事實を言ひ表はし、そして他方では、あたかも私有財産そのものが單なる私的意志に、即ち、物に對する任意的な處分權に基礎をもつかの如き幻想を言ひ表はすものである。實踐に於ては、濫用といふことは、若し私有財産所有者にして彼の財産及びそれと共に彼の濫用の權利が他人の手に移るのを見ることを欲しないならば、私有財産所有者にとつて極めて限定された經濟上の限界をもつてゐる、蓋し、一般に物は、單に私有財産所有者の意志に對する關係に於て見られるならば、なんら決して物であるのでなく、却つて交通に於て初めて、しかも法からは獨立に、物となるのである、現實的な財産となるのであるからである。（哲學者たちが觀念と名づけるところのひとつの關係。）（關係は哲學者たちにとつては觀念に等しい。彼等は單に『人間なるもの』の自己自身に對する關係を知るのみである、それだから一切の現實的な關係は彼等にとつては諸々の觀念と

なる)。——法を單なる意志に還元するこのやうな法律的幻想は、財産諸關係が一層發展すれば必然的に、或る人が物を現實に所有することなしに、その物に對する法律上の權限をもつことが出来る、といったことにまで進んでゆく。例へば、若し競争によつて或る土地の地代がなくなされる場合、その土地の所有者はもとより使用及び濫用の權利を含めてその土地に對する彼の法律上の權限をもつてゐはするが、しかし若し彼にしてなほそのほかに彼の土地を耕作するに足るだけの資本を所有してゐない場合には、彼はかかる權利だけではどうすることも出来ず、彼は土地所有者として何物も所有してゐないのである。法律家たちのまさに同じ幻想からして、法律家たちにとつてまたいづれの法典にとつても、個人が相互に諸關係を結ぶこと（例へば諸契約）は一般に偶然적であるといふこと、そして法典にとつてはこれらの諸關係はひとが任意に取り結びまたは取り結ばないことが出来且つその内容が當事者たちの個人的意志にもとづくやうな諸關係と看做されてゐるといふこと、が説明される。産業及び商業の發展によつて新たな諸交通形態、例へば、保險、會社、等々が形作られるたび毎に、法はいつでもそれらのものを財産獲得の諸々の仕方の中に取り容れるやうに餘儀なくされたのである。

分業の諸科學に及ぼす影響。

國家、法、道德等々にあつて壓迫といはれるものに等しきもの。

法律に於てブルジョアは自己に一の普遍的な表現を與へ得るのでなければならぬ、蓋しまさに彼等は階級として支配するのであるからである。

古代國家、封建制、絶對王制に於て見られるが如き共同組織には、この紐帶には、特に宗教的諸表象が相應する。

自然科學と歴史。

政治、法律、科學、等々の、藝術、宗教、等々の歴史なるものはなんら存在しない。

何故にイデオログたちは凡てのものを逆立ちさせるか。

宗教家、法律家、政治家。

法律家、政治家（經世家一般）、道學者、宗教家。一つの階級の中に於けるこのやうなイデオロギー上の細別に應じて分業による職業の獨立化が行はれ、各自は自己の職業をもつて眞の職業であると考へる。彼等の職業が現實に對して立つ聯關について彼等は諸幻想を作り上げるが、それは、このことが既に職業そのものの性質によつて制約されてゐるのであるが故に、それだけ益々必然的である。諸關係は法律學、政治學、等々に於ては、即ち意識に於ては諸概念となる。彼等はこれらの諸關係を超越してゐるのでないからして、彼等の頭腦の中に於けるこれらの諸關

係についての諸概念もまた固定せる諸概念である。例へば裁判官は法典を適用する、そこで彼にとつては立法が眞の、能動的な起動者の意味をもつてゐる。彼等の商品に對する尊敬がある、なぜなら彼等の商賣は普遍的なものを取扱つてゐるからである。

法のイデー、國家のイデー。通常の意識に於ては事物は逆立ちさせられてゐる。

宗教はもともと超、越、者の意識であり、現、實、的知識から生れる。ヨリ通俗的な……

傳統、法、宗教、等々にとつて、

個人はつねに自分自身から出發して來たし、つねに自分自身から出發する。彼等の諸關係は彼等の現實的な生活過程の諸關係である。彼等の諸關係が彼等に對して獨立化するといふこと、彼等自身の生活の力が彼等に對して壓倒的な力になるといふこと、は何に由來するか。

一言にしていへば、分業は……その時々的发展段階に於ける生産力に依存する。

土地所有、公共團體財産、封建的な、近代的な。

都市の財産、工場制手工業の財産、産業資本。

〔分業と財産の語形態〕

種々なる國民相互の諸關係は、どの程度までそれらの諸國民の各々がその諸生産力、分業及び國內交通を發展させたかといふことに依存する。この命題は一般に承認されてゐる。併しなから、單に一國民の他國民に對する關係ばかりでなく、またこの國民そのものの全内部構成もこの國民の生産とその國內並びに對外交通との發展段階に依存してゐる。一國民の諸生産力が如何なるところまで發展してゐるかは、分業の發展の到達してゐる程度がこれを最も明瞭に示してゐる。いづれの新たな生産力も、それが從來既に知られてゐる諸生産力の單に量的な擴大（例へば所有地の開墾）でない限り、分業の新たな發達を結果として伴ふものである。

一國民の内部に於ける分業は、先づ、産業勞働及び商業勞働の農耕勞働からの分離、そしてそれと共に都市と農村との分離並びに兩者の諸利害の對立をもたす。分業のヨリ一層の發展は商業勞働の産業勞働からの分離に導く。それと同時に、これらの種々なる部門の内部に於ける分業によつて、更に、一定の勞働のために協働する個人の間種々なる部類が發展する。これらの個々の部類の相互に對する地位は、農耕勞働、産業勞働及び商業勞働の經營の仕方（家長制、奴隸制、身分、階級）によつて制約されてゐる。これと同一の諸關係が、ヨリ發展した交通の場合に、種々なる國民相互の諸關係の中に現はれる。

分業の發展段階が種々異なるに従つて財産の形態も同じやうに異なる。換言すれば、分業のその

時々の段階がまた労働の材料、要具及び生産物との關係に於ての個人相互の諸關係をも規定するのである。

財産の最初の形態は種族財産である。それは、一の民族が狩獵と漁撈によつて、牧畜によつて若くはせいぜい農耕によつて生活するといふ生産の未發達な段階に相應する。この最後の場合には、それは大量の未開墾地を前提してゐる。分業はこの段階に於てはなほ極めて僅かしか發展せず、家族内に存在する自然生的な分業の多少擴大されたものにとどまる。従つて社會構成は家族の擴大たるにとどまつてゐる、即ち、家長的な種族の首長があり、そのもとに種族の成員があり、最後に奴隸があるといふ風である。家族のうちに潜在的に存在する奴隸制は、人口及び欲望の増加に伴ひ、また戰爭にせよ交易にせよ、對外交通の擴大に伴ひ、初めて漸次に發展する。

第二の形態は古代的な公共團體財産及び國家財産である、これは特に契約若くは征服による數多の種族の一都市への結合から生ずるものであつて、そしてこの場合にも奴隸制は依然として繼續して存在する。公共團體財産と並んで既に動産私有そして後にはまた不動産私有が發展するが、しかしそれは一の例外的な、公共團體財産に對して從屬的な形態としてである。公民はただ彼等の共同社會のうちに於てのみ彼等の労働奴隸に對する支配力を所有してをり、そのために既に、公共團體財産の形態に拘束されてゐる。公共團體財産なるものは活動的な公民の共同の私有財産であつて、これらの公民は奴隸に對する關係上この自然生的な聯合の仕方のうちにとどまることを餘儀なくされてゐるのである。それだから、これを土臺とする社會の全構成は、そしてそ

れと共に民族の力は、特に不動産私有が發展する程度に應じて同じ程度に崩解する。分業は既にヨリ一層發展してゐる。我々は既に都市と農村との對立を、後には都市の利害を代表する國家と農村の利害を代表する國家との間の對立、そして諸都市そのものの内部に於ても産業と海上商業との間の對立を見出す。市民と奴隸との間の階級關係は完全に發達してゐる。

私有財産の發展に伴ひ、ここに最初に、我々が近代的な私有財産の場合に、ただヨリ擴大されたる規模に於て、再び見出すであらうところのものと同一なる諸關係が出現する。一方では私有財産の集中がそれであつて、これはローマに於ては極めて夙くから始まり（リキニウスの耕地法がその證左である）、内亂以來そして特にカイザル治下に於て甚だ急速に行はれた。他方ではこのことと聯關して平民的小農のプロレタリアートへの轉化がそれである、けれどもこのプロレタリアートたるや、有産市民と奴隸との間に立つその中途半端な地位のために、なんらの獨立な發展にも到らなかつた。

第三の形態は封建的若くは身分的財産である。古代が都、市及びその小領域から出發したとすれば、中世は農村から出發した。大面積の土地の上に稀薄に散在してゐた既存の人口——この人口は征服者によつてなんらの大きな増加も與へられなかつた——が出發點のこのやうな變化を制約した。それだから、ギリシア及びローマとは反對に、封建的發展は、ローマの征服並びに當初それと結びついて行はれたところの農業の普及によつて準備されたる、一の著しく擴大されたる地

盤の上に於て始まつてゐる。没落しつつあるローマ帝國の最後の數世紀及び野蠻人による征服そのものは大量の諸生産力を破壊した、農耕は低下し、産業は販路の缺乏のために衰頹し、商業は弛緩し若くは暴力によつて杜絶せしめられ、農村及び都市の人口は減少した。このやうな既存の諸關係及びそれによつて制約されたる征服の組織の仕方は、ゲルマン人の軍制の影響のもとに、封建的財産を發展せしめた。封建的財産は、種族財産及び公共團體財産と同様に、これまた一の共同組織に基礎をおいてゐる、けれどもこの共同組織に對して、直接に生産にたづさはる階級として對立するものは、古代の共同組織の場合のやうに、奴隸ではなくて、農奴的な小農である。封建制が完全に發達すると同時に、なほこの上に都市に對する對立が加はつて来る。土地所有の教權制的構成及びこれと聯關する武裝せる從臣は貴族に農奴を支配する力を與へた。この封建的構成は、まさに古代の公共團體財産と同様に、生産にたづさはる被支配階級に對しての一の聯合であつた、ただ聯合の形態と直接の生産者たちに對する關係とが違つてゐただけであつた、なぜならそこには違つた生産諸條件が存在してゐたからである。

土地所有のこのやうな封建的構成に相應して、諸都市に於ては職業組合的財産、即ち、手工業の封建的組織が存在した。財産はここでは主として各個人の勞働に存した。聯合せる掠奪貴族に對抗しての聯合の必要、産業家が同時に商人であつた時代に於ての共同の市場家屋の必要、繁榮せる諸都市へ流れ込んで来る逃亡農奴たちの増大してゆく競争、全國の封建的構成、これらのものが同業組合を招來した。個々の手工業者たちが諸小資本を漸次に節約して蓄へたといふこと、

そして彼等の數が人口の増加に拘らず動かなかつたといふことが職人並びに徒弟關係を發展せしめた、そしてこの關係は都市のうちに農村に於けるそれと類似の教權制的關係を成立せしめたのである。

このやうにして、封建時代に於ては、主要財産は、一方では、それに結びつけられてゐた農奴勞働を含めての土地所有に存し、そして他方では、職人の勞働を支配する小資本を含めての自己自身の勞働に存した。兩者の構成は局限された生産諸關係——僅少な、粗野な土地耕作及び手工業的な産業——によつて制約されてゐた。分業は封建制度の開花期にはあまり行はれなかつた。いづれの國も自己のうちに都市と農村との對立をもち、身分の構成はもとより甚だ鋭く現はれてゐたが、しかし農村に於ける王侯、貴族、僧侶と農民の差別、そして都市に於ける親方、職人、徒弟及び間もなくまた日傭賤民の差別のほかにはなんら重要な分割は行はれなかつた。農耕に於ては分業は零細耕作によつて困難にされ、その側ら農民そのものの家内産業が現はれ、産業に於ては勞働は個々の手工業そのものに於ては全然分割されず、個々の手工業の間にも極めて僅かしか分割されてゐなかつた。産業と商業との分割は比較的古い都市では既に存在してゐたが、比較的新しい都市に於ては都市が相互に關係を結ぶに至つた後の時代に初めて發展した。

比較的大きな國々が封建的な王國に總括されるといふことは、都市にとつてのやうに土地貴族にとつて一の必要であつた。それだから支配階級即ち貴族の組織はどこでもひとりの帝王を上戴いてゐた。

岩波文庫

ドイツ・エ・イデオロギー

定價 二十錢

昭和五年七月五日印刷

昭和五年七月一五日發行

昭和十二年九月二五日第九刷發行

譯者 三木清

發行所 岩波書店

作成者 石井彰文

作成日 2007年4月19日：小修正2014.11.17

